

の才子ではあり又度量もある人ですから今の鋭敏な法王、常識に富んで居る法王から見ます時分には大變立派な師匠に見えたでせう、ナゼならば外にマダ三人の間答教師はありますけれども一番信用されたのが此人であるからです、併し法王が大きくなるに従て最早や其稽古も不必要になつた、ソコで此ツアンニー、ケンボは自分の國(モンゴリアのブルヤツド)へ歸り豫て露西亞政府からの委囑もあつたでせう先づ斯う云ふ風に成功したと云ふことをいろ／＼の證據物件に依て證明したものと見え露西亞政府はソレに對して澤山な機密費を與へツアンニー、ケンボは又之を自分の用に使はずに西藏へ持つて來て皆良い方法に使つたです、大に機密費を使ふのみならず又露西亞の都から西洋小間物類を澤山に持つて來ましたが夫等の中には時計とか或は小銃、いろいろな珍しい物があるのて、ソレを只法王に上げるわけではない、當時最も勢力のあるシャーターと云ふ若い宰相にも餘程旨く取入つたです、其金はドレ丈に使つたか秘密で分りませんけれども先づ外の大巨達へ澤山與へた事から見ますとシャーターに對しては餘程與へたに違ひない、ナゼならば其後シャーターと其ツアンニー、ケンボとの關係は兄弟よりも尙ほ親密になつたからです、ソレのみならず法王はツアンニー、ケンボの言ふ事なればドツ云ふ事でも肯くと云ふ程に惚込んで了つた、ソコで先づ上の方の勢力をツアンニー、ケンボ其れ自身に集むることが充分に出來た

僧侶籠絡の手段 其上西藏では最も勢力のあるのは坊主社會であるから此僧侶を手に入れない

くちやアならん、其僧侶を手に入れると云うた所で一々自分の好い處を吹聴する譯にも行かず、ドウする譯にも行かない、ソコで例の「ゲ」と云つて布施金を各大寺の僧侶に對して施したソレが一度ならず二度ならず何遍も遣つたです、僧侶なると云ふ者は無論政治上の考などは少しもありませんから「ツアンニー、ケンボは大變な大金持て其金を西藏の僧侶に供養する、ナカ／＼感心な事だ、出來ない事だ」と云つて譽め立てる者許りて、ツアンニー、ケンボが其金を何處から持つて來たかと云ふ様な事に就ては少しも研究しない、只サウ云ふ様な事に少し氣の附く様な僧侶が念の爲政府の人に聞くと政府の人はソレに就て「ツアンニー、ケンボの故郷では皆が彼の人を自分の國の王様のやうに尊んで金を澤山上げるものだから那んなに澤山な金が出来て來たんだ、何も不思議な事はありませんしな」と斯う云ふやうな説明を聞くものですから別段僧侶だつて怪まないうて、ソコで誰も貰ふと云ふことは餘り心悪くは感じないもので殊に西藏人は一己の利害を見ることに機敏でありますからサウ云ふ風に度々金を施して呉れるのを大に喜んで二人の言出す事は是非善惡に拘はらず先づ盲従と云ふ仕方に至つたです、ソレで以てツアンニー、ケンボ其人は大に西藏で成功して來た

一般人民の籠絡手段 所て一般人民も矢張自分の味方にする必要がある、其遣方が又ナカ／＼旨いですが、斯んな風に着々と外交政略を其國の人情風俗に従ひ其人民の慾望、性質等に能く適つたやうに施すと云ふのは餘程感心なものだと私は大に感服しました、其遣方は先づ斯うです、一

般人民の心を取入れる方法としては私が丁度此方へ来る少し前に其事は着手されて居った、ソレは別段金も掛けないがナカ〜旨い、それはドウ云ふことかと云ひますのに西藏では新教派の或る普しのラーマが拵へた書物の中に豫言即ち未來の識言があるです、其識言は只其ラーマ一人が言うたのみならず又随分外にもソレに和して言出した者が澤山あるのて、殆ど人民一般の腦髓へ染込み書物の上で知ッて居るのでなくてお伽噺の上で知ッて居るです、

第百七回 西藏と露西亞

未來の大王 其宣言に依ッて来る所を釋ぬると今より二千年以降一千二百年までの間に於てカシミール地方は大變佛教か盛であつた元來其國は物産及び景色に至まで實に立派なもので氣候の如きも一年中大抵杜鵑が啼いて居ると云ふやうな場所もあるさうですから兎に角非常に優美な國である其カシミールの少し北の處にも矢張開けて居った國があつて其處には羅漢或は菩薩と云ふやうな方も居られたさうです、詰りソレを種にしたのです其の優美な國が一日回々教の爲めに滅されて佛教と云ふものは凡へ亡くなつて了つたけれども必らず他日起きるべき筈である、と云ふのは前には盛んに佛教が行はれて居ったのであるから其原因に依ッて他日又佛教が行はれるやうに成るであらうと所謂正因果の道理を用ひ過ごして牽強附會の説を考へ出したのです、今云ふ通りカシミールの北部の菩薩國は今は何々教の爲めに蹂躪されて居るが併し必ず將來に於て其菩薩國から世界を統一する所の大王が起ッて来るに相違ない、其大王には西藏の新教派 開山でデエー、ソーン、カーワと云ふ方がなられるのである、其大臣になるのが又其弟子のジャムヤン、ヂョエヂエ、或はチャムバ、チョエヂエ或はケン、ツン、ツプとか云ふやうな方かなられるので、其人達が其國を再興して大いに佛教の光を世界に放つやうに成ると云ふ未來記があります、初その國の名をチャン、シャンバールと云ふ、チャンと云ふのは北方と云ふ意味でシャン、バールと云ふのはカシミールの北に在る都か、土地の名になつて居るやうに思ふです、所が新教派の或るラーマ達が豫言書に云ふ如き佛法の大王か仕れる前にドウかサウ云ふ結構な國を見に行きたいものだと言うて随分出掛けた人がある、其道程も亦サウ云ふ想像説を拵へた宣言者に依ッて書かれてあるソレは印度の佛陀迦耶からして西北に一千二百哩も進んだ處に在ると云ふのですから先づカシミールの方向に當ッて居るです、デ其道筋もいろ〜と書いてありますすが何にしるユトビヤ的想像説であるから一々ソレを證據立てし斯うであるのドウであるのと云ふ必要は無論ない、兎に角西藏の佛教が紊れて殆ど其弊害に堪へない時分にサウ云ふ立派な有力な佛法の大王が出て来て此世界を統一すると云ふことが書物に豫言されてあつて而して其通り西藏人は信じて居るのである、

らうと所謂正因果の道理を用ひ過ごして牽強附會の説を考へ出したのです、今云ふ通りカシミールの北部の菩薩國は今は何々教の爲めに蹂躪されて居るが併し必ず將來に於て其菩薩國から世界を統一する所の大王が起ッて来るに相違ない、其大王には西藏の新教派 開山でデエー、ソーン、カーワと云ふ方がなられるのである、其大臣になるのが又其弟子のジャムヤン、ヂョエヂエ、或はチャムバ、チョエヂエ或はケン、ツン、ツプとか云ふやうな方かなられるので、其人達が其國を再興して大いに佛教の光を世界に放つやうに成ると云ふ未來記があります、初その國の名をチャン、シャンバールと云ふ、チャンと云ふのは北方と云ふ意味でシャン、バールと云ふのはカシミールの北に在る都か、土地の名になつて居るやうに思ふです、所が新教派の或るラーマ達が豫言書に云ふ如き佛法の大王か仕れる前にドウかサウ云ふ結構な國を見に行きたいものだと言うて随分出掛けた人がある、其道程も亦サウ云ふ想像説を拵へた宣言者に依ッて書かれてあるソレは印度の佛陀迦耶からして西北に一千二百哩も進んだ處に在ると云ふのですから先づカシミールの方向に當ッて居るです、デ其道筋もいろ〜と書いてありますすが何にしるユトビヤ的想像説であるから一々ソレを證據立てし斯うであるのドウであるのと云ふ必要は無論ない、兎に角西藏の佛教が紊れて殆ど其弊害に堪へない時分にサウ云ふ立派な有力な佛法の大王が出て来て此世界を統一すると云ふことが書物に豫言されてあつて而して其通り西藏人は信じて居るのである、

露西亞皇帝は即ち化身

ソコでツアンニリ、ケンボと云ふ先生は其信仰力に乗じて書物をつ捧へた、其チャン、シヤン、バーラは、即ち取も直さず露西亞國である、露西亞の皇帝は全くデエー、ソン、カーワの化身である、露西亞の皇帝の善い事と云ふものは常に人民を撫育して自由を與へ而して外國に對しては極く親切に附合はれる、昔しの金輪を輪じた所の徳を備へた大王と雖も及ばぬ程の徳を以て居られるお方である、其徳を以て居られる所から考へて見ても又彼の宣言に對照して見ても其方角と云ひ其場所と云ひ全く符節を合はして居る、だから此事に就て疑ひを懐く者は取りも直さず佛教に敵對する者である即ち西藏の新教派を開いた開山の大概意に敵對する所の者である、誠に有がたい事は斯う云ふ識言があつた爲めに今日西藏新教派の開山チエー、ソン、カーワの生れて居る其國を知り其方角を知るとが出来たのは結構な譯である、之を要するに露西亞皇帝は所謂チャン、チユブ、センバ、センバ、チエン、ポ(菩薩薩陀、摩訶薩陀と云ふ意味)であるから之に敵對することは出来ん、之を尊崇しなければならんと云ふやうな風にチャンと此西藏國民の信仰力に合はして如何にも信じ得られる様に書いてあるソレが西藏語丈けて書いてあるのみならず又モンゴリヤ語でも書いてある、私は其書物を直接に見ることが出来なかつた、けれどもその書物を見た人から委しく説明を聞いたのです、其書物を一ツ是非見たいと思つて居る中に私が彼の西藏國から出ねばならぬやうに成りましたが其書に譯の分らぬ言葉が一つ書いてあると云ふ様子を聞いて

て見るに或は露西亞語ではないか知らんと思ひました、何しても三國の語で對照して其書物が出来て居るらしくサウして其書が西藏に澤山配付されて居るさうです、けれども皆秘密にして唯一の尊い經文を得たかの様に西藏人が隠して持つて居るから無理に夫れを穿鑿して見やうと思ふと却て疑ひを惹く種に成りますから私は敢てソレを見ませんがマアさう云ふ様な意味に記されて居ることは疑ひないです、ソコで西藏一般人民の希望は北方に在る露西亞といふ言葉を我國語に翻譯すれば則ちチャン、シヤン、バーラである、其國の大王が遠からず世界を統轄して世界佛教の主人公となるのであると信仰を置く様になつて來たてす今日の形勢上は政府より下は人民に至るまで殆ど露西亞に心を傾けるやうになつて來た

露西亞最負の原因

ソレから露西亞最負と云ふことが餘程盛になつて來たてすがソレには尙ほ他の原因がある、露西亞から輸入される所の西洋小間物は皆上等の物計りである、其上等な物とても賣るのでなく皆人に遺るので、英領印度から輸入される物は皆安い詰らない物計りである、ソレは其等で西藏の商隊なり一己人の商業家が印度に出掛けて高い物を買つて來た所が殆ど賣ることが出来ない、賣れた處で利益を見られんものですから成べく安い物を仕入れる、安い物を仕入れなくては運送費が高く掛るから逆も爲て見やうがない、所が露西亞のは賣る積りて持つて來るのでなく始めから只遺る積りて持つて來るからドンな良い物を持つて來ても宜い譯で、ソコで西

藏ではドウも英吉利のはデキに毀れて了ふけれども露西亞の物はナカ／＼堅固である、同じ西洋品ではあるけれども餘程露西亞の方が宜い、是れに依つて見ても露西亞の國の確實なることを信ずるに足ると云ふやうな議論をして居る人間もある

露帝の贈物 今より四年程以前の事と思ふ、時は確に分らない秘密であつたから、先づ夫位前に露西亞の皇帝から西藏の法王に對し其ツアンニー、ケンボの手に依つてビシヨツプの法衣を贈られた、所が西藏の法王は喜んで其立派なる金色の衣服を受けたさうです、ソレは只衣服を受けたと云ふ丈けてなくつて、其衣服を受けると矢張ビシヨツプ（大僧正）の位も受けたことになるのである、餘程奇態である、希臘教を國教として居る國の皇帝が其希臘教の僧侶の最高官即ちビシヨツプの位を以て佛教の僧侶たる西藏法王に與へると云ふのは實に奇態である、其位を受ける法王は無論露國にも矢張佛教が行はれて居つて一番最高等の僧侶は斯う云ふ物を受けるのである位の事を受けたので無論世界の事情に通じないからサウ云ふ欺きを受けるのであります、若し是れが希臘教のビシヨツプの法衣であるのが解つたならば自分の身に着けることは愚か、見ることも許さぬ位のものである、けれども知らない所からサウ云ふ間違つた事に陥るので、是れも詰り旨くツァー、ケンボの口車に乗つて胡摩化されて了つたのです、斯う云ふ事になるに就て與つて力あるのはソニ宰相の長官シャーターである、

シャーターの來歴 此のシャーターと云ふ人に就ても述べねばならん事がある、是れは矢張宰相家華族家の中ではナカ／＼立派な位置を占めて居る人で此間お話をしましたテンゲーリンと云ふ大寺とは昔から相反目し互に敵視して居るのであつて既に法王が位に即くまではテンゲーリンのテーム、リンボ、チエが法王であつた、其時分には西藏に居ることが出来ないてダーチリンの方へ逃げて行つて居つた、或はシツキムの方を廻りなどして大分に長く流浪して居つたと云ふ、其時分に英吉利政府の遣方を見或は英吉利政府が印度の土民を征服した歴史杯を聞いて大いに英吉利政府に對して恐れを懐いたのである、併し英吉利の事情には大分に通じて居るお方て今日西藏の國で少なくとも英領印度國の事情に通じて居る者は此人を除いて外にはないので、英吉利政府と戦つた所が到底勝を得ないとすれば我國は支那に據るか或は他の強國に據らなくては到底生存を全ふすることが出来ない、と云ふ考は確に此若宰相の心に起つたに相違ないです、サウ云ふ話が其人の口から折々出た事も傳聞しましたからソレは間違ひない、テンゲーリンのテームリンボチエが位を今の法王に譲つた時に此人が歸つて來て殆ど法王が位に就くと同時に宰相の位に上られたソコで豫て敵視して居つた所のテンゲーリンを滅ぼさうと企てたに違ひない、面は極く優しく見えて居るけれども随分陰謀に富んで居る先生である、ソレでテンゲーリンの臣下がいろ／＼の事を遣つたに附込んで其主人のテームリンボチエにまで累を及ぼして遂に縲纆の中に横死するに至らしめたのである、

既にシャーターが宰相に任ぜられた時分に前の法王であつたテームリンボチエがア、もう乃公の命も是れて極つたと云つたさうですがソレは詰りシャーターの爲めに殺されると云ふことを先見したので不幸にして其豫言の中つたのは如何にも氣の毒である、兎に角此人は西藏ではナカク外交に力を用ゐて居る人物である、内地の事ではあるが自分の敵を滅すに足る丈の技術を備へて善にもあれ悪にもあれ残酷な道方て自分の望み通り敵を滅ぼし遂げた位の人物であるから外交の事に掛けても一廉の腕前があるに違ひない、此人が又非常に露西亞のツアンニー、ケンボと親しいのみ非常に露西亞政府を慕つて居る所を見るとツアンニー、ケンボが旨く此人を取込んだならずに違ひない、ソユで彼ビショップの法衣を貰ふことも實は外の大いの中には知らない者もあらうし又露西亞と云ふ國は果して立派な國であるのか無いか分らんのに浮々した事をしたらば大變な事が起りはすまいかと云ふやうな疑ひを懐いて實に戦々兢々として居る者があるんです、けれども西藏の内閣と云ふものは殆ど決斷權は宰相一人に在つて内閣員總てが一致して事を爲し遂げると云ふことは決してない、況して個人としては無論自分の意見を吐くと云ふやうな事は決してない只其先任大臣の言ふことを聞いて「御尤もて御座います」と云うて盲従するのが詰り普通の有様であるですから、充分露國を疑つて居る者もある、私は或宰相の口から内々聞いた事はシャーターがツアンニーケンボと親しくすると怪んだとて併し此宰相は法王がビショップの法衣を貰ふ時に自分で拒む丈け

の勇氣もなければ又拒んで見た所が實際行はれない事を知つて居るから云はなかつたのでせう
支那の無勢力 其上マダ西藏をして露西亞に頼るの心を深からしめた所以は日清戦争以來支那の勢力が日々に衰へて西藏の方へは全く及ばぬやうになつたからでもある、是迄は西藏の法王が少し變つた事を遣ると云ふと支那政府からデキに異議を唱へられ或は其支那皇帝の命令の下に罰せらるゝと云ふ虞があつた、全く君と臣の關係程になつて居つたです、所が此頃は餘程變つた事を遣つても手を着けることが出来ない、即ちテンゲリンを滅ぼし而してテームリンボ、チエを亡き者にすると云ふやうなア、云ふ大騒動を起しても支那はソレに對して一定の責を問ふことも出来ない、又問ふて見た所が到底駄目なで、ソレが氣に喰はなければお前の下に附かないと斯う云はれた時分には西藏に在る支那の兵隊は西藏國人に殺され西藏在留の支那人も勿論西藏人に殺されて了ふ丈けの話で通も今日の有様では支那政府が西藏内地に踏込んで征伐すると云ふやうな事は出来ない、其事は西藏人はモウ能く知つて居る、ですから法王其れ自身の考としても支那政府には據ることが出来ず又英國の主義と云ふものは旨く人を懐けて其國を奪ふのが主義であると聞いて居るので固より之と親しむことが出来ない、テ其一番英國に反對して居る露西亞と親しく交際すると云ふことは外交上實に無上の策であるといふやうな工合に考へたと察するです、彼の考へ深い法王が譯もななく彼の綺麗なビショップの法衣を呉れたからと云ふて貰うやうな人でありませぬから屹度サウ云ふ

考を起して貰ったものと私は信じて居る、其ビツヨツプの法衣を貰ふた返禮として法王はゾーニエル、チエンモ(侍従長)と其従者三名許りを使節とし明治卅三年の十二月拉薩より北の方へ路を取り、ニー、ケンボの國を経て鐵道に乗り幾月かを経て露西亞の首府に達し而して西藏の珍ツァンしい物を露西亞皇帝に差上げて充分に返禮の敬意を表したと云ふ、其時に露國に於て結ばれて来た

秘密條約

と云ふものはドンな條約であるか私は知らんけれどもゾーニエル、チエンモなる者が何でも明治卅四年の十二月か翌年の一月か月は駝と分りませんが其頃に西藏に歸つて来た、ソレから二月経つて後に私が拉薩府を出て東北方の甘里許りある處へ指して乘馬して運動に出掛けた、運動と云ふのは名丈けて實は其邊の民間の様子を見に參りました、其時分に駝駝が二百疋許り東北の方から降つて来た、其駝駝の荷物は皆箱詰て上は皮で覆てあるから何が入つて居るか分らない、けれども大きな駝駝の荷物としては其荷嵩は極く小さい、テ非常に荷が重さうである私の察する所ではモンゴリヤ人が銀塊でも持つて来たものであらうと云ふ考を起したです、其駝駝牽に大層重さうであるが何か入つて居るのかと尋ねますと「何だか知りませんが、大方銀塊でもありません」「何處から来たのか」私共は途中から頼まれたので能く知りませんが何でも北方のモンゴリヤの方から来たらしう御座います、確に支那から来たんじゃないかと告げた、其中に露西亞の方から一緒に来た人間が居つたか居らんかソレは分らなかつた、テ私は其邊を廻つて大藏大臣の宅へ歸つて来ます

と現任大藏大臣も歸つて来られて「今日は澤山露西亞から荷物が着きました」と云ふ前任大藏大臣への話です「ソリヤ何か」と云ひますと「少し憚る事がある」と云ふ、即ち私の聞きませすのを思ひやうですから私は其場を避けました、其時には其荷物は何か不明であつた、所が又政府の側の人で極く秘密を守ることの出来ない或高等官が一人あつたです、話の序に私が何心なく駝駝の事を言出して「私の見た所では二百疋位来た」と云ふたら「二百疋来たのは此間の事て其前に三百疋許り来た、實はコリヤ秘密であるけれど共……」「一體彼の荷は何ですか、銀塊ですか」「銀塊があんなに澤山来るものですか、アリア露西亞ヘザーニエル、チエンモが法王の使節として行かれて事が纏つたので呉れたのです」「其品は何ですか」「鐵砲の彈丸、其外西洋の珍らしい物を澤山持つて来られたです、マア我國も是れて英國から攻めて来られた所が何も恐るゝに足らない、英國と合戦を遣ると云つて来れば早速應ずる、極く鋭利な良い鐵砲が得られたから是れてマア充分遣り付けることが出来る」と云ふて意氣揚々として話されたです、私は其後或處で其鐵砲を一挺見ました、勿論新式の物ではあるけれども餘り遠距離に達しない、到底合戦の時に合ひさうには思はれない、併し西藏人は實に立派なものとして取扱ふて居るです、所が西藏人は一向羅馬字を知らんものですか何處で拵へた鐵砲か分らない、矢張露西亞の都で出来たものと信じて居るですが其鐵砲の銘を見ますと亞米利加製であります、何千挺来たか分りませんが駝駝五百駄の半分以上は鐵砲であつたらしい、

斯う云ふ風になつても支那政府は西藏政府の爲す儘に放任して居るです、併し随分ヤキモキと氣を揉んでいろく〜と方法は運らして居る、現にツアンニー、ケンボが來た時杯は非常に支那の駐藏大臣が骨を折りツアンニー、ケンボを捉へてドウにか一つ方法を運らさうと仕掛けなければ、西藏政府が保護を加へて居るからドウも其人を捉へることが出来て大分ゴタ〜が起り掛けた際にツアンニー、ケンボは突然ダーデリンの方へ逃げて行つて了つた、或時はチパールの方に逃げて了つた事もある、此人は英吉利政府の方でも充分眼を着けチパール政府でも充分注意して其一舉一動を注視して居るです、サウ云ふ風に

露國と西藏との關係　　が段々深くなつて來ましたから全く露西亞政府の外交は、に成功し而して此西藏を踏臺にしてヒマラヤ山上から英領印度に臨んで印度の全權を掌握して了ふ丈けの土臺は確に出來たかと云ふに今日はソレ丈けの見込はないです、尙ほ仔細に觀察すると西藏政府部内でも眞實に露西亞に對して心を寄せて居るのは法王と長官宰相シヤーター二人位の者である、其他の者は先づ盲従の有様で譯が分らず仕向け次第でどつちにても成る人許りです、若し露西亞が此上非常の勢力を得て行けば無論西藏は露西亞に附くてせう、併し露西亞政府が其願望通り此西藏國を踏臺として天然の萬里の長城ヒマラヤ山上から英領印度に臨むと云ふやうな大望を成就しやうと云ふにはマダ大分に時間があるやうです、ナゼならば政府の内でも既に猜疑心を起して反對の傾向

を持つて居る者が澤山ある、現に斯う云ふ事を云ふて居る人がある「成程露西亞と云ふ國は大菩薩の王様の國かは知らんけれども今の世に當り人各々利益のみを争ふ其中に西藏國に對し譯もないのに澤山な金を施し尙ほ澤山鐵砲杯を呉れると云ふのはコリヤ恐らく何か悪意があつて我國を取る所の餌にするのではあるまいか、其餌に釣られて此露國を露西亞の爲に撃滅されると云ふ事は由々しき大事である」と云ふて居る人間もある、誠に感心な考で此位の考を持つて居る人は西藏には澤山はないけれども私は折々聞いた事がある、サウ云ふ人は相當の位置を占めて居り又着實の考のある人です、隨分政府部内に於ても有力な説として人に傳へられる、其傳へられた話は法王と長官宰相との耳には入りませんけれども其他の人の耳には案外早く入つて居るです、只表面に現はれて居る傾向だけを以て或はツアンニー、ケンボ其人の心算計畫が旨く圖に當つて居る處丈けに眼を着けて内部の事情を疎かにすると露國政府は澤山金を使つて却て飛んでもない馬鹿を見ることがあるかも知れんと思ふ

第百八回 西藏と英領印度

鎖國の原因　　西藏人は非常に外國人を款待する氣味がある、今日は英國人に對し非常な怨憎心

を懐いて居りますけれども其實西藏人はドノ國民に對しても非常に欺待する性質である、だから英國政府が少しく恩を施すと云ふ方針に出てたならば今日露西亞が西藏を踏臺にして英領印度に臨むと云ふ憂もなく充分に成功することが出来たのである、是れは過去ツた事で今更ら言うて見た所が到底駄目な譯ですけれども英領印度政府が西藏國の人情及び政府の意向を能く知らなかつたから詰り斯う云ふ過ちに陥つたと斷言するに憚らない、斯くの如く西藏國民は戰爭以來一般に英國に對して非常な悪感情を懐いて居るのみならず西藏で名高い學徳兼備の高僧センチエン、ドルヂエー、チヤン（大獅子金剛寶）と云ふ方はサラット、チャンドラダース師が入藏事件に座して死刑に處せられたとから西藏國民は一層英領印度に對し悪感情を懐いて全然鎖國主義を執るやうになつた、獨り英領印度に對してのみならず其結果北方の露西亞人に對しても又西方の波斯人に對しても皆に對して嚴重に鎖國主義を實行し其後は印度教徒さへも西藏に入る事が出来んやうに成りました、ですから英國では殆ど西藏に對しては戰爭でもしなければ手の着けやうがない位です、其點に於ては露西亞は確に英國よりも便宜の地位に立ツて居る

英政府の懷柔策

併しながら英領印度政府は西藏國に對しては何等の策も施さないかと云ふに充分に注意を加へて西藏國民の感情を恢復し善い感情を持たすやうに力めて居ることは今日ダーチリン及びシツキム等の地方に於ての實際を見ても明に判るです、ソレは英領印度政府は特に西藏

から出て来た所のダーチリン或はシツキムに居る西藏人に對し他の土民よりは充分に保護を與へて居る、其一例を云ふと西藏人の子女は何處の學校に入つても政府で立て、居る學校なれば月謝は要らないです、ソレ丈けてはない、其中の惻愍なる小供を撰拔し官費生にして充分教育する、デ此頃では學業成つて随分英領印度政府の下に在つて土地の測量、郵便事務、或は教育に従事して居る者も大分あります、其内の多くは土地測量師である、此等は決して輕々に看過することの出来ない英領印度政府の遣方であるのみならず西藏一般の國民の爲めにも成るべく便宜を得るやうにして居る例へばダーチリンに於けるダンリッワ（山麓籠昇夫）は皆西藏人である是れはナカ／＼錢儲けの多い仕事で他の種族も其仕事を遣りたいと云ふ希望を持つて居るですけれどもソレはモウ西藏人の專有に歸し成るべく他の人をして之に従事せしめないやうな方針を執つて居る、警察官吏の如きも西藏人に對しては餘程寛かにして居る形跡があるです

國民の感情　ですからダーチリンに居る西藏人は皆印度政府の處置に満足して不平を云はないのみならず實際心服して英政府の爲めに働きたいと云ふ考を以つて居る者が澤山ある、勿論半期或是一年位滞在して居る者にはそんな考を持つて居る者はないけれども三年五年と住むに従てドウも英吉利人の遣方は立派である、公明正大である、慈悲深い遣方である、斯う云ふ政府の下に屬するのは非常に結構である、西藏では一寸盜をしても手を切るとか眼球を抉り取られるとか云ふやうな

殘酷な刑に處せられるけれども英領印度ではどんな重い罪を犯してもソレで死刑に處せられると云ふとは先づない位で實に寛大な刑法である、道路杯も非常に立派なもので神の國の道の様に出來て居る、又病氣になつても施藥病院があつて結構な藥を錢も取らずに呉れる、ソレから貧苦に迫つて食物がなくなれば又相當の補助をして呉れる、斯んな結構な政府は何處にもない、西藏では食物がなくなれば誰も呉れる者がないから餓死をしなくちやアならんと云うて一度足をダーチリンに入れた西藏人の誰も去るに忍びない心を起すです、勿論西藏に於て澤山財産のある者は一旦ダーチリンに來たからと云つて永住する氣にもならず歸る者も澤山ありますけれども其人間でも、矢張英領印度の道路、病院、學校等の完全なる設備を見て大に感服して歸つて行く、尙ほ西藏人の眼を驚かすに足るものは鐵道、電信、電話其他諸種の器械類の敏速なる働きを見て大に仰天して是れは逆も神の知識でなくては出來得ない事であると云ふ工合に感じて歸つて行く者が多います、國へ歸つた所で彼等は政府の人に對してそんな事は云へないけれども内々は大に英領印度を贊歎して喋々と吹聴するものですから西藏人は我も〜と先を争うて印度へ出掛けて來て相當の利益を得ては國へ歸つて吹聴すると云ふ有様で今日では民間の或部分即ち運送商賣其他商業上の用向で出掛けて來る村々の者は最早や印度政府に對して惡感情を懷いて居らない、併し表面は全く惡感情を懷いて居るやうに見えてあるですナゼならば若し英吉利政府が好いとか何とか云ひますればデキに其事を西藏政府

に告口する者があると其人は恐ろしい刑罰に處せられるから内々は英國に心を寄せて居りながらも表向きは同情を表する所ではない大に憎んで居るかのやうに遣つて居るです、其外にマダ西藏人民が大に心を寄せて居る次第はです、若し我國が英領印度の下に屬すれば我々人民は法王政府の酷虐なる支配を免れて現に印度人の受けて居る様な便宜を得らるゝであらう又印度政府は金が澤山あるから我々も自然金を得て何事も不自由なく暮せるであらうと云ふ考へを持つて居る者も澤山ある、夫等は中等及び上等社會の人民にも随分あるです、極く下等な者に至つてはサツ云ふ考へも持つて居りませんけれども折には人の言ふ事を聞傳へて内々そんな事を呟いて居る者もある、ですから今英國政府の執つて居る方針は随分西藏國民の人心を收攬するに足る丈の効力はあるけれども併し政府に對しては全く無効です

政府部内の人氣 政府部内の人間でも幾分か國民がサツ云ふことを考へて居ると同じやうに

英國政府と交際をしたならば大に利益を得らるゝだらふ杯と考へて居る人間もないではない、否な此際大に英國から金を取つて旨い汁を吸ひたいと云ふ狡い考へを起して居る悪い人間もあるらしい、ではない屹度あるに違ひないです、ナゼならば露西亞政府から賄賂を取るのも英國政府から賄賂を取るのも少しも彼等には區別はない、誰からでも構はん、餘計呉れる方に附くのです、強ち露西亞が非常に結構だからと云ふ考へて親む譯でない、金を餘計呉れたから先づ向ふの言ふことを

聞いて居ると云ふ譯ですから無論英國政府が金を出す時分には受取るに躊躇するやうな人間は先づ西藏政府の高等官の中には少ない方です

僧侶社會の迷惑 ソレから私が印度の佛陀迦耶及びネパール地方を遍歴して來たと云ふことを知つて居る學者、博士達は何時も好く私に英領印度の事を尋ねたてす、ソレに對して餘り詳しい説明を與へると必ず私の身の上に疑ひを起しますから(マア奇態なもんです、)位の答をして置くと學者達は「英人は何でも惡魔の化物か神の化物かどツちかである、或は二つとも混つて居るかも知れん、鐵道や病院を拵へて、人を利益すると云ふは全く佛敎の趣意に適つた遺方であるに拘はず人の國を取つて旨い汁を吸ふ事許り考へて居る、だから英領印度には惡魔の化物と神様の化物が寄集つて居るに違ひない、左もなければあんな珍らしい不思議な事の出来る譯はない」と云ふやうな事を始終云ふて居つたてす、夫れのみならず西藏國民一般に信じて居る事で面白い事がある、英國の女王ヴィクトリア陛下は素と拉薩の釋迦堂の守護の女神である、即ちバンデン、ラハモ(聖なる女神)の化身であつて世界の各部を征服する力を持つて居らるる方である、だから英國の女王陛下は西藏に對しては特に善い感情を持つて西藏國民を愛せらるゝ念に富んで居るお方である、けれども陛下の側には尙ほ佛の側に惡魔が居るやうに澤山な惡魔の大臣が附いて居るのである其惡魔の大臣が西藏を征伐してソコで惡魔の教即ち耶穌の教にしやうと云ふことに力を盡して居るのである、だから女

王は慕ふべきであるが惡魔の大臣は憎むべきである、我々は之を遠ざけなければならんと云ふ云ふ妄説は只一部の人の言ふに止まらず到る處に此説が傳はつて居ります、ですから其後女王がお崩れになつたと云ふことが西藏に傳はるや西藏國民は大に哀悼の情を表すると同時にバンデン、ラハモが西藏に歸つて來られたと云ふて大に悦んだ譯でありました、先づ西藏政府なり國民なりの英領印度政府に對する所の實況に就て私の觀察した所は是れ位にしておきます

第百九回 輿論

强悍なる土民 露西亞政府は北方西比利亞に鐵道の通じて居るのを利用して西藏内地に兵隊を送ると假定しても其鐵道の通じて居る所から拉薩府までは少なくとも五六箇月の日子を要する、其間には雪の降る時もあり又極く野蠻で政府の命令も肯かなければ誰の命令にも従はないと云ふアムドとかカムとか云ふ地方の多くの人間が別に部落を組んで居り升から此等の者が其兵隊に對して狙撃もし或は其道筋の諸所に陷隔を設けて露兵を陷殺すると云ふ策も随分取り得られないと限らない、旁々西藏の極く内地とてもナカナカ廣いから——或は露政府の手で充分な地圖が出来て居るかドウか分らんが——精密に地勢を知ることが困難である、其地勢を能く知つて居る土人は

確に露西亞の強い兵隊、完全なる兵器に對すの丈ける効力を持つて居る、だから露西亞の兵隊は強い、兵器は完全であると云ふ丈けて此野蠻民を征服して直に西藏の拉薩府に進入すると云ふことは六ヶしい、其事情を知つて居る、ツアンニー、ケンボは又ナカ／＼旨いので先に云ふたやうな怪しい未來の識言を捉へて其未來の大王と云ふのは露西亞の皇帝であるとコジ付け人民の心を取入れやうと立廻つて居りますけれども此頃は又随分悪い噂が澤山起つて來た、元來西藏國民は支那政府に非常に心服して居るので其譯は今に始まつた事でない、開國以來の事であると云うても宜い位ソレは此國に始めて佛法を入れた大王ソンツアン、ガムボは先に申した通り支那から王妃（文成公主）を迎へた位であるから西藏國民の佛教的母親は支那から來られたと云うて支那を懐かしく思ひ何時も支那に頼ると云ふ心を持つて居る、今日支那が無力になつたのは事實であるけれども國民一般は支那に對する感情を少しも損じない、尙ほ又

支那は文殊菩薩の國 である、ソレは支那の五臺山には文殊菩薩が居られて其化身として世に現れて居るのが即ち今の支那皇帝であると信仰して居るのです、其信仰力が強いからして餘程巧に未來記に合はした説でも、保守的觀念に富んで居る西藏國民一般の信用を得ると云ふことは困難である、同時に一般國民は西藏の政府内部で確實なる腦髓を持つて居らるゝ誰某は西藏に對する露政府の處置に就て快からぬ感じを持つて居ると云ふことを傳へ聞てす、西藏には勿論新聞

紙はないけれどもサウ云ふ事はチキに隅から隅まで傳つて行く、デ僧侶の如きもサウ云ふ着實なる考を持つて居る人の手下に附く者が大變に多く而してシャーターと云ふやうな投人氣の仕事をする人に對しては非常に悪感情を懷いて居る、殊に大學の僧侶、壯士坊主に至ては尙ほ非常に憎んで居る、又憎む譯がある、テンゲーリンのテモリンボチエを殺すやうになつたのもシャーターから起つたと云ふやうな關係があるからです、シャーターの遺る事と云へば善惡に拘はらず僧侶は先づ反對の氣味である、ソレから又長官宰相のシャーターは例の神下、氣狂坊主のやうなネーチエンを好んで法王に薦めネーチエンも亦權威ある者の氣に入るやうな事許り云つて居ますが僧侶の少し學識ある者が此ネーチエンに對して彼は氣狂である、彼は爛醉漢である國家を害する腐敗の動機であると斯う云つて何時も陰では悪口ではない、怒む程に云つて居る其言葉は眞に肺肝から出て非常に慨いて居る、是れは幾分かネーチエン其者が利益を澤山食ると云ふ所から多少嫉妬心で言ふ人もあるでせうけれども其言ふ所は兎に角適中して居ります、其事から延いてシャーターに對して尙更ら惡感情を懷くやうになつた、斯う云ふ譯ですからツアンニー、ケンボは政府は勿論僧侶も人民も皆自分に歸服して居るやうに思つて居ますけれどもソレは一時の傾向で今日は其反動力を起して政府部内及び民間共に暗々裡にツアンニー、ケンボを排斥するの動機が廣く見れて居る、ですから私の考では露西亞の外交手段も西藏に對してはマダ旨く成立つて居るとは云へない、是れから露國がド

ウ云ふ働きのするか、其未來の活動までは豫想することは出来ないけれども先づ今日までは露亞西の西藏に對する外交政略は斯んなものである

英政府の外交

英領印度と西藏の關係 是れから英領印度政府と西藏との關係に就て少しく述べます、英領印度政府は今より二百年以前より五十年前までは西藏國とは餘程好い關係を持つて居つた、非常に西藏の民心を收攬したと云ふ程の事はないが兎に角惡感情を懷かなかつた、ソレは十八世紀の時にウーレン、ヘスチングが貿易を開く爲めにジョージ、ボーグルを遣はして彼の國の第二の府シカチエに駐せしめた一事を見ても分ります、其後キャプテン、ターナも次の使者としてシカチエに二年許住居つた、其後はサウ云ふ使者を遣した事はないけれども英領印度の土人なれば今より廿二三年前までは西藏國へ入ることが出来たです、ドウ云ふ人が其時分に多く入つたかと云ふと詰り印度教の修行者或は僧侶杯が西藏に於ける靈跡を廻る爲めに掛けて行つた、ソレは一人や二人ではない、即ちサラット、チャンドラダース師の西藏に入る前は顔に灰を塗り片手に瓢の水入を提げ片手に鐵の火箸を持つて居る裸體の坊さんが澤山入込んだと云ふことが今も尙ほ西藏の民間に傳へて居ります、ですから今より廿二三年前までは政府同志の關係は兎も角其國民同志は互に往つ

たり來たりする丈の關係になつて居つたのです、此際英領印度政府が旨い方畧を執つて西藏人を充分懐けるやうにしたならば或は今日西藏は鎖國の運命を見なかつたかも知れぬ、所がサラット、チャンドラダース師が矢張印度教徒の入つて行く時のやうに旅行券を貰つて西藏内地に入込み學者の本分として相當の取調をして歸られた、デ其取調の結果を公にした所て英領印度政府は其保護國なるシツキムと西藏との國境を定めやうと云ふ意向であつた、其時分に西藏政府が例のネーチュンなる神下、氣狂の言ふ事を聞いてシツキムの國境へ是迄なかつた所の城を一つ築いた、其城は英兵の爲めに破られて了つたけれども今でも英領印度と西藏との境のニヤートンと云ふ處から略ぼ廿哩程手前の山の上に其城趾即ち平地と少し許りの石垣が残つて居るです、ネーチュンなる神下が城を立てると自然國境が定まると云うた時分に流石の西藏政府も少し躊躇したけれども其時分に神下か「若し英國政府が攻めて來る憂があれば乃公の身軀を持つて行つて城の處へ据えて置け、サウすれば決して彼等は寄付くことか出来ない」と法螺を吹立てた其勢が餘り強いものですから西藏政府は其言を聽て自分の領地でないシツキムの範圍内へ城を築いたさうです、其地は今から見てもシツキムの版圖内と云ふことは能く分つて居る、蓋し西藏人は勿論シツキムを占領する權利はないけれども素シツキムは西藏に服従して居つた國だから英領印度政府が半分取れば此方でも半分取る位の考を起したかも知れぬ、無法にもシツキムの地域内に城を築いたものですから英國政府の方でも黙

ツては居らない、其到着が持上ツて遂に今より十六七年前に
西藏と英國との合戦 　　が起りまして西藏人も大分傷ひ英國兵も亦大分死傷があつたやうで
す、此時の合戦の實況を聞きますに西藏人は大に英兵を怖れて容易に近づかず、成るべく敵の視線
を免れるやうに身構へて發砲して居つたさうです、尤も地の利は充分西藏人が占めて居つたのです
けれども元來怖氣が付いて居るものだから充分働くとが出来なかつた、加ふるに其大將或は參謀
官と云ふやうな者は一向戦争の評定をするでもなければ何でも無い、頓と平氣なもので博奕許り遣
ツて居たさうです、或は平氣を装うて居たのか實際呑氣であつたのか分らんが一體西藏人は何か大
事に臨むと極く度量が据つて居るかのやうに横柄くさく構へて居る風が誰にもあるやうです、ア、
云ふ所を見ると全く大陸の人民であつて彼此れ急込ましくしないやうですけれども其職には負け
た、其結果英國政府は國境を今のニヤートンと云ふ處まで進めて折合を付けたです、モ一ツ向ふの
チンビーサンバと云ふ處までは確にシツキム領なすけれどソレ文は英政府も譲つたらしく
見えるです、併し此時の英領印度の太守は其國境を定めた功のあるに拘はらず西藏國に對する外
交策は全く失敗に歸したといふことは今日よく證明されて居る、素とア、云ふ半開人を懐け或は外
交上樽俎の間に我に従はしむるには彼の怨を買ふとは極く損な事て成べく威壓しても其怨を買はぬ
方針を執るのが得策でせう、夫にも非はらず英領印度政府は最も西藏人の怨を買ふべき戦ひを遣ツ

たです、英國政府が廿哩や三十哩の土地を失つて其處へ城を立てさせて置いた所が別段威嚴を損す
ると云ふやうな事は勿論ない、だから西藏政府が其處へ城を立てた時分に外交上の談判位に止め
てサウして今露西亞が遣つて居るやうな工合に少し機密費でも使つて却て西藏人に恩徳を被せ貴族
を籠絡して彼の政府の意向をして英國に歸服させるやうな手段を運らしたならば恐らく今日は西藏
の天地は開放されて英國人の別荘が拉薩府の空氣清淨な天候景色の極く美しい處に建てられてあつ
たに違ひないと思はれる

第一百十回 清國と西藏

清國皇帝の詔勅

西藏が支那に對する關係に就ては詳く云へば大變長くなるですが是れは
殆ど専門に歴史上から説かなければ駄目ですから私は只今日の狀態を述べるに止めて置ませう、
西藏は支那に對して税金を納めなくてはならん、ソレは支那の屬國として保護を受けて居るからで
す、だが其税金は昔は納めて居つたですけれども此頃は少しも納めない、なぜかと云へば西藏では
年々支那皇帝のモンラム即ち大祈禱會を行ふ、ナカ／＼金が掛るですが是迄は此モンラムに掛る金
を支那政府から送つて來ることになつて居つたです、ソコで此方から税金を納めたり又支那政府の

方からモンラム費用を送ると云ふことは互に入費を損する丈けて詰らない事だから以後は納税金を以てモンラムを執行すると云ふことに成つて其通り實行して居る、昔は支那人は西藏に於ては非常に勢力のあつたもので大抵な無理をいつても西藏國民は盲従して居ると云ふ有様でしたから支那人の跋扈と云ふものは非常であつたてす、然るに日清戦争以後支那人の勢力が非常に墜ちて最早今日では西藏人は支那人に對して敬意を表しないのみならず漸く輕蔑する氣味が現れて來た、ソコで西藏に居る支那人等は大いに之を憂へて何とかして見たいと云ふ考を起して居ますけれども何分西藏人がドウせ支那政府は我國を助けることは出來やしないと侮り切つて居るものですから其儘泣寝入になつて勢力は次第に衰へて行くと云ふ今日の有様である、今後支那の勢力はますます衰へる丈けて決して西藏に對して其衰勢を恢復すると云ふことは出來ない、支那からどんな命令があつても西藏政府は自分に都合の好い



(保育の代時年壯) 1 * 1 * 相寧

事なら肯きますけれども都合の悪い事は決して肯かない、既に支那政府は各國聯合軍を受けて其後和約が成つた時に支那の十八省及び西藏モンゴリヤ等の部分へ黄色な紙に書いた支那皇帝の勅語を發した、デ西藏での一番始めのは拉薩府の釋迦堂の横にある町家の石壁に貼つてあつたですが其勅語の大意は「我國民は是迄誤つて外國人を危殆に陥らしめるやうな事を度々遣つたけれども是れは其外國人の真相を知らんからである彼の外國人等が我國へ來て實業に従事し或は教を布きつゝあるは皆相互に利益を謀る爲めである、然るに其人々に害を加へると云ふのは極く善くない事であるから以後は外國人を害せぬやうにせよ、若し害する時分には重刑に處する、既に我國は何處も皆開放して了つたから今後外國人が何處に行つても故障なく通過させるやうに」と云ふ意味であつた、始めにサウ云ふ黄色な紙に書いた詔書が一つ來て拉薩府に貼られてあつた、其後何枚か來まして丁度三通に澤山貼出されたです、其中には多少意味の違つたものもありましたけれども大同小異、我國は既に外國總てと和合したから人民も其意を體せよと云ふ意味であつたです、私は其詔書を拉薩府で度々讀みました、デ其時始めて確に各國聯合軍が北京を陥れ皇帝は何れへか難を避け應て和睦が調ふた其結果斯う云ふ詔書を發せられたものであると云ふことが分つた

詔勅の効力 サウ云ふやうな重い詔書が來ましてもイヤもう西藏人は平氣なものです、私が或高等官に尋ねました「既に斯う云ふ詔勅が出たからは若し之を楯に取つて英國人が此處に入つて

来たらずドウするか「アアに入れるものか」「ドウ云ふ譯で」「ドウ云ふ譯で」、清國皇帝が勝手に言出した事を何も此方て肯く譯はない、マア大體を考へて見るとアリヤア皇帝が言出した事てなさうだ、何しろ皇帝の側には悪い奴が澤山附いて居るから夫等の人間が外國人から金を澤山貰つて好い鹽梅に取込まれたので我々人民を籠絡する爲めにア、云ふ事を書き出したのだらう、其實皇帝が知らぬに違ひない、ナゼならば支那皇帝は文殊菩薩の化身であるから西藏の國へ外國人を入れるやうな馬鹿な事を書くものですか、アリヤア噓だ、今に分るに違ひない」とソレは獨りが言ふのみぢやない、サウ云ふ事を云ふ人が澤山ありました、私は確に皇帝から出された詔勅と信じましたけれども他の人達はそんな事を云つて一向信じないです、支那皇帝の詔書は西藏に於ては娼妓の手紙程の利目もない、實に呆れたものであります

西藏とネパール國

一 夫多妻の獎勵 次にネパールの政府は西藏に對してドウであるか、西藏人がネパールに對する感情等の上に於て少しく述べたい、ネパール國は此頃段々國民が繁殖して行きます、ソレは一夫多妻主義で子を澤山拵へることに骨を折つて居るからです、何でも自分の國の勢力を外へ擴張するには人間を澤山拵へなくちやア行けない、人を澤山拵へて他國へ押出すやうにせなければならぬ

と云ふ考で一夫多妻を非常に獎勵したものですから漸く喰ふことの出来る位の家族でも女房を二人ぐらゐる持ち少し活計向の豊なものなれば三人或は四人位持つて居ると云ふのが今日ネパール國民の狀態である、ソコで子供が澤山出来る、ドウ云ふものか同じヒマラヤ山中でも外の國の人間はネパール人程子供は出来ませんが殊にネパール人は子供が澤山出来る、何時何處の地方へ行つて見ても女が腹を脹らして居るのを澤山見受けるです、ネパール位腹の脹れた女を澤山見る處は何處にもない、其子供の殖える數は統計がないから委しい事は分りませんが餘程澤山なものだらうと思はれる、ネパール國内は日本の山家の土地が拓けて居るやうに何處へ行つても田畑が拓かれてある、ヒマラヤ山の中は能く行届いたもので林々へ手を入れて森林制度の成立つやうにチャンと出来てある、勿論タライの大林杯には餘り猛獸が澤山棲んで居りますから其中に手を入れる事は出来ませんが矢張其森林からも多くの材木を澤山伐出して毎年印度の方へ輸出して居るです、何處へ行つてもナカ／＼人民が澤山住んで居る、と云ふのは國の小さい割合に人口が多いからです、西藏は恐らくネパール國の十二倍以上の土地を持つて居りますけれども、人口は却てネパールよりも少ない位です、ですからネパール種族は最早自分の國で喰ふことが出来難くなつたものですからドシドシ外に出掛ける、印度に行つて兵士となり商業家となる者もあり或はダーヂリンからシツキムの方へ来て新に田畑を開墾し其持主となつて生計を立て、居る其有様は實に著しい進歩を呈して居る

す、ネパール政府其れ自身にも人口のますます繁殖することは自覚して居るものですから此繁殖する人口を何處へ置く植付けやうかと云ふことは暗々裡にネパール國に於ける一の困難なる問題となりつゝあるです、勿論其處分法は充分講じなければならん、所て英領印度政府と合戦をして其土地を取り而して其處へ移住民を置くが宜いかと云ふのにソレは餘程困難です、ナゼならば小國でありながら大國を相手にして合戦すると云ふことは困難である、守ることは出来ても進んで之を征服して其土地を取ると云ふことは殆ど見込がないので御座いますからソコでネパール政府は西藏の方へ指して折があつたら進撃をしたいと云ふやうな傾向があるらしく見える、現にネパール國民其れ自身を威壓するに足る丈けよりも尙ほ多くの兵隊をネパール政府は養成して居るのみか殆どネパール政府は全力を兵士の養成に注いで居るです、

第百十一回 子パールの外交

兵備の必要 ネパールでは教育とか或は其他の文明的事業即ち施療病院を建てるとか裁判所を起すとか法律を完全にすると云ふやうな事に就ては餘り多く進んで居らぬ、併し兵卒は確に英兵の次に在る位まで訓練されて居る山で戦ふ時分には逆も英國兵は及ぶまいと私は信じて居る、ナゼ

ならば彼等は山國の住民で日夜山を降昇りする、ソレも只降昇りする丈けでなくて重い荷物を背負つて急いで降昇りする程強い人民である、殊に印度の如く氣候が非常に熱くない所からして人民が餘程勤勉である、印度人は名高い怠惰者でありませうけれどもネパール人は印度人と殆ど反對であつてどツちかと云ふと日本人に非常に能く似て居るです、其容貌と云ひ小さな身體と云ひ其色其性質及び義侠心に富んで死を厭はぬと云ふやうな點に於ては確に日本人と同一の種族であると思はれる程似て居るです、サウ云う強い國民の中から選抜して澤山兵士を養成して居るのですからナカク強い、デ此兵士は何處へ用ふるのか、自分の國では用ふる場所が少ない、只必要あるのは其自分の國民を移殖する場所を拵へる爲めに其兵士が必要なのである、其場所はドノ方向に求むるか云々と今日のネパール政府の立場としては北方に向ふより外に途がない

外交政略

形勢既に斯の如くである上に今や一大動機がネパール國をして戦争を起さしめねはならんやうな場合に立至らしめたですソレは露西亞政府が西藏政府と條約を結び西藏の法王が西亞皇帝よりピシツォフの位を得たるのみならず露西亞政府から多くの兵器を貰ふたと云ふ事實は確にネパール政府をして戒心せしめ且つ大いに注意を惹起せしめたに相違ない、注意すると同時に此儘打棄て、置いて若し露國が西藏へ侵入して来る時分には唇亡びて齒寒して第一に困難を受けるのは即ち我國であると考へるからにはドウしても豫ての國是に基いて施設する所がなくはならん

やうになつたです、ソコで極く此頃の事ですがネパール政府から西藏政府へ申込みになつた事があ
 るらしい、ソレは勿論公然申込んだのではない、若し公然に申込み返答の如何に依ては是非合戦
 を遣らなくちやアならん譯ですから公然申込まずに只「我國の意向は斯うだ、若し貴國に於て露西
 亞政府と或約束を結んだ事が事實であり是から尙ほます」親密にしやうと云ふ事であるならば
 此儘打棄て、置くことは出来ぬ、早速我國は我國の安全を保護する爲めに西藏政府と合戦を開か
 なくてはならん」と云ふ意向を傳へたらしく私は觀察したです（全くの事實なり）抑も此ネパール
 が西藏に對して戦端を開くと云ふことはこりやネパール自身が眞實希望する所でありませうか、之
 を最も希望して居る者は其外に一つある、即ち英領印度政府です、英國は充分其合戦の起らんこと
 を望んであらうと私は觀察するですナゼならば英國が直接に西藏と合戦を開くことは損ですからし
 て英領印度政府からネパールへ幾分の助けをして必ず此戦争を成立たしめるやうな謀を爲すに
 相違ない、若しサウ云ふ風にして戦争が成立ちますれば其戦争に幾多の兵士の生命を賭けて戦ふた
 ネパール人は僅に旨い汗を吸ふに止つて多くの利益は、英國人に歸することに成るので御座いませ
 う、サウ云ふ利害の點に就てネパール政府は能く知つて居るか居らないか、私はそれは知らない、
 今日西藏政府に對してネパール政府が悪感情を懐くにしても成べく合戦を起さぬやうに而して實業
 上多くの人を西藏に遣はし西藏の實業社會の實權を握らせるやうにするのがネパールの今日執る

國是としては最も得策である、左すればネパール國人は合戦を起さずに自分の目的を達し得ること
 が出来るです、サウして此後露西亞が入つて來た所が實際に西藏の内地に實業上の勢力を形造つて
 居りますれば其勢力保護の上から始めて露國と合戦を起しても充分に勝算はあるです、今から慌て
 合戦をすると云ふ如きは大いにネパール政府の不得策であつて詰り英領印度政府の爲めにネパー
 ル政府は使はれた事になる、思ふに現今のネパール國王は思慮に深い人でありますから漫に實益の
 ない戦ひを起さぬであらうと私は察するです、私は直接にネパール國王に逢ふて度々お話を聞いて
 大いに其方の道徳があり且つ智慧の深いのに感服したのみならず殊に之を輔けて居る司令長官杯は
 ナカ／＼世界の事情に通じて居つて容易に人の口車に乗るやうな方ではない、恐らく英領印度政府
 の教唆で西藏政府と合戦をするやうな事はあるまいと私は信じて居る、併し何時までも合戦をせず
 に居ると云ふことは或は出来んかも知れんけれども今の時に合戦をするのは極く損なのです假令ひ
 ネパール政府が世間の觀察家に觀察された如く西藏政府に最後の決心即ち合戦をしようと思ふこと
 を申込んだにしてもソレは一時外交上の政略であつて實際遣らんのがネパール政府の爲に大いに執
 るべき事であるですネパール人はネパール人に對してそんなに悪感情を懐いて居らぬ、又非常に恐れ
 ても居らぬ、只少しく西藏人の恐るゝ點は兵卒がますます多くなるのみか其兵卒が非常に勇敢な者
 であると云ふ點に就て斯る國が我國へ攻めて來た時分にはドウしやうかと云うて甚だ恐れを懐いて

居る

兩國の親交

西藏政府其者は成べくネパール政府の歡心を買ふやうにして居る、既にネパール國王が西藏の一切藏經を欲いと云ふ所から其國の或縣の知事スツバ、ハルカ、マンを數年前に西藏へ其經典を内密に買ひに遣りました、スルド其スツバ、ハルカ、マンと云ふ人は随分利かぬ氣の人で「ネパール國王から命令を受けて來たのであるから能く拵へろ」と云うて版木を摺る場所即ちナルタンへ吩咐けますと貴國王からの命令ではお請をして善いか悪いか政府に伺はなければならぬと云ふことになつた、元來ネパールの北部には西藏人が澤山居りまして其北部のヒマラヤ山中の西藏人は西藏から一切藏經を買つて來ることが例になつて居る、ですから其寺なり或は随分家であれば一切藏經は大抵持つて居るです、西藏でも是迄は故障なく賣つて居つた既に其ハルカ、マン氏の如きも矢張雪山山北部の人民でありますから以前から西藏へ一切藏經を買ひに行つた事があつて自分の家にも祖師部の一切藏經がある、其一切藏經の經堂に私は一ヶ月許り住んで居つたことがある、ソコで法王政府へ伺つた所がソレはお金を取つて賣るに及ばない、此方に好いのあるから此方からデキにネパール國王にお上げ申すからと云ふやうな譯で無代價で以てわざ／＼ネパール國王に献上したです、其書が今國王の圖書館に納まつてある、其位で何かにつけて極く親密に遣つて居ります、ネパール政府も亦西藏國民の歡心を買ひるやうに方法を運らして居るらしく見える、ネパール

國王は印度教の人であつて佛教は信しない方であるけれども幾分か信教自由に基いて自分の國に居る所の西藏人である佛教信者を随分能く保護される丈けてなく其佛教の寺とか或は靈場に於しても充分に保護を加へる或は金を與へるとか普請をする材木を供給して遣るとか云ふやうな事をして充分便宜を與へて居る、是れはネパール内に居る西藏人に對して遣つて居るのですけれども人種として同種族でもあり其言葉も同じである本部西藏の人々もソレを見て幾分か喜ぶ、殊に佛法を能く保護して呉れると云ふ點に對して非常に喜んで居る、今一層ネパール政府の遣方が積極的に進んで西藏の民心を收攬する爲め及び西藏政府の官吏の心を收むる爲に機密費を澤山使ひますればネパール政府は屹度成功するだけの位置を占めて居るです、けれどもネパール政府其れ自身が随分内亂が多いので其國王の實權ある總理大臣はしば／＼暗殺されるとか或は其位を退くとか云ふやうな騒ぎをすることが多い、ソレで西藏政府へ對して手を伸す暇がないのみならず金もソレ丈け澤山入れることが出來ない、今日ネパール政府は兵力を養ふことは満足したるに拘はらず外交上の政略を施す上に於ては大いに缺けて居るやうに見えました

第百十二回

西藏外交の將來

西蔵と三強國 次に西蔵外交の將來に就て一言して置きます、以上述べた如く西蔵は強國三箇國からして自分の國に迫られて居る此強國のいづれが將來此國を支配することになると云ふことに就ては大いに世人の注意する所である、勿論此強國三箇國が合同して西蔵を取つて了ふと云ふことは出来ない事情である、或は英國とネパールとは合同することが出来るかも知れぬ、露西亞は確に北方から南下して西蔵に侵入しやうと目論見つゝある、其侵入の目的は西蔵の乾燥な土地を治めるのが目的でない事は明かであつて此天然の金城鐵壁とも云ふべきヒマラヤ山脈を前にして居る西蔵國、即ち天然に萬里の長城を形造つて充分に地の利を得たる所の國に指を染めると云ふは詰り其ヒマラヤの南の麓に在る世界の富源地即ち印度の國を征服したいと云ふ目的に出づることは言を俟たない、ソコで英國と露西亞とが合同して西蔵を取ると云ふやうな事は無論出来ない、露骨に云へば露國其者が英國の領分を欲しいと云ふ譯ですから逆も合同の出来ない事は極つて居る、先づ此西蔵は英國の手に落ちるか露國の手に落ちるか云ふ二つの争ひになつて居るですネパール國は此間に於て英國にも譲らず露國にも譲らずして充分自分の目的を達する力には今兵力を用ふるよりも實業的の實力を西蔵内部に得ることが一番必要であつてソレさへ遣つて置けば決してネパール政府は失敗の位置には立たない、假令西蔵國を露西亞が取つても英吉利が取つてもネパールの占むべき利益は充分占め得らるゝです、ソコで兵力を用ひて争ふと云ふ場合は露國と英國との喧嘩の外にない、前

にも述べましたやうに西蔵政府は腐敗極まつて賄賂次第で何方へても向くのですから斯んな政府を相手にすることは出来ないけれども其政府の重なる者を籠絡して幾分か西蔵を動搖する力は今日露に露西亞に在る併し最も頼みになる愚民までも心服せしむる力は今日英國に在る、露西亞の遣つて居ることは極く實着でない、英吉利の方は誠に實着に出て居りますけれども外交上の事はドウも實着許りて勝を制するとも又權謀術數が勝を制するとも一言に云ふことは出来ない、勿論一番未來の勝利者は誠實なる方に在ることは極つて居りませうけれども今の外交上の場合には一時ドウなるか分らなくて、容易に判定することが出来ん、只此時に當り英領印度政府不注意であつたならば露國は遠からず拉薩府まで侵入するでありませう

諦め易き國民 果して侵入することが出来ればソレはモウ譯はない元來西蔵國民は佛教を信じて居る優しい心の人間で「是れはドウも前世の約束である」と云ふて諦めて了ふ、極く消極的因果のみを信する性質で、是れから進んで自分の國を獨立せしめ而して立派に國の名譽を擧げやうと云ふ積極的精神に乏しい人民ですから一度露西亞が拉薩府に入つた以上は西蔵人は諦めて了ふてす、若し露國が拉薩府に入つた其時は最早英領印度の末路が、に現はれ來つた者であると云ふて宜い位です、制海權を握られたる海の上の戦争も確に怖いけれどもヒマラヤ山の如き世界の金城鐵壁を楯に取つて上から下に臨む戦争も恐ろしいものであると信ずるです、サウなれば露國は彼のへ

トル大帝の名高い遺書が世界に實現される事になるは言を俟たぬ、ソんな夢のやうな事があるものかと云ふ者があるかも知らんけれどもソレは畢竟西藏の地勢の堅固なる事を知らぬからで、若し西藏の地勢の堅固なる事を知り而して確に露國のやうな人間が入つたと聞たならば最早英領印度は征伏された者と見做すてありませう

西藏未來の運命 ソレでは西藏は最早獨立することが全く出來んのかと云ふ問題が出て來ますすがそれは勿論斷言することが出來ない、けれども今日西藏人の依賴的根性は千數百年以來續いて來たので一朝一夕に起つたのではない、或時は印度の大國に心を寄せ印度に依つて以て自國の生存を全うしやうと云ふ依賴心を起し、又或時は支那政府を頼んで自國の生存を全うしやうと云ふ考を起したてす全く輕弱の婦女子の根性であつて少しも獨立心と云ふものがない、其獨立心のない事は既に西藏の婦女子の性質、一般國民の性質及び政府の意向を述べた時に明になつて居る譯です、私が西藏に居た時分に誠に情けない話を聞いた事がある、ソレは私の見た所では今の西藏の法王は非常に鋭敏果斷な方で又度量も大きく且つ仕事も充分出來る人である、只足らぬ所は文明的の教育を受けて居らないと云ふ丈であつて其他の事は人間として殆ど完備して居る程の人である、殊に下民の情に能く通じ而して民意を容れ民心を收攬することに力め又法律を正うして殆ど賄賂を以て事を扱ふことが出來ぬやうな果斷の處置を遣る方ですから私は此法王こそ西藏國を獨立させるに足

る丈けの心を持つて居らるゝ方だらうと信じて居りました

法王の元氣 然るに是れまで英國政府からして何か西藏政府へ掛合ひ事があつて動もすると合戦でも起し兼ねまじき語氣を見すと法王は大いに恐れて小心翼翼々として心配をせられ御膳さへ碌に召上らず日夜心を悩まされたさうですが此頃は之と打て變て強くなつた英吉利政府が其領分を明かに定むる爲めに西藏の或地方に於て是れまでの領分より少し餘計の場所を取つた、其取つたのも譯があるので、露西亞政府が西藏に對しいろ／＼の術策を施すのを見兼ねて西藏政府の意向を探る爲めに土地を取つたらしい、所が法王は少しも怯む氣色なく何時でも我國では英國と合戦を遣ると云ふやうな意氣込で誠に愉々快々として豪傑の本色を表して居つたと云うて感心して居つた人がありました、此時私は前に何か事があつた時分には法王が小心翼翼々として心を苦めて居つたと云ふと聞いて居たものですから豪傑の本色は斯んなものか知らんと思つて大いに呆れ且つ西藏國の爲めに悲んだ譯でありましたが斯様に法王が始めは處女の如く終りは脱兎の如き意氣込を示した所以は露西亞政府と條約を結び必ず英國政府に對し一致の働きを執ると云ふ約束が成立しましたのと兵器杯を澤山貰ひましたので最早英國其者を愛ふるに足らない、ナゼならば今世界に於て英國の勢力を挫くに足る者は露國のみであると斯信じて居るらしい、右の次第で西藏國には先私が遇た人の中には其國の獨立を謀うと云ふ考のある人は殆どないです何處か知らん大國に頼らなくては其國が立行か

ぬやうに思つて居る人間許りですから勿論獨立は覺束ない、ドレ丈け大きな強壯の身體を持つて居りまして、ソレは藪人形と同様で獨立心のない豪傑は人の奴隸となる丈けてす但し此後意想外の發明の豪傑が出て佛教上積極的に活潑々裡に働く所の因果の理法を應用して此西蔵國興隆の策を講じたならば——夢のやうな望かも知れんが——確に西蔵は獨立することが出来るて御座いませう西蔵の外交の將來は是れて止します

第百十三回 モンラムの祭典

休養日の亂行 次に西蔵で一番名高いモンラムと云ふ祭典に就て述べます、是れは西蔵曆の一月三日から始まるので時に依ると四日から始まることもあるです、二十四日まで其祭典が續いて二十五日はいよいよ終りの式を擧げます、是れは西蔵で最も大なるお祭であつて、又大祈禱會である、モンラムと云ふのは願ひを掛けると云ふ意味ありて祈禱をすると云ふやうな事ではない、だが其實際は支那皇帝の萬歲、萬々歳を祈る爲めに遣る方法で御座いますから其眞實の意味を譯すると大祈禱會と云ふことに成るです、けれども字義通り直譯すれば願ひを掛けると云ふ丈けの事であるデ蔵曆の一月一日から此モンラムの始まる迄は所謂初春の祝である、此祝は遣方は少しく違つて居

りますけれども矢張元日を祝すると云ふに至つては同一です、僧侶は三日から此大法會に出て讀經其他の忙しき仕事に従事しなければならんと云ふ所から大抵十二月廿日から正月休みと云ふ休養日を與へらるるが例です、其休みの時分に寺に行つて見ると實に驚く許りの有様を呈して居る、私如何に西蔵でもそんな事はあるまいと思ひましたがソレは非常なものでお寺の中で公然骰子を轉がして博奕を遣つて居る、どんなに喧しう夜通し遣つて居ても誰も何とも言ふ者がない子供も皆旨い物を喰うて遊び放題に遊ぶのですから私共に置いてある小僧杯も常は大人しいけれどもモウ此時許りは少しも言ふことを背かない、夜杯は何處に行つたのか些ツとも歸つて來ない、サウ云ふ事が度々あつて用を辨ずることが出來るので大いに困つた事がある、其外に雇入れてある小僧も同じやうに出て行つて了つて二人とも間に合はぬと云ふやうな譯、此等は例の汚穢な事を遣りに行くらしい様でありました、サウ云ふ時分に聲く身を守つてジーツとして居る人間は皆馬鹿のやうな有様で學者と云はれて平生六ヶしい顔をして居る人も其時は殆ど酒の飲み續けて酔潰れたかのやうに精神が紊れて了ふ、骰子轉ばしをするもあれば花を弄ぶもあり隨初立派な人でも喰物の賭け位は遣つて居る、ソレが非常に愉快なものに見える、殊に壯士坊主杯は歌を謠ふやら角力を取るやら何が何やら寺の中一切が亂暴世界になつたとしか見えぬ、近來ますます甚しくなつたやうです此時に至れば最早平生の嚴しい法律も宗規も皆自由に解かれて了うて左ながら魚が網から飛出して再び大海に

泳ぎ出したかの如くに銘銘勝手に自分の思ふ儘を遣ると云ふ有様です、只此場合に於て女を寺の中に引込んで怪しい事をする云ふやうな事は少しもない、例の美しい小僧が最も忙しく最も収入の多い時ださうです、心ある喇嘛博士は此事を大いに歎いて其寺の僧侶等に忠告したやうな著書もある位です、全くと之を宜いと思つて居る人許りではない、少し寛かにする位の事は無論あるべきです、或は博奕をしたり公々然と汚穢な振舞をしたり神聖に保たるべき寺の中の騒しい事尚ほ市場より甚だしいと云ふに至つては言語道断の次第で全く佛法滅亡の兆を顯はして居る、忠告的の書物が幾らあつた所が先生等の耳には馬耳東風と云ふより見も聞きもせず所謂除所の國に在る結構な寶物と些々とも違はるのでありますから何の役にも立たんてす

祭祀前の光景 以上の如き亂行が十二日許り續いていよいよ三日から始まると成りますと各寺から僧侶が拉薩府を指して出掛けて来る、勿論セラの大寺から僅に一里半の路程ですから三日の朝早く出て来れば間に合ひます、レボンからは三里位是れも其日て間に合ふ、ガンデンから十六里餘あるから二日前から出て二日の晩か三日の朝着くやうに大抵サウ云ふ都合に出て来るです、其他小さな寺々からも参りますが此時拉薩府に集まる坊さんの數は二萬五六千人、歳に依つて多少はあますけれども、先づ大抵夫位の數である、其僧侶は何處へ迫込むかと云ふと一般に町家です町家では一室なり二室なりを明渡して僧侶に貸すと云ふのが拉薩市民の義務になつて居る良い僧侶は五人

或は十人の弟子坊主を連れて居りますが二室位借て別居することが出来すけれども詰らない僧侶は二間四面の室に大抵二十人位住んで居るので御座います、マダ其外に小僧の五六人も居ると云ふやうな譯ですから齋を詰めるやうに詰めても寝られなくて、外へ寝て居る奴もある、尤も雪でも降らなければ彼等はサウ酷く寒さを感じないから外へ寝ることは一向平氣で何とも思はない、拉薩府の住民は大抵平生五萬位の所へ不意に二萬五六千の僧侶が入つて来る其上に各地方から澤山な参拜人が出て来ますからナカ／＼大變な人數です、併し此地方から出て来ると云ふのは今の法王になつてからの事で其前は地方から出て来る所の騒ぎでない、拉薩府に居る人間がドシ／＼地方へ逃出したと云ふ位ソリヤどうも奇態だ、モンラムと云ふ大祈禱會があつて澤山な人が集つて来る程なれば市内に居てもすれば金が儲かるではないか、ドウ云ふ譯で市民が却て地方へ逃げて行くのか」と云ふ疑ひが起りませうけれどもソレは此法王以前に於ける拉薩府のモンラムの事情を知らないからである

執法僧官の壓制 昔はモンラムの時は、執法僧官なる者が非常の壓制を加へたものであります、其執法僧官は何處から出て来るかと云ひますとレボンと云ふ三大寺中の一番大きな寺から一年

交代で二人づゝ出て来るです、是れはシャゴと云うて詰りレボン寺の法律を司る僧官である、此僧官の位を得るには先其當時の政府の役人に三千圓から五千圓までの賄賂を納めなければならんで

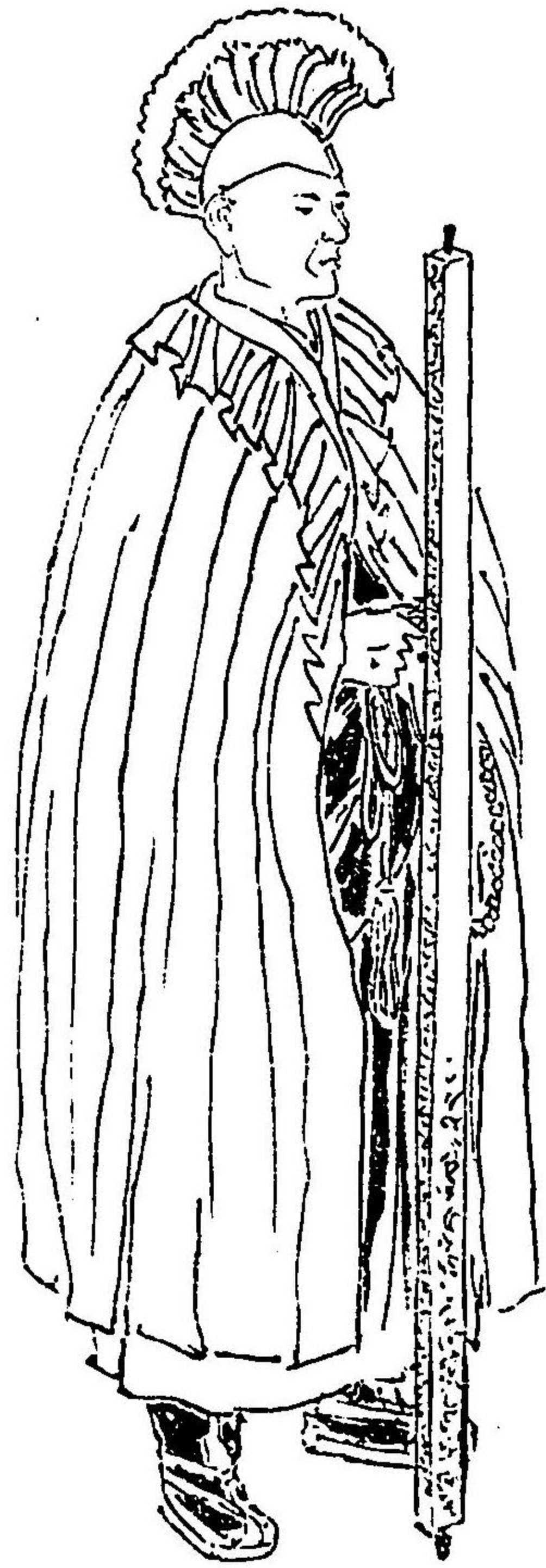
す、競争する人間の如何に依て三千圓で得らるゝ事もあり又五千圓掛ることもあります、デ其僧官は一年間レボン寺の法律を司ると同時に拉薩府に於けるモンラムと此間説明しましたチヨエンデヨエと云ふ法王に對する大祈禱を行ふ間拉薩市内の執法官となるのです、ソレでモンラム祭の其時は拉薩府は凡て僧侶の道場と成りまして人民の總ては其執法官の下に服さなければならん、所て執法官僧官が拉薩府に於て大いに金儲けをしなくてはならん、と云ふのは素と三千圓以上五千圓以下の賄賂を使ふたからで、其使ふた賄賂を取戻す上に自分が一生安樂に暮せる丈の金を儲けなくてはならんと云ふ考から市民に對して虐政を施す其遺方が實に酷い、一寸門口の掃方が悪いとか或は其處に塵か一本あつたと云ふて百圓の二百圓のと云ふ罰金を命ずる、何か其時分に喧嘩でも起るとソレこそ非常な罰金を命じます、只罰金を命ずる丈けては無い、矢張ブン擲ぐられるです、ソレから又貸した金をドウしても返さないと云ふ場合には此時に願ひを出しますと先づ貸した人間は其半額位しか取るとは出来ないけれども確に取ることが出来ます、其代り借りた者は凡ての財産を沒收されるのみならず其親類にまで累を及ぼす事があります、實に亂暴な遺方で殆ど其時の執法官僧官なる者は無限の權力を持つて居る所の強盜としか思はれない程の悪法を働くです、ソコで市民は堪らなから『ソレ明日からモンラムが始まる』と云ふ時分には其前日早いのは四五日前から道具は悉く一室に入れて錠を卸し自分達は田舎へ逃出して丁ツてサウして留守番を一人位置いて僧侶に總ての

室を貸し與へて了ふと云ふ譯ですすからモンラムの時になると十分一位の市民しか居らないで全く僧侶許りが暮して居ると云ふ有様になつて了ふです

第百十四回 モンラムの祭典

高僧の諷刺 彼の執法官僧官は人が居らぬから金を取らぬかと云ふと何とか斯とか口實を拵へて或は僧侶より或は居残りの人民より澤山な金を取立てる、デ其收入を見當に澤山な金を掛けて僅か一ケ年間、レボン寺の執法官僧官とならん事を希望する人間が澤山あつたです、此執法官僧官はモンラムの間とチヨエンデヨニの時に拉薩府市民及び僧侶を苛めて金を取るのみでない、其外自分の寺へ歸れば自分が其役を持つて居る間は寺で出来得る丈け賄賂を貪り他の僧侶を虐げて自分の一家を肥すことを力めて居るので、恰も佛の寺の中で大強盜、大悪魔が横行跋扈して居るやうな譯である之に就て面白い話がある、或るラーマ、此方は確に神通力を得て居つて地獄に行くことも出来れば極樂或は天堂にも行くことが出来ると社會から信用されて居る方です、或拉薩府の商人が其方の處に行つてからして『貴方は地獄にお越しになつたさうですがドウ云ふ方が地獄の中で、最も重い苦みをして居りましたか、定めし御覽に成りましたらう』と云ふて尋ねた『ハア見て來ました』ドウ

云ふ有様ですか。ドウも驚いたね地獄の中に坊さんの多いには、ゴロ／＼坊主頭が鐵の白、鐵の杵で酷い鬼に叩き潰されて苦んで居るのを見たがソレでもマア普通の坊主は地獄の中でも少しは又樂な事がある、一番酷い苦痛を受けて居る人間の顔を見た所が驚いたね」と云ふと其商人は大いに驚いて、其は誰ですか」と尋ねると「ソレはレボンのシャーゴよ、彼は無間地獄で一番エライ苦みを受けて居った、シャーゴと云へば我國に在っては空飛ぶ鳥も落ちる程恐れられたが地獄に行く



とザマのないものだ」と云ふ話を爲されたさうですが成程シャーゴの行くべき未來の世は地獄より外にないかも知れません

祭典中の拉薩府 扱いよくモンラムが始まるとなると拉薩府の市街に行列して居った人糞

は何處かへすつかりと持運ばれて綺麗になつて了ふ、ソレから市街の真中の小便と人糞で埋もれて居る溝も皆埋つて平らな道になつて居る、實に拉薩即ち神國と云ふ名の通りに美しく掃除が行届いて了ふです、此時は僧侶に取つては拉薩府に居つて一番氣色の好い時で何處へ行つても美しい、平生は僧侶でも婦人でも一寸蹲つて垂流しを遣るですが此時はサウ云ふ譯に行かんです、矢張も廁に行かなくちやアならん、尾籠な話をするやうですが拉薩府の廁と云ふのは大抵一軒の家にか二つある、又は一つ長屋の内に一つとか云ふやうな工合にナカ／＼大きく建てられてある、其大さは二間四面位で其中へ皆入つて行く、尤も入口は小さなもので中へ入ると其二間四面の漆喰で固めてある土間に深さ一丈、長さ六尺、幅六寸程の穴が穿たれてありまして其穴の兩側に四角な大きな柱が置かれてあります、サウ云ふ溝のやうな長い穴が二間四面の内に二つ或は三つ位穿つてあつて一つの穴でも二人或は三人位列んで出來得るやうになつて居るのですから丁度九人か十人位の人が一度に大小便を爲し得ることが出來ます、西藏では立つて小便をすることは在家の男でなくては殆ど遣らないです、僧侶及び婦人、在家の男子でも少し心掛けのある者は皆蹲つて小便をするサウ云ふ風に一家の内でも矢張共同便所のやうな工合になつて居つて其間に仕切がない即ち男女混合ですが少しも愧づる様子はないうです、尙ほ甚だしいのは此際の時に當つて少し市中を離れて向ふの方へ出ますと小さな川がある、其河端で僧侶が小便をして居ると向ふの方で婦人が態と僧侶に對し是

れ見よがしに小便をして居るです、實に甚だしい譯で、ソレが又モンラムの御馳走だと云うて笑つて居る僧侶もあるです

祭典中の僧侶 ソコでモンラムの大祈禱會を何處で行ふかと云ふと釋迦堂に於て行ふ凡そ其釋迦堂は拉薩府の圖面にも記されてある通り三階造りの大伽藍ですが殆ど詰切れない位集まる、其時の狹隘しい事と云ふたら堪らんです、人間の箱籠詰と云ふのはア、云ふ時を指して言ふのでせう、小供杯は人と人との間に挟まッて動けない、ドウかすると出際に混雜して踏み躪られて死んだと云ふやうな事も折々あるです、日に三度づゝ僧侶を集めるのが例で先づ朝五時に始めて七時に終り二度目は十時に始めて一時間前に終りソレから三度目は三時から始めて四時半頃に式を終つて了ふので、金を呉れるのは二番目の時です、信者の布施もあれば又政府から呉れる金もある、一遍に一タングル即ち廿四錢或は四十八錢乃至七十二錢呉れる事もあッて一定して居らぬ、大抵廿一日間の僧侶一人の収入は毎年五圓以上十圓位まで大差はない、若し法王が位に即いた時とか或は御出生、御薨去と云ふやうな場合は例外で普通の僧侶でも一人二十圓内外の収入があるです、高等なるラーマに成りますと此時には千圓或は二千圓多い時には五千圓位の収入もある、併し僧侶は宿錢は自分で拂はなくちやアならん、ソレとても澤山ちやアない、普通の僧侶なれば一人前大抵二十五錢づゝ程好い室で五十錢位です特別に良い室であればサウ云ふ室を借るのはいづれ貴族僧侶ですから無論

安い錢では借得られない、三圓なり或は五圓位は出さねばならん、假令幾ら出しても酒を賣る家とか或は女の澤山居る家へは——サウ云ふ家では矢張酒を賣りますから——僧侶は泊ることが出来ない、又市中の商店にも泊ることが出来ない、併し商家でも店と全く關係のない別室ならば借ることが出来る、ソレから祭典中はカムツアン、ギ、ギケン、と云ふ教師があッて僧侶の品行を監督して居る、斯う云ふ混雜の最中ですから随分喧嘩が起らなくてはならん筈ですが奇態に此場合には喧嘩をしない、表面丈けは誠に大人しく遣ッて居る、デ毎日三遍づゝモンラムの祈禱會へ出掛ける行くのが例ですから必ず拉薩府の内に住んで居らなければならん、自分の寺に歸ッて居ると云ふことは非常な病人の外は許されない、拉薩府に留ッて居ッても必ず其祈禱會に出なければならんと云ふ事はないですけれどもマア大抵出ない者は少ない、殊に晝の御祈禱の時分には毎日必ず幾分か(ケ布施)を貰ふことが出来るから是れは格別殊に依ると朝も晩も少しづゝ呉れる事がありますから三度缺かさずに大抵は出掛けて行くです

壯快なる供養 藏曆の一月十五日になりますとチユ、ンガ、チヨツバ(十五日の供養)と云うてナカ／＼盛な供養會が行はれる、是れは夜分の供養會であッて晝は全くないので、此夜分の供養は二時頃に済みますけれども僧侶はソレから外出を許されない、皆自分の室内に盤居して居らなければならん、扱其供養物は八丁程ある釋迦堂の廻りに供へられるので其供養の重なるものは

ドウ云ふ物かと云ひますと先づ其大なるものは高さ二十間、下幅十五間位ある長三角形の板へ指して其側面から二頭の昇龍が上ツて行く所の飾物です、其板の真中には花の御殿あり其御殿の中には佛が衆生を濟度する有様を撰擬したるものあれば又王公大臣の撰造もあります、其下にもいろ／＼人形が置いてあるです、ソレは皆何て作つて居るか云へばバタで以て造つてある、其人形は極樂世界の天神、天女もあり又極樂世界に居ると云ふ伽陵頻迦、共命鳥と云ふやうな鳥の類もある、美術心に乏しい西藏人の作としては餘程綺麗に旨く作つて居る、是は古代からズツと繼續して其遺方を學び傳へて來たからでありませう、ソレも只バタで拵へた丈けに止らず其上に金箔或は五色で彩りをしてあるから恰も美しい絹の着物を着て居るやうに見えて居る、バタ其物は光澤を其れ自身に持つて居るからして斯う云ふ風に彩りをするに非常に光を放つて居る、其供養物の前に澤山バタの燈明を供へ又道の中央で大なる篝火——バタの飾物に成べく熱氣の及ばぬ處に其れを焚いて誰にも能く見える様にしてある此供養は朝の四時頃まで、日の上らぬ中に取片付て了ふ日の上ツて來ればバタ細工が融て了ふからです、其バタの光澤と金箔、銀箔及び五色の色に映ずる所の幾千萬の燈明とが互に相照す其美しさは殆ど此世の物とも思へない程の壯觀及び美觀を呈して居るです、サウ云ふ供物一つ丈けてはない小さなのを合せると百二三十本も堂塔の廻りに飾られてあるのですからナカ／＼の美觀で西藏では是れより以上の供物をする事はない、是れは一年に一廻づゝ遣るのですが

一月十五日は丁度陽曆の二月廿三日に當りましたかドウも其夜の光景と云ふものは全く一夜に天上の宮殿を此世界に移したかのやうに思はれる、是れは私が見た上での一家言でなくツて、不風流な西藏人も十五日の供養は兜卒天上彌勒の内縁に供養した其有様を此拉薩府に現したのであると彼等は諺のやうに云うて居る、此立派な供養を我々僧侶は一人も見ることが許されぬ、勿論此供養に關係ある僧侶だけは役目として見ることが出來ますけれども二萬五六千の僧侶中ソレを見得る者は僅々二三百人に過ぎない、其他の僧侶は皆自分の室に整居して居なければならぬ

第百十五回 モンラムの祭典

駐藏大臣の盛粧 折角の盛大な供養を何て僧侶に見せぬかと云ひますと此時には拉薩府の市民が澤山見物に出掛けて來ますので非常に雑踏するです、時々壯士坊主杯が大いに喧嘩を始めて拉薩市民を迫害すると云ふやうな事が起つても混雑の最中ですから整理のして見やうがない、ソコで卅年此方此供養物を見ることを許さぬやうに成つたのださうです、此供養は夜の八時頃に始まつて四時頃に終るのですが法王がお越になつて能く檢分せらるゝ事もあり又お越にならぬ事もある、併し支那の駐藏大臣は大抵見廻るやうになつて居る、私は矢張僧侶の一員でありましたから本當は此供

養を見る事が出来ないのですけれども前大蔵大臣の好意に依て一緒に連れて行つて貰つたです、大臣と一緒にすから執法僧官のお役人も私を咎めることが出来ない勿論一人で行けば打擲ぐられた上チキに縛られて了ふ譯ですが此時は却て役人等から舌を出して敬意を表されデキ彼等は他へ避けて了つた位です、デ私は大蔵大臣の好意でバルボ商人の大きな家の二階から大臣と共に先づ檢分の役人か其供養物を見廻る有様を見ました、役人の檢分が濟んだ後でなければ我々は見るとを許され、例年始めに法王が來られるさうですが其時には法王がお臨みにならんで駐藏大臣が來られた、其扮装は餘程綺麗な飾りです、薄絹張の雪洞に西洋蠟燭を燈したるものが二十四張許り吊してある、其扮装の中に支那の立派なる官服を着け、頭には所謂位階を表はしたる帽子を被つてジーツと坐り込んで居る、其前後には何十疋の馬に乗つて居る所の支那官吏が今日を曠れと立派な官服を着飾つて前驅護衛を爲して行く殊に夜の事で市中に輝いて居る幾萬のバタの燈明は幾千百の瓦斯燈の如く白く明かな光を放つてある其の處へ美麗に飾つた雪洞附の華輿に乗つて行くのですから餘程綺麗です、實に美事ですすけれど私は嫌な感じが起つた、ナゼなれば飾りに飾り過ぎて却て卑むべき風を現はして居るからです、西藏人は立派であると云うて驚いて居りましたが確に我々の眼から見れば實に卑むべき飾りであると思つて憫笑せざるを得なかつたです、駐藏大臣の次には西藏の高等僧官及び俗人の高等官で一番仕舞に出て來るのが其時の宰相であります、宰相は四人ある、其名は第一が



答 問 び 及 景 光 の 内 場 祭 ム ラ ン ミ

クシヨ、シャーター、第二がクシヨ、シヨカン、第三がラーマ、ターカン、第四がクシヨ、ホルカ
ンと云ふ、一體は四人とも来るのですが此日はクシヨ、シャーターとラーマ、ターカンの二人が来
られた外は何か差支があつたらしい、尤もシヨカンは奥さんが亡くなつた當時であるから出て来る
ことが出来ないのでホルカンはツヒ其頃宰相になつた許りですからマダ出る運びに及ばなかつたかも
知れぬ、宰相は何の爲めに来るかと云ふと其供養物の良否及び等級を判断する爲めです、是れはド
ウ云ふ處から供養を上げるかと云ふと拉薩府で名高い華族或は大寺ソレから小寺の中でも由緒あり
資産もあると云ふやうな寺では年々之を上げるとになつて居る、是れは寧ろ供養と云ふよりも自分
の負擔すべき税金として上げなければならん事になつて居るです、デ大抵極く低い處で三百廿圓以
上、ソレから極く好い處で二千圓位掛かるさうで、サウ云ふ物が百二三十本も立つのですから實に
壯觀です、恐らくバクで以て一夜に是れ丈けの大供養を行ふと云ふことは、私は世界に於て外にあ
るまいと思ひます、無論是れより金の掛つた祭典は幾らもありませう 兎に角バクで以て是れ丈け
澤山の金を掛けて大供養を行ふと云ふことは

世界唯一の壯觀 であると思は考へました、此モンラムの祭典中も私は矢張大藏大臣の家に
居りました、デ只其供養を見た丈けて法會には行きませせん、ナゼ行かないかと云ふに何分急込しく
ツてナカ〜坐る場所がない、似し旨く坐り得た所が逆も動くことも出来ん位ですからそんな窮屈

な思ひをして行くに及ばぬと云ふ考もあつたからですけれども、ドンな様子か一遍見に行きたいと
云ふ心地もするものですから見物に出掛けた所がナカナカ面白かつたです、しかし一番面白いのは
壯士坊主の居る處でした、壯士坊主が騒いで居る處へシャーゴの下役を勤めて居る警護の僧が長さ
二間許り太さ五六寸程の柳の棒を提げて見廻りに出掛けて来る其棒の端切が向ふの方の隅へても見
えると今まで鼻唄を誦したり喧嘩をしたり腕押をして居つた奴が静まり返つて殊勝らしくお經を讀
み始める、其様子が實に面白い、併し其人が行つて了ふとお經の聲は又變じて忽ち鼻唄となるの
で、祈禱杯と云ふ考は毛頭壯士坊主の心の中にはないやうです、けれども學者の僧侶に至つては自
ら遣方が違ふ、いづれも熱心に問答を遣つて居る、是はモウ博士になる一世一代の試験をする大問
答ですから我れ劣らじと一生懸命に問答を遣るです、此時はセラ大學一ヶ寺で遣るのでなく三大學
の僧侶、三大學の僧侶の中でも最も學識有る人間が今日いよ〜博士になると云ふ人に對して問答
を仕掛けるのです、其答者は即ち二十年間雪中通夜の問答の苦しみを積み重ね鍛え來つた所の所謂
問答的學問を其時に發表して大いに三大學の間に名聲を轟し而して同じ博士になるにしても自分が
第一等の博士にならうと云ふ考を以て其問者に答へて居る其勢は獅子と虎とが戦ふかの如き有様で
ナカ〜愉快です、一方は陥穽に入れやうとして問掛ける、一方は其陥穽の底から引繰返すやうな
答をする、ナカ〜其手段の劇しいことは想像の及ぶ所でない、而して三大學の堂々たる博士、學

者達は其周囲を取捲いて一々批評を加へる許りでない、どちらか負けると大いに鯨波の聲を作つて笑ひ立てることがある、其笑ひやうはホ、ホ、ホホホと三切に聲を次第に張上げて行く、ソツ云ム風に二三人聲を揃へて笑ひ出すと數千人の僧侶も一度に呻り出して堂内も裂けん許りの聲を擧げるですから其問答に臨む所のラーマは容易な事ではない、

博士の階級

年々此モンラムの間に三大學から十六人づゝ選抜してラハラムバのゲーセー

(特別の博士號)になる、即ち拉薩府のモンラムの時に得た所の博士と云ふ意味で博士の中でも最も名譽ある博士である、其問答試験に應ずる者は三大學中でも屈指の學僧が選ばれて出るので普通の僧侶は勿論出られない、此後チヨエン、チヨエの時分に又十六人選抜する、是れは第二流の學僧が出るので之をツォー、ランバと云うて居る、其外に其寺々で許される博士もある、是れにも二通りあつて一をドーランバと云ひ一をリンシーと云ふ、此ドーランバの中にはナカ／＼の學者があつて時に依るとラハランバよりも尙ほ立派な學者があります、いさなり名譽高きラハランバにならうとすると金が澤山掛る、併し一旦ドーランバになつてソレからラハランバの大問答試験を受けるやうになると金が澤山掛らない、ソコで大變立派な學者ではありながら金の上からドウもラハランバの候補者に選ばれても應ずるとが出来ないと云ふ事情があつて暫く、に辛抱して居るのと殆ど玉石混淆の觀があるけれどもリンシーに至つては殆ど學力のない事に極つて居る、殊にレボ

ン及びカンデンの二大寺に於ける此最下等の博士は大抵五六年學問を修めた後に金で博士號を買つて自分の田舎へ歸るので、又田舎へ歸つて博士と云へば學問の有無に拘はらず信用される、日本でも同じ事ですか西藏では最も酷いのです、兎に角モンラムの時に選抜される十六人の博士は立派な者である、其中でも第一等の位置を占めると云ふことは實に名譽である、是れは只博士號を得るに足る丈の教科書に自由自在に通じて居ると云ふ唯だソレ丈けては此名譽は荷はれない、確に他の一切藏經に渡つて種々の取調をした人間でなければ其選に當ることは今では出来ない、其點から考へますと西藏の佛教學者は私は日本の佛教學者よりエライだらうと思ふ、日本にも天台の宗義に精しいとか唯識或は真言の宗義に精しいと云ふエライ學者は澤山ありますけれども佛教全體に渡つて深く通じていづれの點から來ても確に佛教的の返答が精密に出来るや否やは覺束ない、此點に於ては恐らく西藏の博士に及ばぬ所があらうと思ひます

第一百十六回 投秘劍會

兵士の服装

モンラム中の様子を見に行くのも随分樂みて折々は出掛けて見物しました其其間は私の仕事はセラのラーカンバの大博士とマニ、ケンボと云ふ大教師に就て日々講義を聞きに行



會 劍 秘 投

く丈け、人は金儲けて忙しいけれども私は講義を聞きに行くので非常に忙しう暮しました、實に其頃は最早此國を出ねばならん時機の迫り來つた爲めか非常に愉快に勉強することが出來ました、勿論其前とてもお醫者さんを遣るよりも大藏大臣の宅に居つて書物を読み講義を聞く方が多かつたてすから随分能く勉強が出來ましたけれども、此頃から西藏を出づる時まで即ち五月十六日頃までは頭も傷まず肩も凝らず充分勉強することが出來ました、扱て陽曆の三月四日即ち西藏の正月廿四日にトーキヤ（投秘劍會）を行ひますのでソレを見物に參りました、是れとても凡ての僧侶は皆外の方に追出されて容易に見物することが出來るのですけれども幸に私は貴族の家（釋迦堂の前の大家）に知邊があつたものですから其家の窓から投秘劍會を見ることが出來ました、此時には拉薩附近に於ける兵士及び拉薩府の總ての兵士は勿論平生普通の業務を執つて居る者も此時は兵士となつて出て來ますから殆ど二千四百五十人の乗馬者があるてす、其裝束が實に面白い、丁度昔の日本の鎧兜のやうな物を着け又其兜の上に赤地に白の段だら切布を赤烏帽子のやうな工合に後に垂れて居る兵士が五百人位あります、サウかと思ふと緑の白の段だらを附けてあるとか或は紫の色とかいろ／＼の色があつて五色どころぢやない、七色にも八色にも其隊が分れて居る、弓矢を持つて居るもあれば鐵砲許りを持つて行く兵士もある、デ鎧兜の上にはいづれも一人一本づゝ銘々色變りの小旗を挾して極く綺麗な裝束です、寧ろ戰場に臨んで戰爭を遣ると云ふよりは

五月雛の行列

と云ふやうな工合に私共は見物致しました、其調練も極く儀式的で面白い、所謂人が見て戦争の危ない事を知るよりは寧ろ戦争と云ふものはコソな呑氣なものか一つ遣つて見たいと云ふ位の面白味を感ずるです、此日先づ一發の號砲と同時に兵士が繰出すので尤も目貫として見るべきは釋迦堂の西の部に釋迦堂の上には法王の御座がある、其式の擧げ方はドウかと云ふと先づ一大隊五百名の五月の雛飾的の兵士が出て来て一通りの式を遣つて通り抜けると又後から出て来て其通り、其式が済みますと今度は本堂の中から極綺麗な着物を着た坊主が三百人許り、長柄附の平太鼓、太鼓の表に龍の面の描いあるて太鼓を持ち、片手に弓形の撥を持つて繰出して参りました釋迦堂の前面へ聞く列ぶです、其次に出て来るのが鏡鉢を持つた僧侶で其數凡そ三百人許り、其法衣はいづれも大金の掛つたもので法衣の下に金爛のトエカー(肌着)を着けて居る者もある、實に美々しい打拵て此時許りは如何に不潔な西藏の者でも其前夜から湯を沸かして身體を拭きます、扱其太鼓隊と鏡鉢隊は二重の圓列を作り纏て一人の鏡鉢を持つた隊長らしい僧侶が鏡鉢を打ちつ、踊り出すと同時に兩隊一齊に調子を合せて叩き立てるかと思ふとウーウーと猛虎の吼ゆるが如く酷い聲で一齊に呻り立てる其聲は天上にも響くかと思はれる位です、其式が済みますと

チーチエンの出御

釋迦堂の内から例の氣狂ひの如くになつて居るネーチエン(神下し)が西藏第一の晴れの金襴、錦繡の服を着け頭にも同様の冠を戴き仰向いて兩眼を閉ぢつ二人の

肩に縫り恰も魚が水を吹出し吸入るゝかの如くにアツブとまるで精神を失つたかのやうに足を千鳥に運つゝトボくと倒れさうに出掛けて来るです、サウすると愚民はソレに對して一生懸命に拜み立てる其側には又嘔を吐き掛けて遣りたさうな顔付をして嘲つて居る僧侶もある、實に面白い、其狂人に附添うて来る僧侶も澤山です、夫等の飾りはナカク立派なもので容易に言葉に盡すことが出来ない、此間セラ寺の祈禱會の時分に説明して置きましたが先づ五色の絹で飾り立てた所の二間餘りの寶劍(廿四五本)を持つた奴が兩側に列んで出て来る、其次には金香爐及び種々の寶物箱を持つた奴が出て来まして氣狂は其後から来るのです、何處へ行くかと云ふと釋迦堂から二丁程ある平地の處へ障りなく投秘劍の式を終へるやうに守る神様として出て行くのです、此時ガンデン、チー、リンボ、チエ即ち私の師匠である方は其チー、リンボ、チエの法服を着けて法王と共に天蓋附の絹の大傘の下に徐々と歩いて来られたが此の方が出られた時分には先のネーチエンなる神下しを嘲つて居つた僧侶も真に敬意を表して静まり返つて居る、私なども如何にも善い如來の如く思はれて有がたく感じました、即ち此の方が主任者となり其秘劍を放つて支那皇帝陛下の惡運を拂つて了ふと云ふ譯になるので御座います

市民の石供養

是れて投秘劍會は終つたので御座いますが其終りの式は翌朝擧げるのです、所がコソに妙な習慣がある、僧侶なり或は拉薩の市民なりが石を買ふて一或は二つ位づ、背負ふて

東、南のキーチエ河畔に持つて行くです、此日其處へ石を持つて持つて置いて來ると自分の罪障が消えると云ふ信仰から斯う云ふことを遣るので、其石は山の方の人民が割出して持つて來るので一つ十錢とか二十錢と云ふ割合で賣るので、是れは大變善い事なんて詰り夏季に當つてキーチエ河が洪水の爲に溢れ出しますと拉薩府は夫が爲めに大損害を受けることに成ります、此畔に石を澤山積んで置けば其水の氾濫を禦ぐ用に供することが出來ます、消極的信仰上偶然の善事とは云ひながら誠に結構な事です其運ばれる石はナカ／＼大きなもので私は二度運んだとか三度運んだとか云うて大いに自慢して居るです、餘程良い家の人でも殊更に自分が運んで行くのもある、又人を五六人も雇ひ運び賃を拂うて運ばせるのもあるです

第百十七回 西藏の財政

序に財政の事に就て説明します、西藏政府の財政は非常に錯雑して能く分り兼ねるのみならず政府の會計官吏が年々ドレ丈け収入してドレ丈け支出するの側面者にはさつぱり分らない、時に依つて亂高下があると云ふ大藏大臣の説明であります、税は凡て物品が多いのですけれども之を金錢に換算すれば収入が幾らで支出は幾らと云ふことが分る譯ですがドウもサウ明かに仕難い場合があ

る、物品に依つては時に直段に亂高下あり又直段の定まらんやうな物もありますからナカ／＼統計を取るのが六ヶしいです、サウ云ふ譯で西藏政府でも統計が出來て居らんのですから私もソレに就ては説明することが出來ない、けれどもドウ云ふ工合に出納が出來て居るか、又ドウ云ふ方面から税が納まつて來るか、何處へ支出されると云ふことは明な事でもあり且つ納税方法も分つて居りますから其點に就てザツと述べて置きます

法王政府の大藏省 は西藏語でラブラン、チエンボと云ふ、之を直譯しますとラーマの大なる臺所と云ふ意味で法王直轄の地方及び其各莊田主から——人民よりは間接に取立てる譯です——税品を取立つるです、是れは其地方から特別に運んで來ますので決して金を爲替で送ると云ふやうな便法はない、只物品を其儘二百里あうが五百里あうが其遠い處から皆法王政府に送つて來ますですから、納税者は非常に困難ですが其途筋では驛馬を徵發して來ますので、其驛馬なる者は其地方の賦役として必ず徵發に應じなければならん、其の物品は先づ麥、豆、小麥、蕎麥、マル（パタの事なり）乾乳等いろ／＼の物が出て來るです、又税關のある地方からは珊瑚珠、寶石、布類、羅紗、絹及び乾葡萄、乾桃、乾棗類又地方に依ては皮或は資鹿の血角を納める處もある、殆ど西藏に有りと有らぬる産物及び外國から入來る物品で大藏省へ納まらぬものは無い

稀有の徵税法 コ、に一つ可笑い事がある、大藏省でマルを量る衡が凡そ二十種許りある、

ソレから麥、小麥、豆等を量る拵も三十二種ある、ソレは皆大小異なつて居るので先づボーチクと云ふのが略ぼ我國の一斗拵と同じであつて正當な拵である、然るに場合に依ると其拵より大きな一斗五升拵で取立てる事もあり又七升五合拵で取立てる事もあるから納税者に取つては大變不幸がある、デ其間に大小いろ／＼の拵が都合三十二種もあるのですがソレでは拵を拵へて置く必要がないではないかと云ふに西藏政府では亦大に其必要があるです、先づ一番小さな拵で取立てるのはドウ云ふ地方の人かと云ひますと法王の出られた地方の人とか或は特に政府の高等官に因縁のある地方の人民とか云ふやうな者で、假令ひ田地一枚に就て二斗つゝ納むると云ふ名目があつても極く餘計納むる人の半分しか納めなくて済む、之に反して餘計納める人は二斗の名目で三斗納めなくてはならん、所が法王の出られた所の人達は二斗の名目で一斗五升納むれば事が足るので、其地方の人民は斯くの如く特別の待遇を受けて居るに拘はらず若し政府に反抗したとか或は其村から惡漢或は大に其國を害した人間が出たと云ふやうな場合には其村民に對し倍の拵を用ひて取立てる、名目は半分納むる人も倍納むる人も同じですから帳面の上では平均が取れて居るが事實は大に相違して居る、そんなら拵が卅餘種に分れて居るのはドウ云ふ譯かと云ふに其罪科、責任には自ら輕重がある、其輕重に従ひ某村のは第三番拵某々村のは第十番拵と云ふ風に所に依て用ふる拵が違ふからてす、バタを收税する時分にも其通り廿種位の衡を用ひます、先づ收入する時はサウ云ふ風ですけれ

ども其品を賣る時分には決して大きい拵を用ひない平均の拵よりか少し小さいのを用ひる、又餘り小さいのを用ひると商人が非常に不平を鳴しますからソコで少し小さいので賣出すです、ソレから僧侶及び普通政府の役人、或は政府の仕事をする職工とか商業家等に俸祿を與へる時分には普通の拵で量つて遣るです、デ其の支出の重なるものは前に一寸云つた通り釋迦牟尼如來の本堂費である、即ち堂塔伽藍の修費、燈明系其他の什器購入費、掃除費及び讀經僧侶の手當でありますが其中でも最も多く費用の掛るのは前にいふマルです、マルは之を油にして日夜幾萬の燈明用に供するのです、其燈明の数は拉薩府の釋迦堂に上つて居る丈だけでも二萬五千に下らぬと思ひます、尙ほ何か事のある時分には一萬或は十萬の燈明を上げることがある夫等は皆高價のバタで上げますので、西藏では菜種油で燈明を上げると云ふとは殆どないです、燈明に菜種油を用ひるのは罪惡のやうに――罪惡とまでは思はなくても佛を汚すと云ふ考へを持って居る、だからラーマが「死後に供養して呉れる時分には決して菜種油を用ひて呉れるな」と遺言して死ぬ者も澤山ある、拉薩の釋迦牟尼如來の前には純金の犬なる燈明臺が二十四五も列んであります、其他幾萬の燈明臺の中には一斗位入るものもあります其油は多く大藏省から供給されるのです、勿論信者から上つたものもありますけれど

徵稅以外の職務

西藏の大藏省は只租稅を取扱ふ許りでない、寄附金又は喜捨の金品も取扱

ふてす、釋迦堂へ何を上げて來ても或は大法輪の時分に僧侶に對して信者から「ゲ」を與へるにも一
旦大藏省に納めて後大藏大臣の命令に依て皆に分つのです、次は法王の宮室費です、是れは無制限
で何程でも入用だけ支出しなければならん、とは云ふものゝムヤミに法王の私用に使ふと云ふこと
はなく大凡の極りはあるさうです、併し今度の法王になつてからナカク入るものも多くなつた代
りに又出るのも多いと云ふ話でした、又大藏省から取立てた内て法王政府に屬する諸官員及び僧官
に俸祿（年俸と月俸とあり）を與へなければならん、夫等は他國に比較すると極く少ないが併し其
諸官員或は僧官は皆莊田を持つて居るのみならず外に

一種の役徳 があります、ソレは政府から一人に就て三千圓の金を借得る、便宜があるのでは
金は僅に五分の利子である、所が普通西藏では年利一割五六分位で高利は三割位ださうです、此官
吏官僧の借る金は年五分利でありますから其金を借りて普通の商業家に貸しても一割の利子は取ら
れるやらになつて居る、若し官吏官僧が政府への返金を滞つたからと云うて前年の利子を元金に加
へることもしなければ假令十年利子は拂はぬからと云ふて利を加へると云ふことは西藏の法
律上許さない、政府は僧俗官吏に斯る便宜を與へソレから三大寺に對し茶とマルは申すには及ず僧
侶に對しても一人平均六圓位づゝの僧祿を與へるです、話は餘事に涉つたですが法王は又別に財源
を持つて居る、ソレは信者からの上り者もあり法王自身に附いてある莊田もあり又牧畜場もあるて

す、其他法王直轄の商隊があつて支那及び印度の方へ商ひに出掛ける大藏省の方にも商隊はあるが
ソレは法王の商隊とは全く別なつて、法王の臺所を稱してチエーラプラン（峰のラーマの臺所と
云ふ意味）と云ふ、法王の御殿が峰の上にならして、此法王の宮殿は宮殿なり寺なり又城なり即ち
一つて三つを兼ねて居ると云ふて宜しい、城の建方としては西藏第一流である、寺としても亦非常
に立派なものである、宮殿としても極く適當である、併し、

一 大缺點 がありますソレは此法王殿の中に一個の井もなければ泉もない、全く水がないので
す、大なる高峯で嚴重に取圍まれてあるから敵が攻めて來ても籠城して居るには極く都合が好く出
來て居るに拘はらず其中に水の出る所のないと云ふのは實に奇態な譯です、其水は何處から抑ぐか
と云ふと御殿の處から二三丁も下へ降りソレから又平地を二丁許り行つて遙か向ふに流れてある河
端の井から水を運ぶのです、其間の距離は五丁許りですが其中にも三丁は非常に殿しい石坂を登ら
なくてはならん、ソレからズツと上まで上るには五丁もある、サウ云ふ遠い處からして毎日々々水
を運んで居りますので、水運びを商賣にして居る人間は澤山あるです、其水は詰り法王の宮殿
内に住んで居る人が買ひますので價は一箇月一人前二十五錢位の割合です、ソレから此法王の宮
殿に居る貴族的僧侶は百六十五名ありまして其一團體を稱してナムキヤル、メーサンと云ふて居る、
此貴族僧侶は其顔容まで一粒選りの綺麗揃ひて其生活の有様は實に西藏國に於ける僧侶中の最高等

のものである、又是れまで法王の臺所へモンゴリヤから上げた金銀は少なからず、所が今日は其収入が殆どなくなり従て西藏國民の負擔が重くなつたやうです、併し是れまで極つて居る租税を多くすると云ふ譯に行きませんから詰り大きな樹で取ると云ふやうな都合になつたのです、

税品の徴收

尙ほ地方には政府へ納むべき租税を取立てる場所が二ツある、一は寺で一は地方官である、寺の管轄を受けて居る人民は寺に納め地方官に管轄されて居る人民は地方官に納めるのです、地方には「ゾン」と云ふものがある、此ゾンと云ふのは戦争の目的に依て建てられたる城

でありますが普通の場合には役所として用ひて居る、即ち裁判の事も警察の事も又租税の取立も皆此城で遣るです、其ゾンの建てられてある處は何處でも大抵登り二三丁位の小山の頂上てゾンの中にゾン、ボン（城の長と云ふ意味、但俗人なり）と云ふ者が居る、日本で云へば知事のやうなものです、テ麥の出来る處からは麥、小麥の處は小麥、又牧畜地からはバタを取立てると云ふ工合に其地方々々に依て税品が皆違つて居る、其ゾンに集まつた所の物品或は銀貨を中央政府に送ります尤も地方政府のゾン、ボンは中央政府から年俸或は月俸等を貰はない其地方から取立てた租税の中から自分の月俸を取るです、中央政府から地方政府に對して物品或は銀貨を送ると云ふやうな事は殆どない、何か地方に特別の事が起つて其地方の人民が大いに困難に陥つたと云ふ時分には政府から救助金を送る事がある丈です、其他中央政府直轄の人民は人頭税を中央政府に納ることがある、

又華族及び高等僧侶の寺に屬して居る人民は其所屬の華族等に税を取立てられるのは勿論ですけれど中央政府への分は取立てられる地方もあり又取られない處もあるゾンは一向不規則で極つては居りません、是れが西藏の中央及び地方の財政の概略の説明であります

法王の遺産處分

次に法王の財産は法王が一人お薨れになると其遺産の半分——半分と云ふは表向きで實は半以上——は法王出身地の血族の者が大抵貰ふことに極つて居る其後の金は諸大寺

の僧侶及び新派の僧侶等に「ゲ」として與へられるです、序に言うて置きますことは普通の僧侶の遺産で例へば五千圓の資産ある者が死ぬと大抵四千圓までは僧侶の「ゲ」及び燈明代に供へて他の一千圓を以て其人の死骸を送り或は助始末を付けると云ふ位のもので其弟子達の受けるのは僅に三百圓か五百圓あれば餘程宜い方である、事に依ると弟子が借金してゝも其師匠の功德の爲に「ゲ」及び燈明代を供へると云ふ美風がある、是れは俗人社會に於ては全く見ることは出来んけれども僧侶社會には普通の事て實に好き習慣であると考へるです

第百十八回 西藏の兵制

常備兵五千人

次に西藏の兵制に就て述べます、只今常備兵としてあるのは殆ど五千人足ら

ずてあります、實際の名目は五千人ですけれど私の観察では少し足りないやうに思ふ、西藏人口六百万人に對する五千人の兵士は實に少ない、外國に對するとは愚か自分の國の内亂に對しても能く之を平らげて國を安らかに保つと云ふとは出来得ないやうに思はれる、けれども西藏は兵隊で國が治まツて居るのではない、威歴で國が治まツて居るのではない、只佛教の信仰力があるが爲めに國が治まツて居るのである、多數の蒙昧なる愚民は只佛教を信ずるの一念即ち法王其人は活きたる觀世音菩薩と信ずるの餘りに法王に對しては決して劍を向けるとは出来ない、敵として戰ふことは決して出来ないといふ觀念は、一般に染渡ツて居ります、ですから兵士は僅かでもそんなに多く内亂も起らずに治まツて居るです大抵西藏で

内亂の起る場合 は法王が薨れたとか、或は尙ほ幼くして政を親らすることが出来ると云ふ時に當り或大臣が威を擅にするとか其時の假の法王が權を専らにして人民を虐げると云ふ場合に人民が憤激して内亂を起すことがありますけれども法王が成長して實際其國の政を執るに當つては多少困難な事が起つても是れは活きたる觀世音菩薩に仕へるのである、供養するのであると云ふ觀念を以て心服して居りますから兵隊は澤山要らない譯です只西藏で非常に兵士を置く必要を感じたのはネパールとの二度の合戦其後又英領印度との戰爭以來是非兵士がなくてはならぬと云うて先づ兵として五千人の常備兵隊を置いてあるので義務兵と云ふ者は一人もない、此雇兵士は要所々々に

分遣されて居るので、拉薩には僅に一千人、ソレからシカチエに二千人、テンリーと云うてネパール國に對する最も緊要なる防衛場である所に五百名とは云うて居るが其實三百名しか居らぬかも知れない、其城には支那兵も二三百名許り居る、それからギヤンチエに五百名、ダムに五百名、マシカム地方に五百名で都合五千名と云ふことになつて居る、それから支那兵は二千名程居る、即ち拉薩に五百名、シカチエに五百名、テンリーにも五百名と云ひますけれども是れも二百名位しか居らない、トモ(靖西)に五百名合せて二千名です、是等の西藏兵士には五百名に對し一人の大將がある、ソレはデーボンと云うて居る、ソレから二百五十名に對する一人の將官其下は二十五名に就て一人、五名に就て一人と云ふやうに長を設けて統轄して居ります、

常備兵の内職 西藏の雇兵の月俸は麥二斗餘りて、兵舎は別に建てられてなく市中に散在して居るので、いづれも商家で其家で商ひをして居るもあれば又種々の内職を造つて居る者もある、勿論兵士の居る家の建築費用は市民の負擔で私は市民が折々詰らぬと云うて不平を漏らすのを聞いたことがあります、支那兵も矢張市民のこしらへた普通の家に入つて居ります、其中には理髮處もあれば又喰物店もあると云ふやうな譯で女房もあれば子供もある二斗の麥で女房子まで糊口すと云ふことは殆ど出来ない事て詰り商賣と内職の方で儲けた錢で生活を立て、居るので、デ麥二斗貨ふ義務は月に五回か六回の訓練に出掛ける丈けである、サウして一年に一回大演習を遣るです、

ソレは拉薩市街の北セテラ大學に行く道筋に當つて居る一里弱の處にタブチーと云ふ小さな村がある、其處には支那の關羽も祀つてある、西藏では關羽の事をゲーサル、ギ、ギャルボ（花藥の王と云意味）と云うて惡魔を祓ふ神として大いに尊崇して居る其多くは在留支那人が參詣しますので此社には鶏杯が澤山飼うてあります、其横にはタブチーと云ふ大きな寺があつて此ゲーサル、ギ、ギャルボを祭る坊さんが居るです、此關羽の廟の中に面白い物がある、青鬼赤鬼等地獄の鬼の姿を澤山拵へて關羽の手下のやうに飾つてある、其美術がテカ／＼面白く出來て居る、斯う云ふ寺及び七八軒ある小村を過ぎて少しく北に行くに平地に二丁四面程の高地があつて其處に武器庫が建て、ある、ソレから北へ二里、西へ半里、東へ二里許りある廣野があります、其曠原に於て大訓練を遣ります、始めの二日は支那兵、後の二日は西藏兵、是れは大抵夏季の終り即ち陽曆の八月末九月初頃に行ふので、尤も其時が非常に都合が好い、麥は皆刈取られて何處へ走つた所が麥作を害すると云ふことはないからです、其時には支那の駐藏大臣は勿論西藏の將軍等も皆出て行きました成蹟良い兵士に一圓より十圓までの金を與へるもあれば銀製の賞牌を與へるもあり、今でも西藏では兵士に弓を引くことを必要なる業として授けて居る鐵砲も此の頃は幾分か西洋式の訓練を遣つて居るけれども、見るに足る程の事も無い、是れは支那兵士が教へ又印度で學んだ西藏兵が教へて居るのです

兵士の氣概

私の觀察した所では支那兵にも西藏兵にもない、却て兵士は普通人民より劣りはすまいかと思ふ程です、支那兵の中には瘦せた青い顔をして居る奴が随分多い西藏兵士にはそんなのは少ないが併し氣概は持つて居らない、是れは大方収入が少なくて活計向に心を懸ますからであらうと思はれる此等の氣概の沮喪した兵士に比すると壯士坊主の方が餘程エライ、彼等は妻はなし子はなし少しも顧る所がないから實に勇氣凜然として誰をも恐れないと云ふ勢を持つて居る其點に於ては確に壯士坊主の方が頼むに足ります、ドウも此等の兵士は戦争の時分には餘り間に合はぬだらうと思ふ、一番ドウ云ふ事の働かをするかと云へば先づ戦争が起れば亂暴狼藉を働いて内地人の財産を分捕りする位の事でも國の役には立たない、是れは必竟妻帯に原因するので兵士としては妻帯する程勇氣を沮喪するものはないです、西藏人は最も情緒の力に富んで居つて妻子を想ふの情も深いです、妻子のある兵士は先づ合戦の間に合はぬと云つて宜いてせう、此點に於ては情緒には缺けて居る所があるけれども西藏中でカムの國の人間は

天然の兵士

と云うて宜い、一切の人民は皆兵士であると云うて宜い、其婦人も婦人と云ふよりも寧ろ女丈夫的兵士であると云ふも過言でない、彼等の職業は勿論商賣もし耕作もし牧畜も遣るけれども最も彼等の勇氣を働かし而して大いに喜ぶ所の仕事は何かと云へば強盜である最も同國人の讖歎する所の面白い仕事は強盜である、或は他の部落を陥れ幾人の人間を殺すことを非常な名譽

と思ふて居るんである、カムには強盗の歌がある、其俗語がナカ〜面白い、其語ひ方は如何にも勇壯活潑で斃れて後己むの氣概が充分に充ち満ちて實に勇ましく聞えるです、だから小供杯は大いに悦んで其強盗の歌を謡うて居る實に小供の心をして奮起せしむる所のものは此強盗の歌であるてす、西藏には軍歌と云ふものはない、矢張り此カムの強盗の歌を以て軍歌に代用して居るてす、其俗語はナカ〜面白いから二つ三つ譯しませう

果なき原の草の上、巖角するどき險崖の際、鐵の蹄の馬立て、討手に進む我心

彈丸ちる霞の中とても、雪波立てたる風とても、厭ふことなき鐵の靴、勝手に進む我心

持みは妻子に非ずして、寄邊は父母にあらぬなり、何かの艱みを忍びつゝ、成功に進む我心

右の歌を謡ふには其始めに總て「ア、ラ、ラー、ラ、ラ、モ」と云ふ發語を用ひ其終には「ラ、ラ、モ、ラ、ラ、ラ、モ」と云ふ語尾を附けて勢好く謡ふのであります

俗語の用法 斯う云ふ勇壯なる語は澤山ありますので、其歌を謡ふ調子の活潑さは人をして知らず〜如何なる曠原、漠野の中へも又如何なる高山積雪の中へも敵を討つ爲めには一身を抛つて進まうと云ふ勇氣を喚發せしむるに足るてす、ソコで此歌の心はドウ云ふものかと云ふと實に好

い歌てす、斯る勇氣がなければ到底大敵を滅して國難を救ふとは出来ない、併し斯う云ふ立派な心の歌もてす強盗をする場合に用ひますと其歌は兇器となり其人は大悪人とならざるを得ない、若し之を交戦の場合に用ひますれば其人は大忠臣となり所謂國家なる一集合體を利益する譯になります、勇進すると云ふ心は一つであるけれども方法として用ひる場合と目的如何に依て善と惡とに岐れるてすから何事にしろ只勇進すれば宜いと云ふ譯には行かない、又方法はどんなでも宜いと云ふ譯に行かない、此頃世間の淺はかな學者或は生物識の僧侶又は才子らしい人を欺く所の實に恐るべき毒の言葉がある、其言葉は實に憎むべき言葉である、ソリヤどう云ふことかと云ふと目的を達する爲めには如何なる方法をも執るべしと云ふ謬言である、此意味を極端に解釋すれば己れの幸福なる目的を達する爲めには法律規則にさへ觸れなければ假令他人を迫害しても白晝公然強盜的行爲を遣つても構はぬと云ふ譯になる斯る方法で成功したのは所謂惡魔の成功で憫むべきある、それ故私は斷言します、目的を達する爲めには只誠實なる方法を執るの一あるのみと、目的と云うた所が己れの利益を謀るのみなれば止すが宜いです、他人を利すると云ふ目的を立て誠實な方法に依て之を實行して行けば自ら自分も利益を得られて其國民が和合して國が圓滿に治まるてす、之を要するにカムの強盜の歌でも其歌の心は好いのですから之を軍歌に用ひても差支ないと云ふ感じを述べて置くまでの事てあります、次は

第一百十九回

西藏宗教の將來

迷信中の理想　西藏宗教の將來に就て述べます、前から述べて居る所に依ても略ぼ分りませうが西藏一般の國民は實に佛教を信する事に依て生きて居るので、他の學者から云へば或は迷信であるとも云ふかも知れない、勿論迷信が多いので殆ど皆が迷信であると思ふ程感心しない事が澤山ありますけれども其中に幾分の眞實を含んで居るす全く間違つて居る事ばかりと否定するのは輕卒な判断と云はねばならん、丁度多くの石の中に小さな寶石があるやうなもので、玉が眼に着かぬからと云うて石と共に棄てて了ふのは識者の取らぬ所である、西藏國民の迷信中にも眞實價値のある信仰ありと認識せなければならん、扱その西藏國民の眞實の信仰はドウ云ふのかと云ひますと二つあります、一は人間より以上の實在物があつて其實在物は確に我々を保護して下さる、テ其實在物との交通は我々の信仰に依て爲し得ると云ふことを確かに信じて居るです、其存在物を信する上に於ては種々の間違つた祭事や儀式等があるけれどもソレは小さな寶玉の周圍にある岩のやうなもので其本心に於ては確に佛陀或は菩薩があつて我々の困難を救ひ我々に幸福を與へて下さると云ふ信仰を確實に持つて居るです、尙ほ其上に神と云ふものを認めて居りますけれどもどんな神でも或

は腹を立て、人民に害を與へ仇を加へる事がある、例へば耶穌教の神さんでも其昔し人民が罪惡に陥つて濟度し難いからと云ふて大いに憤り大洪水を起して總ての罪惡人を殺し只其中の善い人間即ちノアと云ふ者を救ふたと云ふやうな依怙愚直をする者である西藏の神も皆然り、所謂人間の喜怒哀樂の情緒を其儘に實行される者である、所が佛はどんな事があつてもお怒りなさらぬ、佛ほど深い慈悲と圓滿なる智慧を持つて居らるゝ有がたい方は世界にはないと堅く信仰して居るです、ソレはモウ實に意味なる人民でも神と佛の違ひ即ち神は怖いもの佛は有がたいものと云ふことをチャンと知つて居る、斯の如く西藏人民は極く詰らない迷信を澤山持つて居るに拘らず斯う云ふ立派な信仰を持つて居る、今一つは原因結果の道理で何事も自業自得、自分の爲したる惡事は自分で苦しい思ひをして償はなくちやアならん、又自分の爲したる善事の結果即ち快樂幸福も亦自分が受得らるのである、而して原因結果の規則は未來永劫に續くものである、所謂種が實となり實が種となつて何處までも繼續して行くものである、ソレと同じ事て我々の心も亦死んだからと云うて決して滅するものでない、再び此世に生れ變つて來るものであると云ふことを確に信じて居るのは所謂死礫中の壁であるです、所が生れ變つて來ると云ふ原因結果の道理を信する所からして何處其處のラ一マ其者は今度何處へ生れて來たとか彼處に生れ變つて來たとか云うて騒ぎ立てるのは所謂眞實の信仰が過ぎて迷信となつたのであります、只原因結果、自業自得の理法に基いて自分の心算其者は

未來永劫滅しないものであると云ふ尊い信仰は佛教信者として第一に有すべき信仰でありまして西藏人は最早斯う云ふ事の話を知りながらお伽話として母の口より吹込まれて居る、ですから西藏人の

家庭は説教場

のやうなもので古代の神話にしろ何にしろみな佛教に關係を持たぬ話の一つもないのですが、斯く迷信が深いに拘らず本當の信仰其者も矢張國民一般に普及して居るので御座います、夫故に古代のボン教の如きも何時しか佛教に化せられて了ってサウして全く其旨意の違つて居る教が佛教の説明の通りに説き明かさなければ立たないやうになつたものですからコ、に新ボン教と云ふものが出来たので今は古いボン教の面目はどんなものであるか殆ど見ることで居るも出来ないやうになつて了りました、新ボン教の教理は佛教に似てサウして又神道の氣味合を持つて居る、丁度日本の兩部神道と云うたやうなものであるが併し其教よりも尙ほ一層進んで居ります、ボンと云ふは眞如と云ふことでボン其者が眞如の本體、法身であると説明してソレから教を説立て、全く佛教の如くに解釋して了つたです、是れ所謂偉大なるものに小なるものが化せられた譯です、コ、に最も訝しい事は西藏にマホメット教があるとして、其信者は支那人と往古カシミールから移住した者の苗裔とであります拉薩、シカチエを集めて凡そ三百人も御座います、此マホメット教徒は今も矢張其宗義を守り現に拉薩の市外にマホメットの寺が二つあり又墓所も遠い山の邊に

二つあるです、其一つの寺はカシミール人のマホメット教徒の集まる處で一つは支那人のマホメット教徒の集まる寺であります、デ此盛大なる佛教國に於て微々たる勢力ではあるがマホメット教の面目を維持して居るのは甚だ奇と謂はざるを得ない

回々教の未來

それから其教徒の言ふことが實に面白い、信者の云ふ所に依れば回々教にも佛教と同じく前世もあり未來もありますけれども現世の人間は未來も矢張人間に生れ動物は矢張動物に生れるものであると云うて佛教のやうに人が他の下等動物に生れる事あるとは云はんです、いよく仕舞にはドウなるかと云ふと神の國に生れるか地獄に行くかの二つであるとして斯う云つて居るマホメット教徒もあります、私が云ひました「お前達の信ずるマホメット教中にはそんな教理はない教旨は詰りキリスト教に依て立てられたのではないか、コーランの中には前世はあるが又後に生れ變つて來ると云ふ説明は殆どありはしない、全くないとは云はぬ、既に耶穌のバイブルの中にサウ云ふやうな意味も顯れて居るから全く無いとは云はないがお前達の教會に於てそんな事を云うた例はないドウも訝しいぢやないか」と突込みますと「イヤ無いことはない本當にあるンぢや」なんて本氣に云うて居る人が澤山御座いましたが是れは所謂佛教化されたものであらうと思はれる、此頃歐米の宣教師は耶穌教を西藏人に傳へやうとして百折不撓の精神を以て熱心に布教に従事して居られるのは實に感服の至りであるけれども彼の國は鎖國であるからして内地人には少しも其

教を及ぼすことは出来ない、先づダーチリンに出て来て居る人間或はシツキム地方に住んで居る西藏人に對して耶蘇教を傳へよふと云ふことを非常に企てて居ります、既に此布教の爲めには幾十萬の金を費やして聖書も西藏語の翻譯が出来て居る、其外に尙ほ細な書物も澤山西藏語に翻譯され又西藏語で佛敎の取るに足らぬ事殊に佛敎は殆ど迷信を以て満たされて居ると云ふ工合に説明して又十年此方、僅にダーチリンの掛け掛けると同時に宣教師は其地に足を入れて西藏人に對し殊に親切に教を施すことに盡力して居ります

第二百十回 西藏宗敎の將來

各宗敎の現状 前回に述べた如く基督教徒が熱心に盡力して居るに拘はらず今日までの所では全く不成功である、僅に得たる信者は所謂詐偽的の信者であつて決して信實の信者を得て居らない、幾分か信者らしい、信者の出て來てあるのはソリヤ純粹の西藏人ではない、西藏人と云ふ名はあるけれども實際はシツキム人である、西藏人と云うて居るシツキム人の中には眞實に信じて居る者も少しはあるけれども今日に至るまで内部から出て來た西藏人で眞實に信じて居る者は一人もないと云つて宜い位です、只口糊をする爲めに耶蘇敎に入つて居る丈けてあつて決して耶蘇敎を信じ



四 藏 第 二 大 喇 嘛 的 行 列

て入ッて居るのでない、ナカ／＼確實な信者であると云うて居る者もです、其者の家へ行ッて見ますと、秘密室内に佛陀を祀り日夜燈明を上げて置きながら外へ出ると自分は耶穌教徒であると言觸らして日曜日には聖書を持つて耶穌教徒の會堂へ出掛けて行くです、此等の西藏人は歐米人を誑かして只管己れの便宜と利益とを謀る爲に耶穌教の尊い聖書を道具に使ッて居るので實に驚いたものでありますサウ云ふ有様ですから既に宣教師の下働きを爲し恰も基督教の字引であるかの如く見えて居る西藏人も充分腹が太くなつて金が少し出来るかとデキに引繰返ッて自分は元より佛教徒であると云うて耶穌の教會堂から逃出して顧みない奴が澤山ある、ソレは斯うなる筈です眞實佛教を信じて居る者にはドウしても耶穌教に入ることが出来ない、ナゼなれば佛教の所謂解脱と云ふことは自分自身に於て絶對的自由、即ち精神的の最大自由を得るの謂であるのに耶穌教には神といふ一の無限の勢力者があつて自分が絶對的自由を得ることの出来ないやうになつて居るです、ソレに又因果の道理が耶穌教では明になつて居らぬ、尤も良い木は好い實を結び惡き木は惡き實を結びと云ふことがあるから全く無い譯ではないけれども如何にも其範圍が狭いて、もツと其理を推し擴めて所謂前世にも未來にも及ぼすやうにすれば屹度西藏人に對する道が立つてあらうと思ひます、又耶穌教には自業自得と云ふこともない譯ではない「爾自らの信仰、爾を癒せり」と云ふ、基督の言葉は即ち自業自得を意味して居るのでありますけれども今は此自業自得の理は教會的基督教の

爲めに甚だ範圍を狭められて其眞實の意味が明になつて居らぬ、自業自得の理を信すること甚だ厚き西藏人には不向きであらうと思はれる、若し基督教が西藏人に對し其布教の目的を成功しやうと云ふのには其教祖の救世主が仰せられた眞實の意味を發揮しなければならぬ、然るに西藏人を感化する爲めに數十年の間に何十名の堂々たる女宣教師が幾千万の金を費して布教に従事しながら僅に一二の信者すらも得難いと云ふに至ては其不成功にも又驚かざるを得ないではありませんか

斷案 扱西藏宗教の將來は如何でありますか、今最も勢力ある宗教は勿論佛教であつてソレに對する宗教はボン教、マホメット教及びイエスキリストの教である、けれども此三教は今日の状態を變しなければ決して佛教の地位を奪ふことは出来ない、西藏に於ける佛教は腐敗して居ると云うても前に云ふ通り西藏人は殆ど先天的に佛教を遺傳されて居りまして尙ほ幾分か好い現象が存在して居りますから其中に眞實の大菩薩が出て、彼の國の佛教の腐敗を一洗し而して佛教の眞面目なる活潑々地の大自由の道理を發揮すれば必ず再び興ることがあります、けれども今日の様子は先づ西藏佛教は下火に向ッて居ると云はねばならぬ、只其將來は基督教其者も今のやうな腐敗した教會の宗條的基督教では西藏人に對しては殆ど布教の見込なしと云うて宜い、又西藏佛教も今言ふ通り大活劇を試みる大菩薩が出なかつた時分には此儘習慣的、儀式的に維持される位のものであると私は考へるのであります是れて西藏の宗教の將來と云ふ問題は仕舞にして置きます

舊師及び故郷への信音 昨年印度へ交易に行つた所のツアルンバと云ふ者が明治三十五年の四月三十日に歸つて参りました是れは先にも申しました通り私の信書を印度のダーチリンに持つて行つてサウしてサラットトチャンドラダース師及びシヤブツンと云ふラーマに渡し尙ほ故郷の方へも手紙を送る手續をして呉れた西蔵の商人であります、デ、セラの僧舎へ無事に歸へつて来たと云ふ報知がありました其時には私はセラに居らないで大蔵大臣の處に居りました、ソレで小僧がワザく其報知を傳へに來ましたから私は其翌五月朔日の朝から其返事を受取り旁々行きました、幸に主人が居りました一別以來の挨拶を終りますとツアルンバの云ひますには「ドウもダーチリンへ行つた所がサラットト、チャンドラダース師は國（印度）の方へ歸つて居られても不在であつたから行際に手紙を渡すのが出來なかつた、仕方がないからシヤブツンラーマに渡さうとした所がラーマもネバールのカタマンドーの方へ寺詣りに行かれても不在であつた、仕方がないから一旦カルカツタの方へ行つて今度歸つて來ると丁度サラット先生もシヤブツンラーマも歸つて居られたから手紙を渡した、サラット師は返事を書いて置くから明後日取りに來いと云ふ話であつたけれども私は再びサラット師の處に行くことが出來なかつた、ナゼなれば私は政府の命を帯びて鐵を澤山買入れた、若し其事が英領印度政府に知れた時分には私は捉へられて酷い眼に遇はねばならん、だからサウ長くダーチリンに留まつて居ることは出來んから其翌日出立して歸ることにした、尤

もシヤブツン氏からは手紙を貰つて來た、シヤブツン氏の手紙の中には委細書いてある筈だ」と云うて手紙を呉ました、ソレを披いて見ると「サラット師への手紙も着き其中に封じてあつた故郷への手紙は書留にして故郷に送りました、私までへ手紙とち家苞を下すつて有がたう御座います」との返事です、西蔵では手紙を出す時分には必ず土産を添へて遣る、相當の土産がないと此間申しましたカタと云ふ薄絹を入れて遣るのが例ですから私も相當の土産を贈つて遣りました其禮狀旁々より英杜戰爭其他いろくのダーチリンからの土産話を聞いて別れたことと云ふ事です
具足戒 五月十三日即ち西蔵曆の四月四日です、其時にツアン州のシカチエ府のタシルフンツ一寺の大喇嘛バンチエンリンチエ即ち第二の法王が拉薩府へ着かるゝ事になつたです、此バンチエンリンチエは其當時廿歳の方で末の歳であります、モウ廿歳になれば具足戒を受ける資格がありますので今の法王ツツラン、ギヤム、ツォー大喇嘛より其戒法を受ける爲めに來られるのです、是れはナカナカの大典で法王が位に即く時とか或は法王が具足戒を受ける時と同一で上下擧げてバンチエン、リンチエを拉薩の市外即ち法王の宮殿の西バーマリーと云ふ邊まで歡迎に出掛けて行きます、私も迎へ旁々見物ながら例の藥舖の李之楫氏と共に家の小供杯を連れて出掛けました、ナカく立派な行列であります、其行列の概略は嘗てシカチエ府に私が居つた時分に説明したのと同

一てありますからコ、には略します、此日其行列を見まして歸り掛けにツァールンバがお茶を上げるからと云ふものですから私は一寸其宅へ寄りました、デ上座の敷物の上に座り込んで居りますと一人の紳士が入って来ました、其人は法王の商隊長を勤めて居る男で タクボ、ツンバイ、チヨエン、デヨエ、と云ふ人です、ツァールンバも矢張政府の爲めに鐵を買ひに行つたり何かしますから其關係で互に往來することがあるのです、私の座つて居る室へ入つて来るなりジーツと鋭い眼で暫く私の顔を見詰めて居つたです、私は其男の容態を見ますのに餘程腹の悪い男らしい、けれども又非常に才子であるやうに見受けました

第二百二十一回 秘密露顯の端緒

危機を孕む 扱て其商隊長はズツと進んで私の前へ座りましたが其座にはツァールンバも居れば其妻君も居るです、所でコ、に實に危い事が早くて来た其原因を説明しなくてはならん、ツァールンバは印度の方へ交易に行く時分に私の勢力のますゝ進んで来るのを見て大いに望みを屬して居つた、それは私が若し法王の侍從醫になるならば夫れが爲めにツァールンバは非常に便宜を得らるゝと云ふ考を持つて居つたからです、デ印度から拉薩府へ歸つて見るとますゝ私 の名聲が

舉つて来ました、又或部類の人は私の眞實の名譽よりも本當の事實よりも誇大に吹聴し患者の三人も助かれれば五十人も助かつたやうに云ひ西藏にはアレ丈けのお醫者さんは最早ないと云ふことまで云出すやうになつた、そののみならず私の居る所は大蔵大臣の邸でもあり又總ての高等官吏及び高僧にも交際があると云ふことを以前から知つて居て大いに頼もしく思つて居る折から印度へ行ってカルカツタに於て日本人が義氣に富んで居る事やら支那と戦争をしたとは云ふものゝ其實支那の爲めに謀る所もあると云ふやうな事を聞いて益々日本人を頼もしく思ふやうになり西藏へ歸つて其話を私にした事もあるです、又タクボ、ツンバイ、チヨエン、デヨエと云ふのは是れは一體タクボ、ツンバと云ふ大なる富豪の番頭を勤め尚ほ法王の商隊として北京の方へ度々出掛けたことがあつた、既に此男は北清事件の時に北京に居つて日本兵士の爲めに商品の總てを強奪されたのを憂ひ是れは決して北京政府の物でないからと云うて段々其兵士に頼んだけれどもドウしても聞いて呉れなかつたさうです、所が最早其強奪した物を運び出すと云ふ場合に迫つて来たので先生早速軍營へ出掛けて將軍に歎願したさうです私は西藏人であつて決して北京政府の爲めに此荷物を持つて来たのでもなければ又持つて歸るのでもない、だからドウぞ私が強奪された品を返して戴きたいと云ひますと其將軍は西藏人と云ふことを聞いて大いに同情を表せられ早速支那文字と妙な文字で(假名交りならん)書付を認めて將軍自身に判を捺し之を其兵士に渡せと云ふから其書付を持ち歸つて其兵士

に渡した所が其取押へられた所の品物は總て元の如くに返して呉れた、誠に日本人と云ふ者は義氣

に富んで居ると云ふことを喋々とツアールンバに話したさうです

商隊長の疑惑

ソコでツアールンバの考に此タクボ、ツンバは法王の商隊長であつて能く

日本人の義氣に富んで居ることを知り且つ日本人の世界に武力を輝かして居ることを知り居るが故

に此際此男にジャバン、ラーマの身上を明して置かば大いに得策であるかも知れんと云ふ考を胸

の中に持つて居つたさうです、けれども私はそんな事は夢にも知らなかつた、所でタクボ、ツン

バは私の顔をジロリと眺めていきなり「貴方はドウも奇態だ」と挨拶もせずには掛けた、私は黙

つて居りますと「私は始め貴方を蒙古人かと思つたがドウも純粹の蒙古人とも思はれない、又支那

人かと云ふに全くの支那人でもない、勿論歐米人でない事は能く分つて居る、一體貴方は何處のお

方でありますか」と云つて私に訝しく擽んで尋ねて來たです、ソコで私が答へやうとする其途端ツ

アールンバは得たり賢しと「此方は即ち日本人である」と斯う一口に答へて了つた、サア大變です、

拉薩府に於て日本人だと云ふことを明かされたのは此時が最切であります、ドウも困つた事を言ひ

出したと私は思ひましたけれども其場で打消す譯にも行かず何か話でもあるのかと思つてジーツと

私は黙つて居りますと其タクボ、ツンバは成程と云つて大いに感心した様子で「ソレで分つた、ド

ウも私は日本人だらうとは思つたけれども日本人がマサカ我國に入つて來るといふ事は容易に出來

ることでないと思つたからサウは言ひ出さなかつたけれども日本人と云はれて見ればソレに違ひな

い、私は幾人も日本人を北京で見た事があるから」と斯う云ふてすつかり確定して了つたです、私

が一言も言はぬ先に向ふ二人で私を日本人と確定して了つた、確定しなくても日本人である事は

極つて居るけれども今まで隠してあつた事がすつかり顯れて了つたです、私は其儘何も云はずに様

子を見て居ますと其タクボ、ツンバは私に對し「ヤア實に善い事が出來た、豫て私は日本へ一應渡

つて何か珍しい物を買つて來て此拉薩府で賣出したならば大變儲かるだらうと云ふ考を持つて居

た、所が交易場には支那語を知つて居る者も多少あるさうですけれども内地へ入れば支那語を知つて

居る者が殆どないと云ふことを聞いて居ました、私は支那語を能く遣るけれども先方が知らんではドウ

も間に合はない、ソレに兎に角外國人として行く時分には悪い人間に欺かれ易いからと云ふので能

く行かるとも思はなかつた、貴方のやうな好い人を得たのは誠に結構だ、セライアムチー(セラの

ドクトルと云ふ意味)と云へば此頃實に名高い、能く人の爲めに働かされると云ふことを聞いて居つた

幸ひ此家で逢うて見て私は大いに満足した、確に貴方なれば信ずるに足るからドウか私を日本へ連

れて行つて貰ふことが出來ないだらうか」と云ふ案外に好い話である「ヤアそりや宜う御座います

ドウしても私は日本へ一遍歸る心算でもありませんからマア其時に一緒に行くことに爲ませう」と斯

う挨拶をしてソレから日本に就てのいろ／＼の話をしますと商隊長も自身が北京で困難した話ソ

レから又日本の將軍から強奪品を返して貰った事やら日本兵士の勇氣は歐米の兵士に勝つて居る事等を喋々と述べ立て、日本に大いに同情を表して居られた、ソレは全く諛辭でない、其人の心から云うて居つたです。ソレは其人に云つたです。「併し今私の日本人たることを知つて居るのは拉薩府には貴方とツアールンバさんより外にはない、若し貴方がたが此事を言出すと却て貴方がたに災難が懸りはすまいか、充分ソレは御注意なさらんと可けません」と云ふ警語を與へた。「ソレは宜う御座います、貴方が身の利益になるやうな事情に當て籍つて來た折を見ていよく貴方の本性を顯はして貴方の便宜を謀りサウして日本人の名譽を我國に輝かすやうにしたら大いに宜しう御座います」と斯う云ふやうな愉快な話であつた、其日はソレで事が済んで其晩私は藥舖に來て泊りました。

又疑はる 其泊つた翌日書記官が例の如く遊びに來て私にいろ／＼の話をした、其話の中に餘程私の注意を喚起した事があつた、ソレは「ドウも貴方は支那の福州の方だと云ふが私は勿論サウだと信じて居りますけれども支那人一般の性質と貴方の性質がドウも違つて居る所がある、餘程奇態だ、貴方の先祖は何處かの國ではありませぬか」と云ふ斯う云ふ尋ねなんです。「サアどうか、先祖は何處から來たか私は一向知らないがナゼ貴方は私の性質が支那人一般の性質と違つて居ると云ふことを云ひますか」と問ひ返したら「ドウも日本人の性質は機敏でドウ／＼までも辛抱して進

んで行く」と云ふ氣象を持つて居る、所が支那人は向ふ見ずに進んで機敏の事を遣ると云ふことの出來ない質の人間が多くて貴方のやうな人は少いですソレにドウも支那人は私共はじめ優長な風があるけれども貴方には優長な所が餘程缺けて居る、所謂寛大と云ふやうな様子がなくつて極く細に立廻ると云ふやうな風が見えて居る、其邊は何と云つて宜いか、一言に云へば大體支那人と見られぬやうな性質を備へて居るが一體貴方の先祖はドウ云ふ方か」と云つて尋ねたです、斯う云ふ事を尋ねたのは外ぢやアない、私の顔色を見ていろ／＼穿鑿して見やうと云ふ考であつたらしい、先生は以前から私と談話する毎に私の話に就てのいろ／＼の點から研究して見て全く是れは支那人でない、日本人であると云ふことまでは殆ど觀察を下して居つたから斯う云ふ事を云うたものである、けれども好い加減な挨拶をして其時は何氣なく別れましたが事が重なれば重なるものです。

上書を認む 書記官の話のあつた後に藥舖の奥さんの云ふ話が妙です。「どうもクシヨ、ラ(君よ)仕方のないもんですな氣狂ひと云ふものは」と最初に言ひ出した「何ですか」と尋ねますと「彼のパーラーの氣狂ひ公子が妙な事を云ひ出したのです、氣狂ひの言ふ事ですから勿論取るに足りませんけれども公子の言ふにはコリヤ極く秘密だけれども今に乃公の國に大變な事が起つて來ると云ふ、ソリヤどう云ふ事かと段々聞きますと外では無い日本から坊さんが來て居る、ソレは坊さんと云ふけれども確に政府の要い役人に違ひない、其役人が國を探る爲めに來て居る、ソレは誰かと云

へば即ちセライアムチーである、彼は私がゲーデリンに行つた時に遇うていろく話をした人でナカく豪い方なんだと頻に云つて居りましたが奇態な事を言ふぢやありませんか、彼の人ゲーデリンに行つたと云ふことは誰も知らないのですけれども本當にゲーデリンに行つて居た事があるのせうか」と云ふ尋ねてすから「ソレは氣狂ひだから大方夢でも見てそんな事を云つて居るのでせう、ドウせ氣狂ひの云ふことは當てになりません」と云うと奥さんの云ふには「家の人は氣狂ひの言ふことだけれどもコリヤ本當らしいと云ふて大いに信用して居るやうです、兎に角サウ云ふ話を聞きましたから貴方に内々申上げて置きます、お氣に懸けて下すつては困ります」と云ふ話は五月十日の事で御座います、其晩私は大藏大臣の宅へ歸り其翌日直ぐセラの僧舎へ歸りまして夜分人の寢静つてから法王に對する上書を書きました、是れは事いよく露顯に及んだ時の用意の爲めて御座います

第二十二回 商隊長の秘密漏洩

法王への上書

はナゼ其時に書いたかと云ひますのに此事はドウ事が變るか分らない最早や大分に様子が顯はれて來たから此時に當つて處置を施さないと大なる禍害を來しますゆゑ先づドウ

云ふ方向に變しても自分は佛教修行の爲めに此國へ來たのであると云ふことを證據立てる用意をして置かなければならん、ソレは此上書を認めて置くことが必要であると云ふ考から上書を認めたてす、其上書の書面は只今も私の手に殘つて居ります、自分ながら其文が實に面白く出來た、私は西藏文を澤山作り歌も澤山作りましたけれども此時ほど愉快の文が出來たことはなかつた此文書を以て我熱心を顯はし人をして感動せしむるに足ると云ふ勢は確に此文面に顯はれて居ると自分で信じたてす、此文章は三晩掛つて出來上つたので御座います、其文の大意は先づ西藏風に法王に對し敬意を表する言葉を先づ書き列ねソレから此書を以て清められたる美しき美の主人に對し私は世界の人民の精神的苦痛を救ふ爲めに眞實佛教の發揚を希望して此國へ來たのである、今世界に佛教の行はれて居る國は澤山あるけれども大抵小乗佛教である、大乘佛教の行はれて居る支那、朝鮮及びネパールの如きは全く見るに足らない、只其大乘佛教の眞面目を維持し世界に於ける佛教の粹として今日に現存して居るものは我日本佛教と西藏の佛教のみである、而して此對し所の純粹佛教の眞理の種を世界各國に蒔かなければならん時は確に來つて居る、世界萬國の人々は肉慾的の娛樂に飽きて精神的の最大自由を求めやうと云ふことに熱中して居る、此時に當つて眞實の佛教を以て其缺乏を満たすに非ずんば今日大乘佛教國の我々の義務が立たない、面目が立たない、夫れ故に果して西藏佛教が眞實我日本國家の佛教と一致して居るや否やを取調べる爲めに私は此國へ來たのである、幸

ひにして西藏の新教派の佛教は確に我國の正統派の眞言宗と一致して居る、其教祖(龍樹菩薩)も亦一致して居る、斯くも善い教を持つて居る兩國の佛教徒は互に合同して世に眞實佛教の普及を謀らなければならん、是れ私が千辛萬難を忍び雪又雪を踏え川又川を渡つて此國に出て來た所以である、其信實の精神は佛陀も感應在して此誰もが入り難い嚴重なる鎖國內に到達して今日まで佛教を修行することが出來たのである、此國の佛教守護の神々も我が誠心の願望を納受在して此處に止まつて佛道を修行することを許されて居るのである、然らば斯くも佛陀と佛教守護の神々が保護されたる私に法王殿下の保護を與へられて共に佛教の光輝を世界に輝かさんことを力むるは實に佛教徒たる者の最大義務に非ずや、私は大に此事を希望して已まんものであると説きソレから錫崙のダンマ、パーラー居士から印度の佛陀迦耶の金剛道場の菩提樹下に於て釋迦如來の舍利と銀製の舍利塔とを法王に献上して呉れると云つて頼まれて來ましたから之を差上げますと云ふ文句を入れて歸結を附けたのです、其文章が出來たから良い紙を捜して早く之を寫して差上げたいと云ふ心の急なる爲めにソレを差上げたが爲めに私の身分が露顯して死刑に處せらるゝと云ふやうな事も何も考へなかつたです、五月廿日又拉薩へ歸つて大藏大臣の宅へ泊りました、其日はツエーモエ、リンカーと云ふ林の中へ前大藏大臣と一緒に園遊に行きました、是れが西藏に於て私が最後の面白い遊びであつた、其處でマア互に胸襟を披て西藏古代の高僧の傳記其他いろ／＼の話をして愉快に一日を過し

ました、所で此頃は第二の法王が拉薩府へお越しになつて御逗留であるからして政府の者は非常に忙しい、又人民も相當に忙しい、地方の人士も澤山拉薩府に集つて商ひも相應にあるからです、話は少し變りましてタクボ、ツンバイ、チヨエン、チヨエの事に成りますが彼は五月廿日丁度私がリカン(園遊)に行つた日です、其時にヤブシー、サルバ(新しい法王の親家と云ふ意味)へチヨエン、チヨエが遊びに行きました、一體今の法王は父母は既に亡くなられて只兄さんがあるだけ、其兄さんが親の代りになつて支那皇帝から公爵の位を受け、デラ薩府の南の側に新しい邸が出来て其處に住んで居られます、法王の威權赫々たると同時に其兄の威光も亦大に民間に顯はれて居る、其兄さんにチヨエン、チヨエが逢ひましている／＼の話を折に餘程話の都合が好かつたと見えて私の事に就て何か話し出したさうです

秘密を漏す

其時の話の様子をツァー、ルンバから聞きますと斯う云ふ様子でありました「ドゥも我國へ感心な人が來て居る」と云つて頻に譽め立ると法王の兄さんは「ソレはドゥ云ふ人か」「外でもないが日本と云ふ國から我國へ妙な人が來て居る、其人は日本の正しいラーマである、其ラーマと云ふのは支那の和尚に似たやうな者であるがソレよりもマダ豪い、本當の坊さんと見えて毎日二食、ソレも日中(正午)を過ては少し喰ない、ソレに肉食をしない、又酒も飲まない、ドゥも感心なもので」と云うて喋々述べ立てたさうです、時に法王の兄は「其人は一體何處に居るのか」

と云ふと「ソレは貴方御承知でせう、セライアムチーです、彼の名高いセライアムチーです」と聞
 くより法王の兄は暫く考へた後「セライアムチーと云ふのは此頃非常な評判で既に我法王に於ても
 お迎へになる位の事又貴族、高僧も争つて迎へられると云ふナカナカの名醫、僅か一二年の中は是
 れ丈けの名聲を博する程の奇々妙々の醫術を施すと云ふ所を見るとコリヤ迎も支那人でない、事に
 依ると西洋人ではあるまいかと思つて居つたが今日お前の言ふことを聞いて始めて分つた、成程日
 本の人間は西洋人に劣らない豪い事を遣るもんだ、併しドウも困つた事が起つたね」と云うて首を
 傾けたさうです、ソコでチヨエン、ヂヨエは「何ですか困つた事と云ふのは」と申すと「なアに外
 ぢやないか日本と云ふ國は私の聞く所に依ると英國と親しいさうだ、英國と親しいとするとドウも
 怪しい、尙ほ此國は支那の大國すらも苛める位の強力の國である、況んや我國の如きは小國殊に佛
 教國であるから自分の下に附けやうと云ふ考で先づ國事探偵を我國に派遣して我國の内情を探らし
 めたものと考へる、ソレはモウそれに違ひない、ハテ困つた事が起つたな、セライアムチーに關係
 ある貴族達は又サラット、チャンドラダース師が入つた時のやうに非常な困難に遇ひはすまいか、
 セラ大學も

閉門の不幸

に遇ふと云ふやうな事が起りはすまいかドウも困つた事だ、何にしてもコリヤ
 打棄つて置くことが出来ないがドウしたもんだらう」と云出したさうです、チヨエン、ヂヨエの考

ては法王の兄は無悦ぶだらうと思つて言出した事が案に相違したので大に憂への状態に變じて了つ
 た、固より一定の主義と見識とを持つて居らぬ所のチヨエン、ヂヨエは忽ち恐怖の念を懐いて大に
 私を辯護しやうと云ふ氣で「なアにソリヤどうしても政府の國事探偵と見ることが出来ない、ナゼ
 なれば彼の人には肉食をしなくては殆ど一日も居られない程の拉薩府に居りながら殊にセラ大寺では
 肉粥や肉の食物を布施として澤山施される處に居りながらソレを少しも受けずに麥焦し許りを喰つ
 て居ると云ふのは是れは必ず日本の尊いラーマであるに違ひない」と云うて非常に力を籠めて説明
 したさうです、所が法王の兄の云ひますには「ソリヤお前達は智慧が足りないんだ、世には如來に
 能う似た惡魔がある、惡魔ほど如來に能う似せるものだ、釋迦牟尼如來より第五代目の優婆塞多尊
 者は佛滅後に生れた方で全く佛陀にはお遇ひ申すことが出来なかつた、デ或時眞の佛陀即ち三十二
 相、八十種好を備へたる金色圓滿の佛陀の姿を見たいものだが扱どう云ふ方法にしたら見られるか
 知らん聞けば第六天の魔王は佛陀世尊在世の時に其眞實の相好を度々拜したと云ふ事であるから彼
 に頼み彼の神通力を以て其姿を一つ見せて呉れると言ふたらば屹度見られるに違ひないと云ふ考を
 起して、第六天の魔王に頼むと魔王はデキに佛陀世尊の姿を現はして尊き金剛道場に坐せられた、
 優婆塞多尊者は其姿を見て自ら三拜せざるを得なかつたと云ふ、夫程尊く現はれた、其の如く惡魔
 の王が眞實佛陀の如く見せ掛けると云ふことは實に仕易い事である、恐らくセライアムチーも其實

第百二十三回 西藏退去の意を決す

國事探偵でありながら眞實僧侶の如くに装うて大に我國民を惑はして居るのかも知れない、決して信ずることは出来ない、且つ我國は彼の通り嚴重に鎖してあるのに何處から来たか分らないか入つて来ると云ふに至ては必ず一通りの奴でない、何處からか飛んで来たのか或は不思議の作用を遣る者であるかも知れない、だから容易に輕卒な取扱ひも出来ないが併し困つた事が出来たと聞いてチヨエン、チヨエは眞蒼になつて飲んで居る酒も一遍に醒めて了つたさうです

商隊長の狼狽　タクボ、ツンバイ、チヨエン、チヨエ（以下單に商隊長と記す）は心配らしい顔をしてツァールンバの處へ尋ねて来たが其話は言はぬ積りであつたさうです、丁度晩であつたものですからツァールンバは酒をちりなさいと云つて充分酒を侘めた、所が商隊長は焦飲のやうな工合に頻に飲んで居つた、固より親しい友達の仲ですからツァールンバが「貴方何か心配な事があると見えて焦飲のやうな工合に酒を飲んで居るがドウしたのですか」と云ふと「イヤ何でもありません」と云つて始は少しも云はなかつたさうです、段々酔が廻て来るに従て言はぬ決心の奴がとう／＼口を開いて法王の兄との話の一伍一什を話して了つたです、デ其話の終つた時は夜



ツァールンバの驚愕

の十二時で先生は其儘歸ッて了ツた、其翌朝早く使に馬を持して私をセラへ迎に遣したさうですけれども其時私はセラの僧舎に居らない、尤もツァールンバは大抵私が大藏大臣の宅に居るだらうとは察して居ッたですけれども自分の處からデキに使を遣すことを憚ッて能う遣さなかつたのださうです、其夜商隊長が歸ッてからツァールンバ夫婦はモウろろくしてドゥしやうかと心配の餘り能う寝なかつたさうで可哀さうに其翌日大藏大臣の方へ手を廻して私を窃に呼出さうと云うて使を遣したさうです、所が私は其日は二十一日の事であつたから外へ行ッて居りまして大藏大臣の宅にも居らなかつた、ソコで大藏大臣の宅にも居らぬと云ふとになつたので「サアどうしたら宜からうか」と大變に氣を揉み出したソレは外でもない、ツァールンバがダーデリンから託されて來た手紙が私の手許にある、私が取押へられると其手紙を證據にされてツァールンバ其人は下獄されるであらうと云ふ恐れを抱き又私の身上も大に氣遣ツたのです、何しろ自分の身上に降懸ツた災難でもあり又私の爲めにも大難が起ツたと云ふやうな考てありますから夫婦は血眼になつて拉薩の町を捜し廻ツたけれども見付からない、殆ど疲れ果てドゥしたら宜からうかモウ縛られたのではないか知らんと思案に暮れて居る所へ私は其夕方不意と遊びに行ツた所が二人は飛び付くやうに涙を流して「貴方マア能う來て下すツた、コリヤもう佛様が貴方を導き下すツたのだ」と泣付くやうに云ふ、何事が起ツたのか知らんと思ツたけれども「サウ慌て、云はれた所で一向譯が分らぬ、靜にしろな」

の十二時で先生は其儘歸つて了つた、其翌朝早く使に馬を持して私をセラへ迎に遣したさうですけれども其時私はセラの僧舎に居らない、尤もツァールンバは大抵私が大藏大臣の宅に居るだらうとは察して居つたですけれども自分の處からデキに使を遣すことを憚つて能う遣さなかつたのださうです、其夜商隊長が歸つてからツァールンバ夫婦はモウろくくしてドウしやうかと心配の餘り能う寝なかつたさうで可哀さうに其翌日大藏大臣の方へ手を廻して私を窃に呼出さうと云うて使を遣したさうです、所が私は其日は二十一日の事であつたから外へ行つて居りまして大藏大臣の宅にも居らなかつた、ソコで大藏大臣の宅にも居らぬと云ふとになつたので「サアどうしたら宜からうか」と大變に氣を揉み出したソレは外でもない、ツァールンバがダーリンから託されて来た手紙が私の手許にある、私が取押へられると其手紙を證據にされてツァールンバ其人は下獄されるであらうと云ふ恐れを抱き又私の身上も大に氣遣つたのです、何しろ自分の身上に降懸つた災難でもあり又私の爲めにも大難が起つたと云ふやうな考てありますから夫婦は血眼になつて拉薩の町を捜し廻つたけれども見付からない、殆ど疲れ果てドウしたら宜からうかモウ縛られたのではないか知らんと思案に暮れて居る所へ私は其夕方不意と遊びに行つた所が二人は飛び付くやうに涙を流して「貴方マ能う来て下さつた、コリヤもう佛様が貴方を導き下さつたのだ」と泣付くやうに云ふ、何事が起つたのか知らんと思つたけれども「サウ儻て、云はれた所で一向譯が分らぬ、静にしなさい」

と云ひながら席に着いて話を聞くと例の商隊長の話を説明したです
ツァールンバの苦心 二人は代る／＼説明し了つて「扱貴方ドウして下さる御思案で御座いますか、兎に角私が持つて歸つた所の彼の書面は焼いて戴きたい、ソコで貴方の方針はドウ云ふ風にも極めになる積りで御座いますか」と尋ねられた、ソコで私は答へた「イヤ私は極つて居る、此間からチャンと上書も認めてあるし、何時事が起つて来ても氣遣ひのないやうに私の方ではモウ極りはチャンと付けてある」と云ふと「ソレぢやア貴方はモウ知つて居るのですか」と云うてびつくりして居る「ソレは分つて居る、其位の事は知つて居る、ソレだから貴方は恐ろしいお方だ法王の兄さんは貴方は理想外の神通力でも得て居るやうに思つて居なされる、イヤ神通力も何もないが私は推理上斯う云ふ事が起つて来るであらうと大抵知つて居たから其下拵へをして居た」と斯う云ひましたけれどもツァールンバは推理作用が鈍いから「イヤ貴方は神通力があつて商隊長と法王の兄さんとの話を知つて居られた、ソレで今も貴方が此處に来られたのは貴方がソレと悟られての事だソレならば早く来て下されば宜いに、私共は昨夕寝ずに居た」と云つて愚痴を溢して居たです、ソレから又「貴方は其上書を法王に差上げなされるのですか、そんな事をされては我々は堪らない貴方は尊いラーマに違ひないけれども法王の兄さんはア、云ふ心の黒い人ですから何を言ひ出すか知れない、法王が若し兄の言ふ事を聞くと此先さドウなるか分りやアしません、サウなると我々は困難し

ますがドウです」と云ふ「兎に角今夜断事観三昧に入ッていづれの方法を執るが宜いかを極めた上でなければドウすると云ふ決定は出来ないが兎に角私が斯う極めやうと云ふ方法丈けを云うて置させう、先づ其

執るべき方法

は四つある、一は日本人として拉薩府に入ッて来たのは私が始めていある、

事コ、に及んで私の身分、心事を此國人に知らずに出で行くと云ふのは如何にも残念であるから假令私が害を受けても貴方がたや大蔵大臣及びセラ大寺に害を及ぼさなければ私は此處に止まつて法王に上書します第二は上書して私は身を完うすることが出来ても他の人々に害を及ぼす愛ひがあれば断じて上書しません、第三は上書せずに私が印度の方へ出て行ッても其後に此國民に害を及ぼすやうな事が起らなければ私は上書せずに印度へ歸ッて了ふ、第四は上書の如何に拘はらず私が印度へ歸ッた後に私が知ッて居る人の總てに禍が及ぶならば私は歸らない、此儘此國に居ッて上書します、ナゼなれば私が歸ッても害が起り歸らないでも害が起るならば其難義を知人と共に受けて此國で死ぬのが私の義務であるからです、只自分丈け遣れて出ると云ふことは断じてしません、若し印度へ歸ッて行ッても此國に大なる害が起らないか、或は全く害が起らないと云ふ見込が断事観三昧で立ちますれば私は歸ッて行きます、デ此四通りに分けて私は今晚断事観三昧に入ッて其執るべき道を極めやうと思ふ、併し是れは私か極めるのでドウも自分の事を自分で極める丈けでは

氣が濟まぬから尙ほ私の師匠のガンデン、チー、リンポ、チエに就て此事を問ひ糺す、勿論私は日本人で今度斯う云ふ事になつたから歸ると云うては問はぬ、私は巡禮に出掛けにやアならぬ必要があるが出掛けた後の多数の病人の利害如何と云ふ點に就て判断を願つて二者一致すれば之を執り尙ほ其場合に一致しなければ更にチエ、モエ、リンのラーマに頼んでモウ一遍判断して貰ふ、デそれが師匠の判断と一致すれば其判断に従ひ私の判断と一致すれば其方に従ふと斯う答へました、スルトツアールンバ夫婦の云ひますには「そんなにも外の方に見て戴くことは要りません、貴方が極めればソレで宜いぢやありませんか、ドウか貴方丈けで極めて下さい」と云ひましたけれども「ソリヤいけない、斯う云ふ大切な場合には人の意見を聞かなければならぬ必要があるから私はサウ云ふ方針を執らねばならぬ」と云つた所が「そんならサウ云ふことにドウか早く願ひたいものであると云ふことで其夜は分れることに成りました、ソユて私は歸ッて大蔵大臣の別殿で獨り靜に断事観三昧に入ッて確に其一番善い點を發見することに力めた、餘程長時間を経て始めて無我の境に入る事が出来て其後判断が出来ました、ソレは此國に留まつて居ッては上書してもしなくても害がある、他國へ去ッても此國人に大なる害の及ぶことはない」と云ふ事であつた、先づ自分の判断は極りました其翌朝早速ガンデン、チー、リンポ、チエの處に参りました巡禮に出掛けると云ふ積りて伺ひました所が師匠は笑ひながら判断して呉れましたが「ドウも巡禮に出掛けると今まで苦んで居ッ

た病人が却て好くなる譯になつて居る、併し貴方の所謂病人と云ふのは本當の病人ぢやあるまい、マア貴方が此處に居ると拉薩府のお醫者さんが喰つて行くことが出来ないから其助けにでも成ると云ふやうなものかね」と云ふお話であつた、併し確に師匠は私の此國を去ると云ふことを知つて居られたやうですが實に恐しい人です、他にも尊いラーマは澤山あるやうに承りましたけれども兎に角私の親炙して教を受け殊に敬服したのは此方であつた、是れが師匠のガンデン、チー、リンボチエと私との最終のお訣であつたです。

第二百二十四回 恩人の義烈

心事既に決す 此日私は又大蔵大臣の宅へ歸りまして大臣に是迄の秘密を打明けやうと思つた所が生憎此日は五月廿二日即ち西蔵曆の四月十三日て法王がノルブー、リンカーの離宮から拉薩府へお越しになると云ふことと前大蔵大臣も奉迎に行かれたです、私も仕方がないから忙しい中に法王の行列を拜觀に行きました、此日の法王の行列は大したものて四人の宰相及び各省大臣等を始めとして皆新調の服を着け立派に飾り立てゝ出て行かれた、所が拉薩市街へ着かれる前からして非常に雨が降つたです、其の雨と云つたら酷い、頭が痛いやうな雨、雷に雨のみでなく霞も混つて居

りますので見物人も奉迎人も皆なツブ濡れます、所が斯う云ふ場合にても雨具を着けるとを許されない、下僕とか馬方とか云ふやうな者は、皆合羽を着て居るから好都合であるけれども、金襴の衣裳を着けた大臣達は顔も手先も雨と霰に打たれながらビシヨ濡れになつ



恩人に秘密を明かして事後を談す

て馬に乗って来る能は如何にも氣の毒の次第でした、所が其法王の行列が拉薩府をグルリと廻って釋迦堂へ指して入って了ふと雨がビタリと歇んで了つたです、サウすると實に愉快であつた、愉快であつたと云うて喜んだのは支那人でザマを見る法王の餓鬼が途中で大變な雨に遇つて好い氣味であつたと罵つて居た併し餘り奇態な雨の降方で實に不思議であつた、其晩です、私は今晚少し秘密にお話をしたい事があると云うて前大藏大臣と尼僧に遇ひました、尼僧は母親のやうに私を大切に

して呉れた方ですから僅か一年程の交りでありましたけれども十年も十五年も交際したより尙ほ情が深いのであります、其方と二人に對して私の秘密を明さなければならぬ場合に立至つた、私はいよく、拉薩府を去らうと極めた譯ですけれども我恩を受けて居る所の前大藏大臣と尼公に對し自分の本來を打明けずに欺いて歸るに忍びないからです、

秘密を明す ソレで私は前大藏大臣に申しました「秘密と云ふのは外の事ではありませんが私は一體支那人でない、日本人である今突然斯う云ふ事を申しても或はお信じなさぬかも知れませんがせんけれども其證據は是れて御座います」と云つて日本の外務省から貰つた外國旅行券を示しました、スルと前大藏大臣は少しく支那文字を知つて居られるものですから其昇り龍二頭の間大日本

帝國外務省之印としてある字を讀まれて私の日本人であることを確められた、デ前大臣は、成程ソレで分つた、私は貴方を支那人とは思はなかつた、始めはサウかとも思つたけれども貴方のやうに

佛法を熱心に學ぶ支那人には今まで私一人も遇つたことがない、且つ支那には僧侶こそ澤山あれ、佛教上の智識ある僧侶は殆どない位のもので、餘程學者であると云うて人が驚いて居る所の支那の佛教僧侶でさへ實に詰らぬものであると云ふことを私はしばしば発見した然るに貴方はサウでない、眞に佛教を研究して居られるから豫て私は支那人でないと思つて居つたが或は私の知らない支那の福州と云ふ地方には佛教の盛な地方があるのかと實は内々疑つて居つたが今日始めて明にすることが出来た」と云ひましてソレから「日本人と云ふのは西洋人と同じ事だと云ふやうな説もあるが違ふのか」と云ふ尋ねてありました私は「ソリヤ人種は全く違つて居る、日本人は貴國の人民と同一の種族である、所謂蒙古種族であつて決して歐羅巴人種ではない、又宗教も違つて居る」と答へましたソレは固より略ぼ知つて居られる事ですから直ぐ私の言葉を信じられて「扱その秘密と云ふのは只日本人だと云ふ事だけであつて何も外に變つた事がないのですか」と云ふ、時に私は「今日私が日本人たる事を法王政府に告げなければならぬ場合に立至りましたと云ひますと」ソレはドウ云ふ譯か、何も別段告げる必要はないぢやないか」と云ふ「イヤ實は斯う云ふ譯である」と云うて前に在つた一伍一什の事情を凡て打明けたです、けれども自分が斷事觀三昧に入つた事とガデンチーリンボ、チエに判斷して貰うた事が自分の斷定と符節を合はすが如くてあつたと云ふ事だけは言はなかつたです、ドウもソレを言ふと何だか自分が能く印度の方へ歸りたいと云ふ考

があるやうに成りますので能う言ひ得なかつたのです、前大臣は暫く考へて居りましたが「ソレでは是れからドウなさる心算ですか」私は斷然答へました「折角此國に來たもんですから法王に私の日本人であることをお知らせ申したい、此上書を」と云ひながら懐から前に書いてあつた所の書面を出して大臣の手に渡しました、サウして又私は大臣に向つて「其上書を法王に奉つて私の日本人であることをお知らせ申すのは誠に易い事ではあるけれどもサウすると貴方がたに大に禍を醸す事があるかも知れない、依つて貴方がたが私の他國人たる事を知つたから政府に引渡すと云ふて私に

繩を掛けて

法王政府に渡して下さい、左すれば貴方がたに災害の及ぶ氣遣ひは御座いませ

ん、私は又私丈けの眞實の意見即ち佛法を修行する爲めに此國に來たと云ふことを法王政府に向つて説明しますからと決然と言ひました、スルと大臣は眉を顰めて言はれますには「ソリヤいけない、そんな事をしたならば屹度貴方は獄屋に入れられて遂には餓と凍えとに死なねばならん、假令又好い都合に行つて餓と凍えに死なぬにしろ屹度殺されるに違ひない、勿論外國人たる貴方を公然死刑に處すると云ふ譯にはいかぬから例の毒で以て筋に殺すに違ひない、何もそんな眞似をして死に行く必要はない、死んでは事が成らぬではないか」と私に嚴しく詰られました、ソコで私は「事が成つても他人に禍を掛けては何にもならない、自分が死んでも人に禍を及ぼさなければソレで充分

です、既に今日まで眞の親子の如くに慈愛された貴方がたも二人に禍を遺して自分の身だけ追れると云ふことはドウしても出来ませぬ」と云ひました所が慈愛深き老尼僧は今まで少し頭へて居られましたが眼には涙が満ちて非常に心配らしく又悲しい有様を呈して居ましたが一時に俯伏せになり聲を殺して泣かれました、時に大臣は辭色を正しうしてサウ云ふ立派な志のある方を殺して老先き短き我が災難を免れたとて何の役に立たうか、私も不肖ながら佛教を眞實に信じて居る一人である、自分の災難を免るゝ爲めに人に繩を掛けて殺すやうな事は出来ない、殊に私は貴方が國事探偵でもなければ又我國の佛教を盗む爲めに來られた外道の人でもない事は是れまで種々の方面から觀察して確に知つて居ります、假令

此老僧が殺されても

眞實に佛教修行に來られた方を苦めて自分の難義を免れることは私

には逆も出来ない、殊に我國の現今の状態は決して貴僧の本籍を明にすべき時機ではありませぬ、ですから一時歸郷せられた他日の好時機を俟つより外に仕様がなない私も不肖であるがガンデン、チー、リンポ、チエの肉弟である、又弟子である、其大慈悲の教を受ながら貴方を殺して私の難を免れると云ふとはドウしても出来ない、若し我々が貴方の去つた後に困難に陥るとがあるならば前世の因縁であると諦めなければならぬ」と云うて老尼僧を顧み「嗚、サウてはないかニンヂエ、イセー(悲智尼よ)」と云はれますと老尼僧は漸く頭を上げて嬉しさうに言はれますに「能うマア仰ッし

やッて下さいました、本當に危う御座いますから一時も早くお歸りなさるが宜しい、決して此方の事は御心配には及びません、此方の事はドウにか又方法が附きませうからして要らない義理立をせず、早くお立ちなさるが宜い、丁度此時機が忍んで立たれるには至極好い時であります、第二の法王バンチエン、リンボ、チエは此方に来て御座るし此月中は拉薩府の市街は上を下へと騒いで居りますから貴方がお立になつても誰も氣の附く者もありませず、誠に好都合であります、若し斯う云ふ時でもなかつた時分には假令疑ひを受けなくても貴方は逆も印度へ行くことが出来ないのであらうと私は思ふ、ナゼなれば既にラーメンバ(侍從隊長)が貴方を是非此國に止めて置かなければならんと云ふ意見で法王にも其事は既にお話があつた位ですから——此時こそ好時期早速お立ちなさる拵へをして早く立たれるが宜からう」と言葉に眞實を籠めて涙ながらに説き勸めて呉れました

第二百二十五回 出發準備

老尼僧の慈悲 私はその時此も二方の誠實なる慈悲の心に感じて心の底から眞に悦んだ餘り悦んだものですから覺えず涙が出ました此も二方の言はるゝ所は私に取つては誠に都合の好い事であるけれども去りとしてオイソレと云ふてデキに其言に従ふ譯に行きませんから一先づ言葉を盡して

「ち二方に後日禍の起らぬやうにドウカ私を政府に引渡して下さい」と云ふて説き勸めては見ましたけれどもナカ／＼聞入れて呉れなかつた、遂に老尼僧が私に向つて「そんなに争うて居ても仕方がないから兎も角チー、リンボ、チエに判断して戴いたらドウでせう、ソレで双方に害がないと云ふ事なれば貴方の望み通り法王に上書なさるも宜いぢやありませんか、なんぼ争つて居た所が前途の事が分らぬては駄目ですから」と云はれますと大臣もデキに其事に同意されました、ソコで私は只今まで言はずに居つたチー、リンボ、チエに尋ねた事をばトウトウ話さねばならぬ事になつて了つた、デ其次第を話し尚ほ且つ私が斷事觀三昧に入つて見た事も話しますとち二方は笑ひながら、そんな事なら何もこんな心配するに及ばないのである、最早お歸りなさる丈けの事だ、何も細を掛けて政府へ渡すのドウのと云ふことは要らぬ事だ、貴方が私達に義理立をしてそんな事を言はるゝのてせうけれどもソレは無益な事だ、もうチー、リンボ、チエがさう仰しやれば確かな事である、又貴方の判断までがソレと符合して居ると云ふのは實にコリヤ佛の思召があるからソレに背くと却て貴方が禍を招く基になる早くお歸りなさるが宜からう、其上又歸られる道々の事に就ても此方から保護をすると云ふ譯には行きませんけれども若し此事が露顯して貴方の後を追つて行くと云ふやうな事になればドウにか方便を附けて貴方が此國を安全に出られるやうに私共でも祈禱を致しますと云うていろ／＼説き勸めて呉れました、眞に自分の禍を忘れて只私の身許り思つて下さつた事は

ドウモ一生活れる事の出来ぬ程有りがたく感じたので御座います、ソコで私は大臣の宅に置いてある所の經書類の總てを取集めてデキに藥館の天和堂へ持ッて行きまして其宅に預けて置きました、天和堂の主人李之楫氏に向ひ私は少し考もあり又いろ／＼買物をした事があるからカルカッタの方に一度行ッて来たいと思ふ、カルカッタに行ッてから幸に自分の國から金を取寄せて書物を買ふ事が出来ればデキに此方に引還して来るが若し國から金を取寄せる事が困難であれば私は一應國へ歸ッて金の都合をして來年なり再來年なり此方に來たいと思つて居る、ドウなるか確な事は勿論今から極めることは出来ない、兎に角至急に立せなければならん、ソコで一番

困るのは此荷物　て書物も持ッて歸ッて一應我國人に斯う云ふ物を待て來たと云うて示さなければならん譯であるから此書類は凡て持ッて歸る、就ては此書物を荷造りをして持ッて行くやうにせなければならず又此荷物を運送せなければならんが馬を買ふとか何とか好い便宜があるまいかと云うて相談しました、所が此季之楫氏はモウ殆ど私の爲めには身命を擲ッても事を遣らうと云ふ程私を信じて呉れた方です、斯う云ふ人かあればこそ行く事が運びましたので若し此人が私を信じて居らなかつたならば屹度此時に何等の働きもせず、却て裏を掻くやうな事をされて私は大いなる禍に遭ッたかも知れないけれども此人は實に私を信じて充分盡して呉れた、其内實は私の日本人であること云ふことを略ぼ知ッて居ッたやうです、なぜなれば私の宅へ來た時分に不圖日本語で書

いた書物を見て不思議に思はれたからで、其後は餘程注目していよく私の日本人であると云ふことを確めて居ッたやうです、ですから私が此時いよいよ歸るとなつて見れば世間でも幾分かの噂の立ッて來て居る時ですから普通の人間なら随分危ない仕事だと思つて何にも世話をせなかつたかも知れぬ、所がナカ／＼さうでない、能く引受けて呉れまして「ソレには大變好い事がある、雲南省の商人で私と同郷の者が丁度是れから四日程後にカルカッタに商ひに行く其者と一緒に行ッてはドウか、其者に荷物を託すれば運送賃も安く付くと云ふ」幸にサウ云ふ便宜があれば一つ頼みたい」「宜しい、私の友達だから決して否とは云ひますまいドウせ歸りに荷物を澤山積んで來るので往きには空馬が澤山あるから」と云ふやうな話で好い都合に話が成立ちさうですからいろ／＼頼んで居りますと其友達である雲南省の商人が其處へ出て來たです、スルと主人が其人に向て「丁度今貴方の話をして居る所だ、誠に好都合だ、實は斯う云ふ譯だか前一つ二駄許りの荷物をカルカッタ迄送ッて貰ふことは出来まいか」と頼みました、所が其商人は元來私とは賣買上の關係のある人なんです、私が其人から麝香を買ふたり或は又寶鹿の血角を買ふた事もあり藥を拵へた事もあるが私が取引上信實を守るとを能く承知して居るからして早速引受けて呉れたけれども、其人の言ふには「私の處には空馬がない、幸ひソレに好い事がある、丁度此人も四五日經つと行くのだが我々よりも却て早くカルカッタに着く人がある、ソレは駐藏大臣の衙門からトモの城へ指して兵士の給料を持ッ

て行くので大分に馬も空いて居る様子だから其人に積んで行つて貰ふたら都合が好くはないか、其代り少し金を澤山遣らなくては背くまいがドウだらう」と云ふ宜しい、荷物が早く着くなら金は少し餘計遣つても宜しいから」と云ふので其事は略ぼ極つた、サウ云ふ事で彼此夕方まで話を居りました、ソレから先づ寺に歸つて來たが寺に在る所の經書類の假荷造りをして拉薩府まで持出さなければならん

經文と小僧の始末

ソコで其夜は徹夜して書物の假荷造りをして其翌五月廿四日の午前中に人を雇うて其經書類を皆拉薩府の天和堂に送つて了つた、所が其日は幸に寺内が非常に淋しいです、元來六七千の僧侶が居つて何時でも賑かて荷物杯の取片付をすれば人が見てドウしたとか斯うしたと云ふやうな喧しい話も澤山出るのですけれども其日は一つのカムツアン(僧舎)に二人か三人しか居らない、だからマア何處へ行ても人が居らないやうなものです、夫故夜通し荷造りをしても或は翌日人を雇うて送らしても人の疑ひを惹起すやうな事もなかつたのです、ソレから私の今まで使つて居つたチャンバイセー(慈悲)と云ふ小僧がある、長く仕へて居つたものですから其小僧の始末を附けなけりやアならぬ、ソレは今までは私が居らなくても毎日書物を學ばせる爲に教師の許に預けてあるので、私が歸つて行けば矢張歸つて來て水を汲んだり茶を沸かしたりする事は遣つて居るので、私が今此寺を去るのに黙つて出て行く譯にはいかない、矢張暇を遣らなければな

らぬ、サウでないとな何故書籍杯を持出すのであらうかとデキに疑ひを起されますからソレで我が子僧等にも云聞かしました「是れから私は大變好い都合が出来たから巡禮に出掛けなけりやアならん、ソレは大藏大臣の弟でツァーリの方に住んで居られる方がある、ツァーリと云ふのは第二の靈跡とされて居る處である、元來西藏には三つの靈跡がある一は西北原のカンリンポチエ即ちマラヤ山中に在る峰である、一はツァーリと云うて東南に當り印度のアツサム地方と境して居るヒエバーレストとも云ふ之を西藏雪峰の三靈跡として居る、其一なるツァーリに私は參詣する心算であるが多分四ヶ月は掛るだらう、四ヶ月丈の食料と學資金とを置いて行くから」と云うて四ヶ月に餘る食料と學資金を教師に預けて置いた、小供に持たして置くとして一度に使つて了ふからです、ソレから又自分がセラ大學に入る時分に保證人に立つて貰つた人がある、其人には私の法衣の一通りと少し許りの金を與へ尙ほ外の恩を受けた人達及び講義をして呉れた教師達には皆相當の物品或は金を紀念の證として送り夫等の用事を皆済まして丁度午後四時過に私が屬して居るチエーターサンの大本堂に參詣して燈明を上げ供養物も供へ而して釋尊の前にて

告別の願文

を讀み立てました、其願文は「西藏國セラ大寺のチエーターサンの大本堂に於て慧海仁廣稽首百拜して大恩師釋迦牟尼如來に念願し奉る、佛法固より無碍にして偏在なしと雖も

第二百二十六回

出發の準備整ふ

衆生の業力異なるに従ひて佛教者中に其偏在を見るは遺憾の至りなり、慧海仁廣宿業拙くして現時日藏佛教徒の協同和合を成就する能はずして空しく此國を去るに至ると雖も願くは今日の善縁を以て他日日藏佛教徒の圓滿なる和合を成就し世界に眞實佛教の光輝を顯揚するに至らんことを謹んで至心に祈願し奉る」と唱へてソレから釋迦牟尼如來の御名を十唱十禮して本堂を降りました

無限の感慨

本堂の石段を降り板石の廣庭を左に通り返けて参りますと長い急な石段があるソレは法林道場(問答の場所)の横に架つて居る石段である、其石段を降ると法林道場の美しい門の前に出ます、其門は平地よりは少しく高くなつて居りまして石段を一間半許り登りますと其中に支那風の門があつて其門の中は所謂法林道場であります、其周圍は總て低い石の塀で其塀は白く塗られてある、其門の前へ出ましたが門前の處も矢張等級の低い僧侶が問答の下稽古をする場所ですカナカ廣いものです、其處にも青々として榆、柳の類があつて其間に西藏の木蓮の花が美しい香氣を放つて居ります、其場所は恐らく風流心のない西藏國人が拵へた場所としては實に雅味のある處で私は三大寺共に見ましたが此法林道場ほど風雅な景色に富んで居る處はない、其法林道場のすつ

と上手を見ますと巖山が突兀と聳えて居て其岩の間に流水が日光の映じたる景色は實に美しくサウ云ふ天然の景色に人爲的雅味を附加へたのですから自ら一種の風致があります、此法林道場に來まして私は一種の非常なる感情に打たれました、如何にも釋迦牟尼如來に訣



河口師法林道場にて不可思議の聲を聞

れを告げて是れから歸るとは云ふたもの、折角日本人として此國に来て居ながらドウも日本人と云ふことを言明かさずにオメ／＼歸ッて行くと云ふのは意氣地のない話だ、何とか他の人々に禍の及ばぬやうな好い分別がないものか知らん、死と云ふことは無論何處へ行ッても免れない、早く死ぬか晩く死ぬか何れとも死ぬに極ッて居る、此際死を的にして一つ法王政府に私は日本人であると云ふことを知らして遣らうか知らん、斯う云ふ好い文章(上書文)が出来たのに此文章を示さずに殺して了ふと云ふのは残念だと非常な刺戟に打たれつゝ出て参りましたが不思議にも其法林道場の邊際より(ギョクボブ)と云ふ奇態な大聲が聞へました是れは西藏語で和譯しますと早く御越しなさいと云ふことと一跡此今の言葉は誰人か誰れに話しかけたのかと怪んであたりを見回はしますと誰れも居らない唯だ夕陽が法林の樹枝に映つて美しき綠光が放つて居るばかりで……が驚の聲でもないに何の聲であらふ我心中の迷の聲でいもあらふかなどと思ふて二三歩歩行ますと又不思議にも(ギョクボブ)と云ふ美しい大きな聲が聞へましたコリヤ誰れか私に告げるのじやと思ふて誰れかと云ひつゝ遠近を見廻はして法林道場の後の方にも人が居らないかと索めて見ましたが誰れも居らない……いかに不思議と思ひつゝ自分の舎に飯へる方向に着きますと又々不思議の聲が幾度か發しましたトコロで我心は最早西藏に留つて居ては善くない飯へると云ふとに決定しますと其今迄叫びし聲はなくなりました其時は丁度解脱佛母の小堂の横の石段に上つて居りましたいッレカラ(セ

ラ) 大寺の大本堂の前を通つて自分の舎に着きましたソレから少し殘してある荷物を提げて其晩拉薩府へ参つて天和堂へ泊りました、其翌廿五日天和堂から出まして是れまで逃へてある書物の取纏めに掛りましたが折角逃へた書物なり且は得難い書物ですから金の拂ッてある分丈けは集めやうと思ひましたので其夕方分集まり其翌日も除程集つたです、ソコで午後に私も手傳ひましたが主の李之楫氏が箱杯を捧へて荷造りをして呉れました、其翌日ですが牦牛は毎日午後二時頃から澤山殺すのですから其牦牛の生皮を三枚許り買ッて來ました、ソレは私共が行ッて買ふのではない、皮仕事をする人間が屠所へ行ッて買ッて來るのです其皮は誠に柔い、て其血の附てある皮を箱を包むのですが——尤もお經文は幾重にも巻いて箱の中に詰めてあるから汚れはしません——内皮を外にし毛の附いてある方を内にして旨く縫付けた、其皮が干し固まると板のやうに張切つて了ふから實に堅固な荷造りが出来るです、其荷造りのすツかり出來たのが五月廿七日です、其翌五月廿八日はいよく其商人等も出立すると云ふこととすから其商人から馬一疋借りて私もいよく其商人等と共に出立することに極め其夜大藏大臣の宅へ訣れに行きました、私の法衣とか袈裟とか通常の法衣類はすツかり荷物の中へ入れて了つてドウも出すのに不便ですから前大藏大臣から一揃への法衣を借り尙ほ大臣から餞別として百ルーピー戴きました、是れは詰り是れまでお世話になつた所のお禮である云ツて呉れました、實は此方からお禮をしなくちやアならん位のものであるですけれども此

場合に百ルービトは私に取つては非常に役に立つので御座いますから其金を戴き懇に訣れを告げて其晩天和堂の宅へ歸つて來ました

出發の間際の變事 スルと其歸つて來た夜です、是れまで全く頼みにして居つたカルカッタ行きの支那人に就て全く變つた所の一事件が起つて來た、其變事はドウ云ふ事から起つて來たかと云ふのに豫て私と懇意な駐藏大臣の書記官馬詮が今度カルカッタに行く支那人とは至つて昵懇の間である、ソコで其書記官が自分の友達の爲めを思つて私の事を内々話し込んだです、彼は決して支那人ではない、確に日本人らしく見える、西洋人でない事は極つて居るけれどもドウ云ふ魂膽があつて來て居るか譯が分りやあしない、尤も佛法の方に掛けてはナカク遣入であるけれども今の時に當つて佛法丈けの見込で此國に來ると云ふことは餘程不思議な事である、事に依ると英國政府の依頼を受けて其國の探偵に來て居るかも知れない、サウ云ふ人と一緒に行くに後にお前の首がありやしないと告げたものですから其支那人は大いに驚いたです、書記官は拉薩の支那人中では最も物識、最も老練家として尊敬を受けて居る人ですがサウ云ふ事を云はれたから一遍に信用して丁つた、ソレでは是れまで頼みにして居つた事が全く水の泡になつて了つたと云ふ天和堂主人の秘密談である、サウなつて見ればどんなに其人に頼んだ所で一緒に行くものでもなければ荷物を運んで呉れるものでもないです、尙ほ李之楫氏が云はれますには「併し荷物丈けはドウにか私が引受けて遣

ることが出来るだらうと思ふ、金は少し餘計掛るけれども此藥舖から駐藏大臣の下僕等に特別に頼めば秘密で持つて行つて呉れませう、ソレは何程で承知するか分らんけれども私の藥である云つて遣りさへすればソレなりに食ひはすまい」と云ふ話「それならドウか荷物丈けを一つ出して貰ふやうにして貰ひたい、ソレから私は急に出掛けて行かなければならんが夜着や食物の用意をして行かんと途中で困るから其荷持の下僕を一人雇うて貰ひたい」と漸ら話が纏まつて李之楫氏はチキに交渉に行つて呉れたですけれども先方の人が居らぬとか云うて落膽して歸つて來ました

荷物の託送

其翌五月廿八日何時も朝寢の主人が早く起きて先づ荷物運搬の交渉に行つて呉れた、旨く説き付けたものか其荷物を監督して行く人には特別に甘ルービーの手數料ソレからスイ

シー即ちトモ迄の馬二駄の運送賃が四十ルービーで運んで貰ふ約束をして來たから早速其金を先方へ渡して呉れると云ふことですから渡して遣り、デ其荷物は其夜窺に運んで置きました、元來支那人は横着で駐藏大臣の命で給料杯を運送して参ります時分には十足で足る場合でも十五疋も十六疋も徴發して其餘分の馬に秘密で人から頼まれた荷物を積んで賃錢を食ふことを役徳のやうに心得て居るのが支那人の常です、サウ云ふ譯ですから私の荷物も天和堂主人の頼みに依り藥舖の荷物と心得て運ぶことになつたので御座います、荷物の方は片付いたが私と一緒に行く所の下僕を得て居らない、ソレを大いに天和堂の主人も心配し又其妻君も非常に奔走して呉れまして丁度好い人を見附

けて呉れた、ソレは還俗僧でテンバと云ふ人なんです、其人は素とテンゲリンの相當なる僧侶であつた、所がテンゲリンのテーモリンボチエが牢内でも逝れになると同時に其寺の僧侶の流浪する者も大分出來ました、其人も其一人で其後零落して妻君を持つたと云ふ始末、至つて正直な人であると云ふ、そののみならずゲーチリンの方へは若い時分から三遍も行つた事があつて大いにゲーチリンの地理に委しいと云ふ、其人をドウ云ふ風にして雇つたかと云ひますと先づゲーチリンの方へ出掛けて行つてブータン、シツキムに於ける雪山の靈場を巡り再びゲーチリンに引還してカルカツタに出て佛陀伽耶ベナレス等へ參詣しソレよりネパールの靈跡を巡つて西藏に入り拉薩府へ歸つて來るのです、其旅行の豫定か先づ四箇月間、ソレでお前の食物及び着類等は主人持として一箇月の賃錢が七圓五十錢、其半額丈けを前金に渡すと云ふ約束で雇ひまして十五圓丈け渡して遣りました、其金は凡て其男が妻君に渡して了つたさうですがソレは妻君が四箇月間の食料となるのです、其翌五月二十九日西藏曆の四月二十日荷物の渡すべきものは渡していよいよ拉薩府を出立することに成りました

第二百二十七回 愈々拉薩を出づ

天和堂の哀別

此時分の拉薩府は非常に混雜して上下の騒ぎは實に眼を廻す許りである、コ一、チャク、バ(警部)卅名ラー、ギャブ、バ(巡查)卅名是れが拉薩府の總ての警察官吏である、是等は平牛泥棒を捉へたり或は怪しい者を搜索したりするのが本職であるけれ共此時は凡て法王及び第二の法王の警護にのみ掛つて居りますから外の事は何も道らないです、又高等官及び高等僧官等も凡て自分の職掌上の事に追廻されて居りますから他の事はドウなつて居るかと云ふ事も氣が附かぬ位です、誠に私の出立には好都合の時であつたです、けれ共拉薩府には澤山の人が入込居つて既に私の居つたセラの僧侶杯も皆行て居るものですから拉薩府を出立する時分に旅行服に着替へて出ますと人の疑を惹く種となりますから其前々日大臣の處から法服を借りて來たので、私は其法服を着けて矢張普通セラ寺の僧侶が拉薩府に滞在して居ると云ふ風に裝うて居つたです、いよいよ出立の當日午前十一時頃までに天和堂の夫婦は最早や今日はお立になるのであると云うて精進料理の御馳走を拵へて別宴を開きました、可哀さうなのは其家の十一になる姉娘と五つになる男の小供です、其二人が行かれるのが厭だと云つて泣いて居る、殊に姉の方は俯伏になつた儘顔も見せないで左も悲しさに啜泣をして居る、モウいよいよ立つと云ふ時になつたものですから母親がお訣れないかと云ふと大きな聲で泣き立て、ドゥも仕やうがなかつたです、如何にも親しくなると小供でも斯う云ふものか知らんと思ひましたが矢張人情上自分も幾分か離別の苦痛を感じた譯で御座い

した、テ其家の弟と妻君の弟とソレから妻君の姪になる娘とテンバと云ふ私の連れて行く男の女房
 四人が私を見送ることになつたですがサウ一緒に連つて行きますと人の疑ひを惹くからと云ふので
 拉薩府を離れてレブン寺の前の林の中で出遇ふことに爲やうと云ふ約束で、皆別々に出掛けた、私
 は荷持を連れ僧服を着けてポツ／＼拉薩の町を出て釋迦堂の少し前の處へ來ると
 氣の知れぬ巡査 巡査が一人居りましてヅカ／＼と私の前へ走つて來まして、時が時ですか
 ら何か變な事でも發覺して捉へに來たのぢやないかと一寸私も注意を惹起したてすスルと私をジ
 ッと眺めて「お芽出たう御座います」と云ふ譯なんです、ドウ云ふ譯でサウ云ふ事を言ひ居るのか
 一向譯が分らん、分らん事にドウとも挨拶が出来んものですから黙つて居りますと「實にお芽出た
 う御座います、マア何もかも能く整ひまして御芽出たう御座います」と何を云ひ居るのか少しも分
 らんから私は「フーン」と一聲放つた切りて様子を見て居ますと其男が三遍禮拜しました「コリヤ私
 を捉へる譯でもないらしい、しかしドウも奇態だ禮拜すると云ふのは」と思つて居る中に不意と氣
 が付いた、成程私の着て居る法衣は大臣の處から借りて來たので所謂高等官吏先づ侍從醫にならな
 ければ着られぬ位の着物です、所て其時分私が侍從醫になるとかならぬとか非常に評判の高い矢先
 にサウ云ふ立派な着物を着て出掛けたものですから先生いよく私が侍從醫になつたと判断を下し
 たに違ひない、夫故に何もかも整うても芽出たう御座いますと云つたのでせうそんなら錢を遣ら

なくちやアならんわいと思つて居ますと其男は三禮を濟ましソレから舌を出して頭を突き付けた、ソ
 コで私は頭へ片手を附けて遣つて一タンガー遣りますと彼は舌を出しつゝ大に悦んで去つて了ひま
 した、今拉薩府を離るゝと云ふ釋迦堂の邊に於てです、斯う云ふ言葉を聞くと云ふのは途中滞りな
 く目的地へ到達し得ると云ふお芽出たい縁起になつたかも知れない

巡査は無給 此巡査の事に就て一寸言つて置きたい事がある、西蔵の巡査には大變惡風があ
 つて實に困つた事かあるてす、第一此巡査には極つた月給がない、其月給は何から仰ぐかと云ふと
 市中へ貫ひに廻るので、貫ひに行くと云つても乞食のやうにヘイコラ云つて一生懸命に頼む譯で
 はない大抵、三人連て町家の門に立ち大きな聲で怒鳴り立てる其言葉がナカ／＼面白いです

百千萬の金銀を持たるゝ方の施しを受くべき者は我等なり、何もなき身の頼みに應じ千萬金を惜
 氣なく與ふる事は君等なり、茅屋親爺の三十人に大判三十與へよや、茅屋婆の三十人に大判三十
 與へよや、君は世間を救ふ主、すべての情を汲み分けて我等の苦患を救ふ主、今日君よりの賜物
 を、今宵我家に持ち行きて、飢ゑたる婆を悦ばせん、缺けたる椀に芳しき酒なみ／＼と注ぎ流
 前後知らずに酔ひ臥して、飲まれぬ迄に賜へかし、ハキヤ、ハキヤ、ロー

此ハキヤ、ローと云ふ言葉は善神の勝利を得たと云ふ意味です、右の歌のやうなものをコッ
 くと何遍か述べ立てゝ居ると家内から金盆の中へ麥焦しを入れ其眞中に好い家なれば銀貨三枚

位 悪い家なれば一枚或は半分の銀貨を入れて其糧の處にカタ(薄絹)の小さいのを一つ添へてある
 です、若し其家に似合はず少し呉れると斯う云ふ事は前から習慣がない、貴方の家では確に銀貨二
 枚づゝ月に一遍づゝ呉れたてはないかと云ふ談判を始めるいろゝな事を言はれるのが嫌ですから
 モウ何處でも始めから當り前に遣る丈けの物は遣るです、是等は矢張寺の中へも出て来ますから
 は平牛乞食の入ることを許さないこともあり又許す時がある、平生遣つて置かないと其時に來てグ
 ツ付かれて大に面目を失するやうな事がありますから平生でも皆相應に遣るです、其貰つて來た金
 は巡査中の頭取(コーチャクバ)即ち警部に非ずして三十人の巡査部長の如きもの)に渡して其中か
 ら月に幾らと云つて銘々分けて貰ひますので一文でも盗むことは出來ない、盗むと直ぐに知れます
 から、尚ほ此巡査等はサウ云ふ事をして金を得る許りでない、田舎から道者が拉薩府へ出て來る
 と金を呉れると云ふです、ソコで田舎者は一タンガも遣れば澤山だと思つて遣るとお前も其位好
 い着物を着て居ながら能く此位の金を出したなと云つて喧嘩を吹掛けウカ／＼して居ると打擲られ
 た上謝つて又金を澤山取られるやうに成ると云ふことは豫て田舎へも聞えて居りますから或るべく
 其鋒先を避けて此方から頼んで金を取つて貰ふやうにするです、私か始めて拉薩府に着いた時は制
 規の僧服でなくて旅服を着けて居たものですからデキに巡査に錢を呉れと云つてグツられたから早
 速一タンガ遣りましたがソレで事が済んだです、今度出立する時にもサウ云ふ風で着物の立派な

のを着て居つたのが誤りて錢を呉れると云はれたのですが一體は僧侶に呉れると云ふことを言ひ得
 ない規則になつて居るので、尤も何か芽出たい事があつて其人の等級が上るとか何とか云ふ時分
 には呉れると云はれるのですからソコで私の等級が上つたと思つて呉れると云つたのでせう、此巡
 査が泥棒杯を捉へに行く時でも決して旅費を持つて行かない、行つた先で飯を喰ひ酒を飲み自由自
 在に遣つて行く若し三日でも四日でも人の居ない地方へ行く時分には其近所の人民に充分餘る程の
 食物の用意をさせてソレから出掛けて行くです、コーチャクバの方になりますとナカ／＼立派なも
 のでサウ云ふやうな事をしない、其代りに政府の方からも幾分の手當金があつて大分に品格が違つ
 て居ります

林中の泣別れ

其巡査と別れていよく拉薩府を離れる時に一寸釋迦堂へ參拜して別れを告

げソレから法王の宮殿の下を通り段々外へ出て橋を渡り廣原へ出てレブン寺の少し前の小さな林に
 着きました、其林には藥舖の番頭と其他三人の者が待受けて居ります、私は勿論酒も飲まずモウ御
 飯も濟んだのですから何も遣る必要はないけれども着物を着替へなければならん、着て居る法衣を
 脱ぎ棄て、旅行服に着替へ之を大藏大臣の宅に還して呉れと云つて其人達に頼みました、先生等は
 皆酒を澤山持つて飲みながらドウも別れが辛い僅か四箇月位の旅ですけれども殊に印度邊りの熱い
 處へ行くのだから死なないやうにして下さい、大變御恩になつたのにお歸りになつて今度又來られる

かドウか其事も分らないと云ッて皆泣出したです、此方は夫程にも感じて居らんですすけれども非常に泣出て、送られたものですから私も荷持も泣き別れに別れました、廻てレブン寺の下を通り抜けてシンソソカー驛に着いたのは丁度日暮て其驛に泊ることにしました

第二百二十八回　グンバラの絶頂

西藏人の癖

五月三十日驛馬を雇ひシンソソカーを出立しましたが其道々に於て荷持のテンバを少しく誡めなければならん事があつたです、西藏人は何時も嘘を吐いたり仰々しい事を言ふのが癖で若し途中で此お方は法王の侍従醫だなんて仰々しい事を言はれると却て妨げになるだらうと思ひ決してサウ云ふ事を言ふてはならぬと誡めたに拘らず昨夜泊つた所で彼のお方は何處の方かと尋ねた時分に「アリヤ喇嘛の化身である」と答へたのを聞いたです、ソレから其家ではフサク／＼室を換えて床から何から皆別々にして了つた、一時の便宜を得たやうな譯ですけれどもそんなこと許り言ッて人を欺いて行くと大變困つた事が生ずる、「自分が實際ラーマの化身でないのに化身なんて云ふのは却て毒を以て人を害したやうな結果になるから以後は決してサウ云ふ事を言ッてはならぬ」と誡めますとテンバの言ふには「此方から言はいても先方から化身でせうと尋ねたからサウで

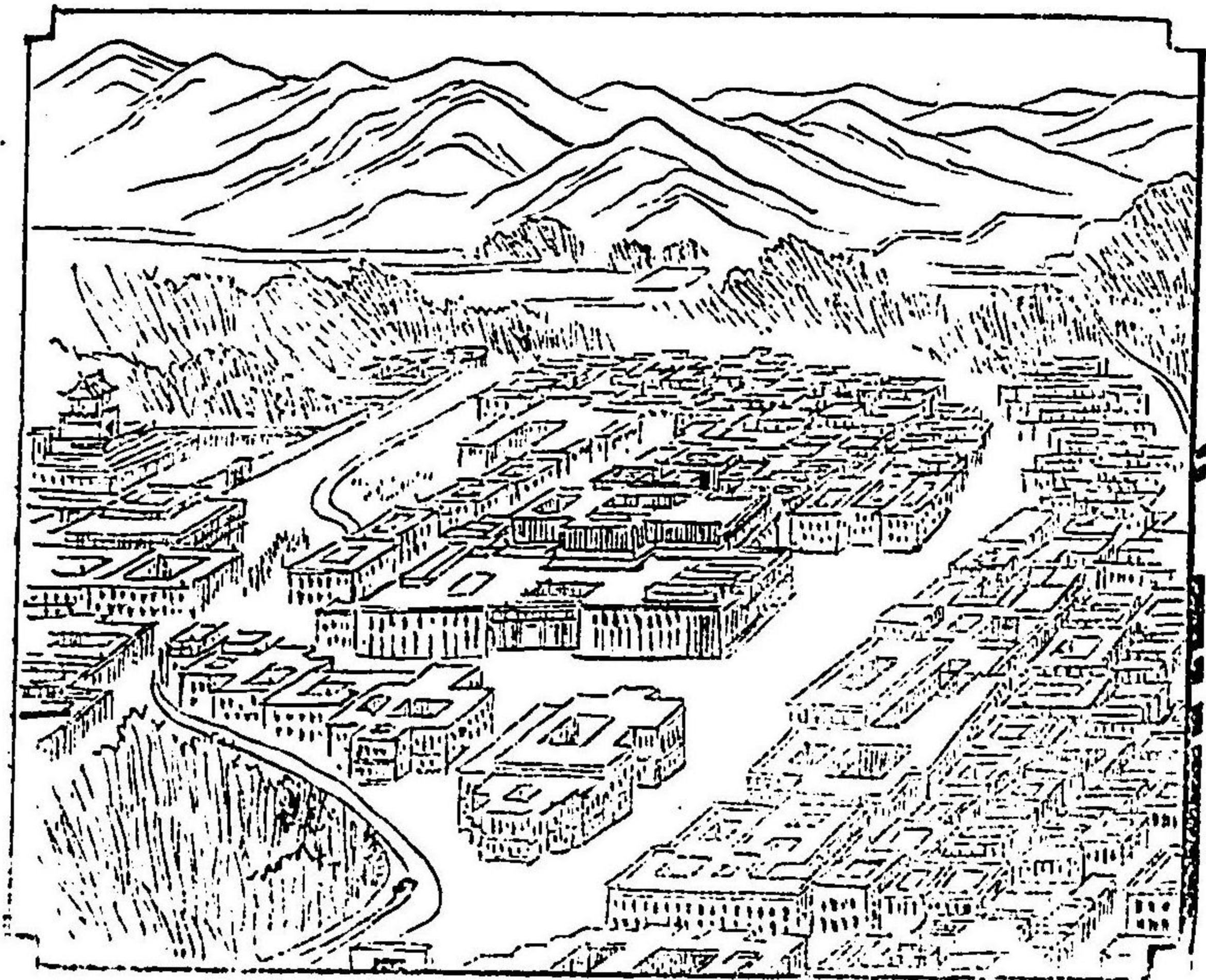
すと答へた迄の事では是れから先もサウ云ふ風にしてお越しにならぬと損です、ラーマの化身と云ふと此邊では駄目ですけれども田舎の方に行くと敬はれた上に好い金儲けになる、貴方のやうに堅い事許り言ッては金儲けは出来ません」と云ふ、ソレから少しく怒ッて「己は金儲けに出掛けるのではない、人を誑かして金を儲けるなんて以ての外の事を言ふ、實際ラーマの化身でないのに化身だなんて罪を作り金を儲けたからして何の爲めになるか」と叱付けて遣りました、先生大いに辟易して心得ましたとは云つたが「ドウも我々は金が欲しいものですから」とグヅ／＼云ッて居りました

ナム驛の變遷

其日はネータンと云ふ處で晝餉を済ましそれより二里半許り行きますとナムと云ふ村があります、私が拉薩府に着く前に此村の一軒家に泊つたと云ひましたのでサラット師の著書と相違して居ると云つた人もあるさうですが私は道中記は成べく簡略にして呉れると云ふ御注文もあり旁々省き得らるゝ丈けは省く方針を執りましたので勿論ナムの村落の變つた事杯を殊更に話す程の事もないと實は心附かん位でした、念の爲め辯じて置ませう、今より二十二年前私の師匠のサラット、チャンドラダース師が參つた時はナムと云ふ村には三十軒許り家があつたのですから成程一軒家へ泊つたと云へば訝しく聞えませうけれどもソレは必竟其後の變遷を知らんからで、サラット師が西藏を去つてより六年後即ち今より十六年前にキーチエ河の大洪水の爲めに其村

(-0三) 頂絶のラパンゲ

落は洗ひ去られて了つた
 ので、其後ナムの住民は
 以前の土地から七八丁西
 の方の谷間の高地へ移つ
 たのです、けれどもソレ
 ではドウもネータンとデ
 ヤン、マエとの驛繼場が
 なくなるものですからナ
 ムの人が驛繼場として以
 前の處へ一軒家を建て、
 其家で酒や何かを賣ッて
 居りますので、此前の時
 は私は其家へ泊つたので
 す、餘談に涉りましたが
 再び其ナムを通ッてチャ



望遠の府薩拉



む望を薩拉りよ、頂絶のラパンゲ

ントエと云ふ村まで着きました。此村には豫てセラ寺に於て私を能く知つて居る僧侶の家があつて相當の活計をして居るです、其家に着きました所が大いに悦んで何處へ出掛けるかと云ふ「實は是れから巡禮に行く心算だ」といふと「ソリヤ善い事だ」と云つて充分手當をして呉れた、其翌日も馬で送ると云ふやうな都合で大變好い鹽梅に行つたです、三十一日の未明に其僧侶から送つて呉れた馬に乗つてチャクサムと云ふ處まで急いで出て來ました、ソレは前に説明した木の船と皮の船のある處です、其處から馬を返し木船に乗つて向岸に渡りバーシエーと云ふ驛まで着きました、是れはゲンバラと云ふ坂の峻しい山の下に在る驛であつて此驛へ日暮方着きました、其夜馬を雇ふ支度をして六月一日午前四時にバーシエー驛を出立し馬でゲンバラに登りましたが丁度中程過迄登りますと私より一日先に立つて居つた支那人が其坂の中程で馬に草を喰はせ自分等は茶を拵へて朝御膳を喰つて居つたです、私は其人達に一寸挨拶して荷物はドウかと云ひますとモウ送つて來ることになつて居るから安心して呉れると云ふ事でした

再び法王の宮殿を望む ソレで其人達に別れを告げてゲンバラの頂上へ馬で登りました

其頂上から振り返つて見ますと拉薩府が遙に東北の方に彷彿と見えて居るのみならず、法王の宮殿も模糊の間に見えて居りますと幸に往きも歸りも好天氣であつたものですから此絶頂から遙に法王の宮殿を拜することが出來ました、ゲンバラは海面を抜くこと一萬四千九百尺にして拉薩は一萬二

千尺弱、拉薩より殆ど三千尺の高山で其路程は四十八哩直徑凡そ三十五哩日本の里數にして十四五里位なものです、此山に登ると拉薩の法王の宮殿が見えると云ふとは西藏人の誰もが言ふ事では此絶頂から拉薩は見えぬと云ふ説もあるさうですがソレは事實と違つて居ります、其の絶頂から一步坂を向ふへ降りますとモウ拉薩府は見えないです、先づ此處で久しく住み慣れた拉薩府にお別れを告げやうと思つて居りますと不意と思ひ出した面色の舊話がありますから一寸お話しして置きますソレはネパールに住んで居る西藏人で極く豊かな家の下僕である、其名はベンバ、ブン、ツオと云ふ極く剽軽な罪のない男なんです、其男がネパールの西藏人なる自分の近邊の者及び主人杯と一緒に巡禮に遣つて來た、所で自分の國の方では食物が澤山あつて直も安いから毎日米の飯を喰つて居る、又麥も澤山ある、然るに拉薩府の方へ參りますと食物が非常に高いからして巡禮に行つた者杯は餘り餘計喰はない、何時もひだるい腹を抱へて居る所々尊いラーマに逢ひに行くと、ラーマと云ふのは大抵皆金満家ですから盡御膳杯はナカナカ立派なもので前には乾肉の山が出來て居る位、其外卵製の饅頭杯の御馳走を喰べると云ふのですから申分はないです、けれども自分達は石屑や小砂利の混つてある麥焦しの粉を少し許り碗の中に入れてソレを茶で掻廻して喰べる位のもので、ソレも腹一はい喰べれば宜いけれども腹八分目とまではいかない、何時でも半分位で辛抱して縁に茶を飲むとも出來ず水を呑んで居ると云ふ始末、ですから赤い顔が青くなつて段々瘦せて

了ふ

巡禮の痛罵

サウ云ふ風で先生達は名高いラーマ達の巡禮を済ましてケンバラ即ち今私の立止つて居る處まで歸つて来た、ソコで皆の者は振返つて拉薩府を望み「ア、云ふ有がたい處へ我々が参詣することが出来て誠に結構な事である、ドウか未來は斯う云ふ結構な佛の國へ指して生れませうに」と有がた涙を流しながら佛さまに願ひを掛けて居つた所がペンバ、ブン、ツオと云ふ男は同行の者が一生懸命拜んで居るにも拘はらずラハサ府の方に臀部を向けて不作法な真似をして居るので皆驚いてアリア氣狂ひになつたのぢやないか知らん、オイ／＼貴様何を遣つて居るのかと咎めますと其男は一向平氣で「ア、嬉しい事をした、此拉薩と云ふ處ほど氣色の悪い腹の立つ處はない、一體拉薩と云ふ處は餓鬼の住む處だ、悪魔の住む處だ、己はモウこんな處に來ないぞと云つて願ひを掛けたんだ」と云ふ「ソレにしてもそんな不作法な事をしないで宜いぢやないか、大方貴様は氣が遠つたのだらう」「イヤお前達こそ氣狂ひだ、俺達は家に居ると米の飯も喰へば旨い肉も喰へるし麥焦の粉だつて拉薩のやうな砂だらけてないのを満腹喰つて豊に暮らせる拉薩と云ふ處はラーマだの絲瓜だのと云ひながら夜刃や郎苦又鬼のやうに肉を山のやうに積んで俺達に一體も呉れて自分許り喰つて居る、こんな處は極樂も絲瓜もあつたもんぢやない、コリヤ餓鬼の國だ、悪魔の國だ」と云つて大いに罵ると皆の者が怒つて「お前のやうな者と一緒に歸るとは出來ない罰が中る

から」と云ふと「罰など中つても構はない、こんな拉薩のやうな處に生れて來ない方が有がたいのだ、實に氣が晴々した、拉薩に居る惡魔共が俺に罰を中てることが出来れば氣が利いてる」と云つたさうですがコリヤ随分罪のない男で其言ふ所は又た一理あります、盗人にも三分の道理と云ひますけれども此男のは八分位の道理はあるのです、ドウも貧民は拉薩府では實に困難です、餓鬼の國と云ふ批評は能く中つて居るです、その非常に苦しい状態は實に此ペンバ、ブン、ツオのみならず外の貧民も乞食も皆サウ云ふやうな状態に在る者が多いからしてソコで斯う云ふ事を云つたのでせう

乞食の高利貸

勿論乞食でも拉薩府の乞食の内には高利貸をして居る奴があります、金貸をする位の乞食でも仲々旨い物を喰はない、不味い物でも腹一はい喰はんで何時でもひだるい腹を抱えつゝ金を溜めて高利貸をして居る、死んだらドウするかと云ふと地面の中に埋めてあつた所の銀貨を掘出して其金をセラ大寺なり或はガンデン、レブンの二大寺の僧侶の布施金として上げて了ふのです、サウ云ふ奇態な高利貸の乞食がある、流石に餓鬼の國に住んで居る乞食すけあつて金の溜方が一ト風變つて居るです、サウ云ふ有様を細に見て來たから拉薩府を指して餓鬼の國と云ひラーマ凡てを夜叉である郎苦又鬼である肉喰ひの惡魔であると罵倒したのは強ち理由のない事では御座いません

ゲンバラ山嶺の告別
 頃の話でマダ廿年
 は立たない、其へ
 ンバ、ブン、ツオ
 と云ふ男はまたネ
 パールと西藏の國
 境のニヤアナムの
 近所に住んで居る
 ので御座います、
 私は其男の感じた
 やうな事は感じな
 かつた、兎に角私

第二百二十九回 山路を辿て第三の都會に入る

私はサウ云ふ舊話を思ひ出して笑止しく感じたです、コリヤ極く近



行旅の山深夜半

が拉薩府に於て種々の點から觀察した概略のお話は既に述べた如くでありまして何れ凡聖同居の淨土にはいろ／＼の者があるのは普通の筈である、兎に角拉薩府は惡魔も澤山居るけれども惡魔許りでなくて其中に菩薩も居られる有がたい處である、願はくば再び此地に來り日本佛教と西藏佛教との協同和合に一臂の力を盡し幸に世界佛教の基礎となるを得ば誠に愉快の事である、別れに臨んで偏に此事を願ふと云ふ意味で般若心經三卷を讀みました、時に皆が山を降るものですから一緒に降って行きましたが今度は道を換へてターマルンと云ふ村のある方に降りました、是れは別段其方向に降るべき必要はないですけれども其處の村で晝食をして馬を替へなければバルテ一驛まで進むとが出来ないからです、ソコでターマルンで馬を替へ晝食をしてバルテ一驛に進みました、是は先に述べた如くヤムド一湖の岸で殊に美しい場所ですが前に通つた時ほど美しく感じなかつた蜿蜒と畝つて居る道を南の方へ進んでバルテ一驛に着いた時は丁度夕方御座いました、所が私の荷持のテンバなる者は私のセラの醫者であると云ふ事を話したものと見えてセラのお醫者さんなら此頃名高い醫者であると云つて其村長が出て來て早速病人を見て戴きたいと云ふ、一應は断つたけれどもナカ／＼肯かない、断れば尙ほ附込んで強ゆるものですから診て遣りましたがモウ其邊ではセラのお醫者と云ふことは非常な名聲になつて居りまして殆ど藥師如來が來たか何ぞのやうに禮拜して物を頼むと云ふ次第で實に驚かされて、其翌六日午前二時バルテ一驛出立、昨夜雇ひ入れた馬に乗り午

前八時頃ヤーサーと云ふ驛の東の方に着きました、此間の景色は非常に宜いですが、前に述べてありますから略します、ヤーサー驛の一里許り東の方から入江の如くになつて居る湖水に流れ込んで居る河があります、其河に架つてある石の小橋を南に渡つたてす、此處までは往程と道が一つでも是れから橋を渡つて向ふに行きますとすつかり道が變ります、其橋を渡り東、南の湖水に沿うて一里半も行きますと又南に曲るやうになつて居るです、其湖水に沿うて五里許り南へ進み湖水を離れて少しく行きますとナンカツエと云ふ處で晝食を使ひました、下僕は餘程疲れたと見えて其處へ泊る心算であつたですが私は非常に先を急ぐものですから其ナンカツエを離れて又西の方向に向ふて進みますと非常に大きな原に出ました、デ向ふの方にはブータンの國境に近い雪山が澤山見えて居る、極く景色の美しい處で段々其平原を山の中へ山の中へと進み極く狭い谷間を段段上つて行くと其河端に一軒家があります、其處から五里許り行かなくちやア家がないと云ふので其處へ泊り込んだ、其一軒家までは僅に三里半の路程ですが日暮ではあり大變に荷持が疲れて居るものですから彼此れ半日許り掛つたてす

深夜雪山の旅

翌日夜の十二時に起きて最早や出立すると云つた所がテンバは大に不平を鳴したけれども此間は少し急がなくてはドウ云ふ事で又後から追手が来ないにも限らないから急いで其一軒家を出立することになりました、所がテンバはドウもまだ真夜中のやうで御座います、何

處の様子を見ても急に夜が明けさうにありませんと愚痴を溢して居るです、ソレはモウ其等です、確に十二時頃に出したのですから、段々山の中へ登つて行く程寂寥ではあり雪も段々深くなつて来るものですから先生大に恐怖の念を懐いてドウか私を先に遣つて呉れと云ふ、所で先に立たせて遣ると向ふの方に何か居るやうだから一遍見届けて呉れと云ふ、氣の弱い奴で、何か怖いかと云ふと何だか知らんが怖い、此邊には悪い神さんが澤山居るから何か悪戯をしやしないかと思つて怖くてなりませんと云ふ、大丈夫だサウ云ふ神さんはお前等一人で行くと危ないけれども私と一緒に行くと滅多に悪戯をしないから安心して行けと云つても餘程怖いと見えてビリ／＼震へて居る前は私より歳が上で四十二だと云つて居るが小供のやうに怖がつて居るではないか、そんなに怖がるものでないかと宥めながら五里許り山を登つて行く間にザラーと云ふ一村落到着いたのは丁度明方て其村で朝御飯を喫べ又馬を雇うた、此馬を雇ふと云ふことは容易でない、好い工合に荷馬か旅馬か来合さないと馬を得ることは餘程難い、驛馬はあるがソレは毎日政府の用に取られて了ふから我々の手には決して入らない、此處で馬を得たのは非常の便利では是れからネーチエン、カーサンと云ふ西蔵中の最高雪峰を登つて行かねばならん、三里餘り急な坂を登つて又三里餘降ると一寸した斜線状の原へ出ましたが此處の山道はナカ／＼酷い、馬でも容易な事では登れない——勿論降坂は馬に乗る必要はないですけれども——道普譜が出来て居るではなし岩と岩との雪路を進んで行くので馬

も餘程慣ては居るが充分注意しないと谷間へ投げ込まれて了ふ、殊に空氣の稀薄な處を登るので、
 からナカ〜困難です、けれども急ぐ時は馬に乘らぬと進むことは出来ない、扱其草の生え掛った
 斜線狀の平原をてす、遙かの彼方に空を刺すが如く聳えて居る幾多の美しい雪峯を望みながら行く
 こと三里許りにして其夕方ララんと云ふ處へ着くや否や例の如く早く休みまして翌日夜半に出立し
 たてす、馬に乗り山間の谷河に沿うて降つて行く十里半にしてツアナンと云ふ村に着いた、此十
 里の間に低い山の谷筋を傳うて行くのですから少しも雪峰を見ることが出来ない、西藏では道中雪
 山を見なければ景色の味と云ふものは殆どない位のものですから實に淋しいです、ツアナンに一宿
 し翌五に乗馬してキャンチエと云ふ驛に着きました、此驛は
西藏第三の都會 此處にバンコル、チヨエテンと云ふ大きな寺があつて僧侶も千五百人程
 居ります、其寺の會計長で法王政府から派遣されて居る勅任の官吏がある、此人は老尼僧の姪の聲
 さんて私と一緒に大臣の宅に住居して居たので極く心安い入てありますから私は其處へ尋ねて行つ
 た所が大變悦びました、其住んで居る家は寺内の横に在る大きな家て家名をセルチヨクと云ふ、主
 人は私に十日も廿日も遊んで居つたら宜からうと云ふ香氣な事を言つて居りましたが、私は巡禮に
 出掛けるので明日出立すると云つた所が此處から出立して行くには入用の物を買つて行かないと思
 て非常に困ると云ひますし自分も亦バンコル、チヨエテン(聖廻塔)と云ふ寺も一遍拜観したいと思

ひましたから一日其處へ逗留したてす、其バンコル チヨエテンの寺内には西藏第一の大きな塔が
 あつてナカ〜の**大寺**、僧侶の少ない割には僧舎が殆どセラ大寺の半分位はあります、此寺には只
 新派の僧侶だけ居るのでなく舊教派の僧侶もサツキヤ一派の僧侶もカルマ派の僧侶も此寺に留學す
 ることが出来るやうになつて居ります、此寺の寶物杯を拜観して又宿に歸りました、一體此キャン
 チエと云ふ地方は大變商賣の繁昌して居る處で毎日朝其大寺の門前に大きな市が立つて其近邊の村
 々から澤山買物にも來れば又賣りにも來ると云ふ譯でナカ〜盛なものです、市場には夫々張店を
 して青物、肉類、麥焦し、乳、バター、布類及び羊の布類を列べて一切此市で交易商賣が行はるゝ
 のてあります、又西北原及び北原から印度へ輸出する羊毛及び牦牛の尾等は皆此市へ持つて來まし
 て單に此市を織場としてパ〜リの方へ輸出する者もあれば又シカチエ邊の商人が此市へ來て買
 うて輸出するもあつて、併し羊毛類は必ずしも此キャンチエ都會に於て仲買されてパ〜リに出る
 と許りは極つて居りませんけれども多くは此市から輸出されるてす

第三百三十回 愈々關所に近づく

宿主の疑惑

私は一日其寺に逗留して六月七日午前五時に出立、主人の厚意に依り五日間程



チヨモラハの湖と夜景

馬で送ッて呉れることに成りましたので其馬に乗りギヤンチエの町を通り抜けてツァンチエ河を渡り南方へ指して段々進んで参りますとネーニンと云ふ尼寺があります、此尼寺には活きた解脱佛母が居ると云ふ、其時の解脱佛母は僅に七歳です、私は遇はぬからドンナ方か知らなかつたけれども兎に角其寺には活きた女の佛様が居るので、其寺の前で晝食をしてソレから南の山の中へドシ〜進んで丁度十里許り参りますと荷持のテンバと云ふ男の故郷へ着きました、デ小さな寺に宿りました、其處には自分の兄弟も居るものですからテンバは大に悦んで此夜は大分酒を飲んだです、時に其兄が「ドウも彼の方の様子を見ると非常に色が白い、蒙古人の色の白さとは少し變ッて居る、西洋人ではあるまいか知らん」と云ふとテンバは大に辯解を始めました「ありやセラのお醫者で斯う〜云ふ尊いお方だ」と云ッてすっかり説明しましたスルと「ソリヤ俺だッて知ッてるけれども其セラのお醫者さんと云ふのは怪しい。不思議な事許りして死んだ者でも生返らせると云ふ話、サウ云ふ事をするのは西洋人に限る、お前うか〜行て酷い目に遇ひはしないかと私が隣室に居るのを打忘れて頻にそんな話をして居るです、困ッた事を言出した、折角此處まで大人しく従て来たのにいろ〜な注智恵をして此正直な男を煽動しちやア困るわいと氣遣ッて居るとテンバは熱心に「イヤそんな事はない、アリヤ天和堂の主人と懇意な人で矢張支那の人なんだ」と天和堂の主人から聞いた事を喋々述べ立て、居りました、私は翌早朝そんな事は聞かぬ振して午前五時に出立する

際に兄は何か弟に耳打して居りました、段々南の山の中へ進んで行くこと七里許りにしてカンマと云ふ驛に着き小休みして居りますと十二三頭の盛馬の中に私の荷物は全く二疋の馬に載せられてドシ／＼遣つて行く其運んで行くのは支那人で全く私の荷物であると云ふことを知らぬやうでした、私は其の荷物を見て是れから荷物はたしかにカルカッタまで着くに違ひないと大きに安心しました

テンバの誘惑

けれどもテンバは其荷物を見ていよいよ疑ひが劇しくなつたやうです「彼の荷物は天和堂で荷造りをして居る時は薬舗へ預けて置くやうな風であつたが今日運んで行く所を見ると訝しい」と思うたものと見えてソレからと云ふものはテンバは物も言はず考へ／＼従て来たてすが段々路を歩いて来ますと少し話し掛けは是れからもうバリーと云ふ關所までは大方五六日の路程しかないですが真直にバリーへ行くよりは私はドウも外の道を通つてお出になる方が得策だらうと思ふなせなればバリーへ掛ると第一彼の關所の取調が非常に嚴しい其上に保證人がなければ決して旅行券を呉れない、何故に其保證人が要るかと云ふと詰り印度の方へ行つても決して印度に永住しない、必ず此方へ歸つて来ると云ふ所の證據立をする者がなくてはならぬですから、其保證人は外の土地の人間ではいけない、彼の村の人間に限つて居るので、ソコでバリーで保證人を頼もうとすると非常に金を食られるのみならず旅行券を得るにも多分の賄賂を使はなければ

ならぬ、ドウも金は澤山掛るし其上に大なる困難が生じて事に依ると關所を通り抜けることが出来ないやうな事があるかも知れない、所で、大變好い事がある、そんなに澤山金を使はないでも私に其半分も酒代として下されば好い道を案内します、ソレは外の道ではないカンプリン(桃溪)のサンワイラム(問道)を通り脱けて行けば屹度易々と向ふへ出ることが出来ます、少し道中は困難もあり又野獸が出て来て害を加へぬにも限りませんがマア大抵そんな事はない私は二度その道を通つた事がある、其道が危ないと思ふならブータンの方に行くが宜い、ブータンには強盜が澤山居るけれども荷物を隠し悪い着物を被てお越になれば強盜に遇ふ氣遣はあるまい、ですから此二つの中どつちかお取りなすつちやどうですか」と私に尋ねたてす、私はチキに返答しました「何かバリーへ行けば金を澤山取られるから怖いと云ふのか」別に怖い譯もないけれども要らない事に金を澤山使つちやエ詰らんぢやありませんか「さうさ金はドノ位掛るか知らんけれども併し要らない事に自分の命を棄てる程馬鹿氣な事はないぢやないか、お前の言ふ通り桃溪の問道を通つたりブータンの問道を通れば十中の八九は死ぬのだ、死に行くより金を澤山出して良い道を取る方が結構ぢやないか、お前は一體馬鹿な事を云ふ金がなげやア、さう云ふ危ない道も行かなくちやならんが此方は金がないと云ふ譯ぢやアない、そんな危険な問道を通つて往く必要はない、殊に強盜の澤山居るブータンに行つたら殺されて了ふより外はない、お前そんな酒代が欲しいのか、一月七圓

五十錢の給金と云へは西蔵に居つて一年も働かなければ得られない給金だ、併し仕事が出来ないから割増をして是れだけ遣るのだ其上にもマタ酒代が欲しいのか、酒代は遣らぬとは云はない、彼方まで辛抱して行けば酒代は遣らうけれども左もなれば一文も遣ることは出来ない、此後は決してそんな事を言ふな」と言聞けますと先生幾分か疑ひが融けたらしい、と云ふのは若し私がそんならお前に金を遣るから問道の案内をして呉れと云へば是れ必ず怪むべき人間であると私の心を試す爲めに言出したので實際自分には問道から行きたい事はないのですから其晩必ず私の寢息を窺ひ荷物でも持つて逃げて行くに違ひないソリヤもう能く分つて居るので御座います、サウ云ふ點に於ては西蔵人は決して信用することが出来ない、極く知合の中で互に世間體を飾つて居る間は正直を守つて居るすけれども社會の制裁を離れた所謂世間から飛び離れた處に出て来た時分にはナカ〜狡猾でどんなに耻かしい事でも構はずに遣り遂げると云ふ風が御座いますから容易に油断はなりません。六月八日午前一時に出立して南へ出掛けて参りましたが矢張先生は山の中が怖いと見えて何だかグツ〜云つて行くのを嫌がつて居るやうでした、段々西、南の方へ進んで三里許り行くと大變高く登つて行かねばならぬ高原地に出ました登つて行くこと四里半にして大なる池のある處に着き其池の横に沿うて小さな河がある、其河の南に附いて登つて行くこと一里半にして大きな湖水のある處

へ出たです、之をラムツォ湖と云ふ、今私の沿うて来た小河は此湖と前の池との繋ぎになつて居る、此湖水を右へ廻り所謂西側から行つてもバーリーの方に出られます、又東の方からでも出られます、私共は左側の方から進みました、
曠原中の雪峰 此邊も亦ヒマラヤ山脈の雪峰が曠原の間にどツかりと腰を掛けて居るが如く所謂此邊の景色を稱して雪山楊子の國とでも云ふのであらうと思はれる、サウ云ふ雪峰が澤山並列して居るけれども珍らしい事には餘り高くない、殆ど一千尺位の全く雪を冠つて居る山許りてそんなに美しい景色は餘所の國では決して見るとが出来ぬだらうと思ふ最早夏季でありますから山の麓の方には幾分か草も生え殊に湖水の邊には草が澤山ありますから此邊は夏季の好牧場であります、
其湖水に沿うて南に進むこと八里許にして、夕暮にラム、マエと云ふ村へ着いた時分には五月二日の月が日本の三ヶ月ほどに光を放つて居るです、或牧畜を遣ります石造りの家に泊りましたが其家の南方に大變大きな山がありまして之を西蔵語にチヨモ、ラハリ(尊母神山)と云つて居りますが此チヨモ、ラハリは西蔵には澤山あります、大きな雪の峰は凡て靈ある名跡とせられ皆此名を以て稱せられて居る、或は謂ふ二十一あり又三十二ありと何れが真か分らぬが何しろ西蔵のグルリを廻つて居る大きな山は皆此名を以て稱せられて居るやうであります、此チヨモ、ラハリは恰も毘婁遮那の殿かに坐するが如く曠原の一角に聳え而して此湖水を擁してツラリと列べる雪峰は天然の

白衣觀音或は妙音菩薩が無聲の音楽を弄して毘藍遮那大佛に供養するかの如く實に壯快なる天然の曼陀羅を現はして居るのです此邊は麥も小麥も何にも出来ない全く西北の曠原地と同じ事て牧畜しか出来ない土地です、牧畜も冬になれば殆ど出来難いので他へ移轉する者もある位です、併し此ラルムツオと云ふ湖水には七寸以上一尺二寸までの魚が澤山居る、其魚を捕る漁師がありまして夏の間は此湖水へ来て漁をして賣りもし或は乾して冬の食料に當てますが冬は此等の漁師は西藏の中央地方へ乞食に出掛けるのです、所謂夏は漁師で冬は乞食、サウ云ふ人間が大分此邊に居るさうです

第三百二十一回 五重の關門

盗難の判断 六月九日矢張湖邊に沿ひ乘馬して南の方へ出掛けました、所がテンバは又妄想を起したてす、最早や明日はバーリーと云ふ第一の關門へ着くので、事若し發覺すれば己れも捉へられて獄裡の憂目を見なければならぬと云ふ怖れを懷いたからてせう、彼は私に向ひ「此間貴方に申上げた所が間道を取るには及ばぬと仰しやつたけれども一體つまらぬぢや御座いませんか間道とも夫程道も困難ぢやない、私は二度通つたから能く知つて居るが一人てさへそんなに猛獸杯が出

て来て害しはしない少し向ふの方で鳴いて居るのが氣味の悪い位の話で、火さへ焚いて居れば大丈夫だから間道をお探りなさい、此間も言ひました通りバーリーはナカク殿しくつて金を食ふことが甚しい、私の考では十四五圓位で済むかと思つて居るけれども三十圓取られるか五十圓取られるか分りやアしない、其上早くて四日遅いと七日も八日も引留められます、お急ぎだと云ふのに暇を費し無駄な金を取られるよりか僅か二日の事ですから間道をお通りなさい」と頻に説立てた、ソレから私は「お前はマタそんな事を云つてるのか、役人が金を澤山食るとは面白い、ドウか澤山取つて貰ひたいものだ、法王への家苞にするから」と段々説きますと彼は大に驚いて大分疑念を氷解して了つたてす、其日一寸又面白い事があつた二里許り行くと極アラケない、四人許りの人が私の馬に乗て居る前まで来て立止まり一齊に禮拜を行ふてお願ひ申したいとがあるよと云ふ何かと云ふと「私共は北方からバーリーへ鹽を賣りに出て来たものですが一昨夜犛牛に草を喰はして居る間に番人が居睨つて居つたものですからバーリーの人間か西藏の人間か分りませんが四十五六疋持去られて了ひました、其盗人を捜しに來たのですがドノ方向へ逃げて行きましたか見て戴きたい、若しバーリーの方へ行つて居るものならば是れから引還して南の方に行かなければならぬ、西藏へ持去つたものならば是れから北に進んで行かなければならぬ誰に見て貰ふと云ふ人もないからドウか見て貰ひたい」と云ふ私はそんな事を知らんと云ふのも可哀さうですから一寸占筮者のやうな真似をし

て「急いで北の方へ行けば今日中に見附けることが出来る」と云つて遣つた、ところが彼等は大に悦んで行つて了ひました、其夜はチヨモ、ハリーと云ふ山際のラハム、トエと云ふ貧村に泊つた此村は殆ど食物もなく政府へ租税を納めることが出来なくて苦んで居る者許りださうです

獨立國の貢物 所がブータンから西藏政府へ貢物を納める爲めに此村に来て居る者がありま
す、ブータンは一躰獨立國であるがドウ云う關係か西藏政府に對し毎年幾分かの貢物を納めて居る
尤もブータンには國王はあるけれども國內は統一して居らぬやうです夫故か或部落々々から西藏政
府へ貢物を納める丈けて一國の中央政府から納めるのではない其貢物を納めに來るといふやうな物
を貰つて歸る、詰り貢物の交易で丁度ネパール政府が五年に一遍象牙とか虎の皮とか云ふやうな貢
物を支那政府へ納めて絹布金襴の類を澤山貰つて歸るやうなものでせう、尤もネパール政府では一
圓位の物を持つて行つて自分の國へ持つて歸ると五萬圓位の價ある物を貰つて來るのですから詰り
商賣的錢儲けに賣物を持つて行くやうなものです扱私はいよ／＼關門に近づいたのですからテンバ
には公道を取ると斷言したやうなものよ／＼ドウ云ふ方向を取るかと云ふことを定むる爲めに
斷事觀三昧に入らねばならぬ事になつた時に私が先に見て遣つて北原人の犂牛を取られた者が四人
とも矢張私の泊つて居る處へ歸へつて來て盜まれた丈一頭も失はずに連れて歸ることが出来ました
と云つて私を佛の如くに禮拜してニタンカーにカタを一つ添へて呉れたですソレを見て下僕はいよ

く吃驚して「コリヤ本當に只のお方でない」と大に恐れて最早や疑を起す餘地もなくなつて了つた様子でした其夜人の寢靜まる迄經文を唱へて居りまして三昧に入りました結果いよ／＼公道を取つて進むことに決定しました、若し之を普通の論理的的思想から考へますと先づ公道を取るとすれば

五重の關門 に於て取調を受けなければならぬ一番始めに最も酷いバーリオンに於て嚴重な取調べを受けなければならぬ此關門を通過するには第一保證人を要する譯ですが先づ其保證人を頼むにも相當の禮金を與へなければならぬソレから官吏に澤山な賄賂を使ひ四五日掛つて漸く旅行券を得其旅行券を持つて第二の關門なるチエンピーサンバに到り第一の關門から貰ふて來た旅行券を渡し取調を受けた上役人の承認を得て其門を通過しソレから第三の關門のピンピタンと云ふ支那兵の居る城内で取調を受けて通行の許可を得なければならぬ、無事に其處を通り抜けた所で今度は第四の關門のトモリンチエンガンに於て又取調を受けて書面を貰はなければならぬ、其書はニヤートン城の大關門假通過の許可書であります、其書面を持つて第五の關門のニヤートンに到り又澤山な賄賂を使ひ其長官の面前で直接に取調を受けて一通の書面を貰ひ、其書面を持つて又跡戻りをしてトモリンチエンに歸つて來なければならぬ、デ其書面を渡して再び取調を受けた上シャーゴーから二通の書面を渡して貰ふです、其二通の書面を持つて又跡戻りをして第三の關門のピンピタン迄引返さなければなりやアならぬ、其二通の書面の内一通をピンピタンの支那の將校に渡し而して支那將

軍から一通の支那文字の書面を渡してくれる、其書面と第四の關門のシャールゴから貰った一通の書面都合二通を持つて最後の關門則ちニヤートン城に來り其書面を示し始めて大關門を通り抜けることが出来るのです、て其大關門を通り抜けニヤートンの小村を過ぎ小橋を渡ると其處に支那兵が屯して居ります、其支那兵に支那の將軍即ち第三の關門から受けて來た所の通行券を渡し而して第四の關門即ちトモリンチエンのシャールゴから受けて來た所の通行券を自分を持つて出て來るのです、是れはつまり印度で所用を済して歸る時分に其書面を示して始めて西藏に歸ることを許される手續になつて居るので御座います、只夫れ丈けの手續を経る丈なれば非常に面倒ではあるが何も氣遣ふとはない、

關門内と追尾の危険

所が此バリーリオンからニヤートンに到る間に於て嘗て私がダーリンに居る間に友達となつた人間も居り又私の顔を知つて居る人間も澤山ある殊に耶蘇教の女宣教師のミステラーと云ふ人がニヤートン城の向ふの小村に住居をして居りまして其處には又荷物を取調べる所の官吏も居ります、其官吏は西藏人て私の事を能く知つて居る、ナカ／＼根性の悪い男です、それから油断はならぬのみならず、又ミステラーに附いて居る下僕も矢張私と知合の人間であるだから首尾克く關門の内に入ることが出來た所で或はドウ云ふ結果を見るかも知れない、此長い間を通過する時に於て知つて居る人に少しも會はぬと云ふことは全く望み得られない事である、

尙ほ又バリーリオン(第一の關門)に於て少くとも四五日も抑留されますから後から追蒐けられると云ふ一の困難がある、勿論私が拉薩を出た日からドウしても十日後でなければ事の發覺する氣遣はない、ナゼなれば西藏曆の四月二十日から三十日までには拉薩の役人は非常に忙しくて私の居らない事杯は殆ど氣の付かぬ位であらうと思はれるからです、漸く第二の法王の具足戒が濟み役人達も手隙になり私の竊に立去つた事を知つた所で、ドノ方面へ逃げたらうかと始めて穿鑿に掛つて此方へ追手を向けると云ふことになるのでせう左すれば今日はマダ藏曆の五月三日、今日明日に追手の追付く譯はないとした所で四五日バリーリオンに引留められて居りますと其間に追手が着くことになり、下僕や荷物を持つて居る私の旅行と違ひ彼等は官命を帯び二人なり三人なり早馬で夜を日に繼いで追蒐けませうからドウしても六日間て追付かれる勘定です、詳しく云へばバリーリオンで五日暇取るとすれば藏曆の五月八日まで掛る、テ三日追手が拉薩を出立すると假定すれば丁度私は關門内にグヅ／＼して居る中に捉へて了ふ譯です、ですから常識の上から考へては逆も此五重の關門を無事に通り抜けると云ふことは殆ど出來得ない事である、否全く出來ない事と考へにやアならぬ、然るに三昧の示す所は常識上ドウしても考へ得られない所の方向を取るとを示して居る間道を取れば強盜及び猛獸の難あり公道を取れば縲紲の辱めを受くる恐れあり、いづれの道を取れば無事に目的地に着く事が出來ませうか、

第三百三十二回 第一の關門

公道を取るに決す 私の考へるには是れは常識上の道理に従はなければならぬ事であるけれども一體どちから行ッても危険の度から言へば同じ事である、詰り公道を取って捕縛せられて酷い目に遇ふか又間道を取って猛獸の爲めに喰はれて死ぬか或は強盜の爲めに殺されるか、ドウせ死ぬれぬ困難なら本道を取りませう、殊に是まで三昧の示す所に従ッて着々成功したから先づ此度も其示した所に従ッて行かうと云ふ決心が着いたです、ソコて其夜は少しく居眠り翌朝早く馬にて出掛けチヨモ、ラハリーの大雪山の山腹を巡り段段南に進み漸くラハムツオと云ふ湖水を離れ尙ほ南の高原に上ッて行きますと東と西の遙かの彼方には例の大雪山が雪達磨の如く聳えて居るです、其間は廣い高原で最早夏の時ではありませうけれども非常に寒い處ですからソんなに草も生えて居らぬ、極く地に引附いたやうな草が少し生えて居る丈で殆ど石積であるです、今日はドウかパーリー城まで着きたいものであると思うて餘程急いで馬を走らしたけれども何分下僕は徒歩ですから追付くことが出来ぬ、チユキヤーと云ふ村に着いた時は日がすッかり暮れて了ッた、此邊は餘程の高原で大分寒い、ソレに只土地が高いと云ふ丈でなく兩脇には大きな雪の山がズラリと列んで居る

ですから寒氣も非常に嚴しい、夜分杯は犂牛の乾した糞を澤山集め其糞を燃して暖氣を取らないとドウも寒くて堪らぬ、日本の嚴冬の間よりも尙ほ嚴しい寒さを感じたです、一先づ拉薩府からダーヂリンへ來るまでの間に於て此邊が一番寒い處でせう、其翌六月十一日朝四時に起きて少しく茶を沸して飲んでから發足したです、テ曠原地の河に沿うて南に行くこと二里餘にして丁度日の上る時分に

パーリー城 と云ふ城に着きました、例の如く大きな城が山の上に建てられてある、丁度其形は拉薩府の法王殿の様な工合に出來て居るが法王殿程立派ではない其城下に家がありませう、其家は皆黒く見えて居ります此パーリーと云ふ處は雪山と雪山との間の原でダーヂリン及びカルカッタ孟買邊から出て來る輸入品は皆此處へ掛りますので、此處に税關があつて其物品に對し一々課税するです、又西藏からの輸出品も大抵此處から輸出される、其輸出品に對する關稅は十分の一取るもあり十分の二取るものもあり又物に依つて十分の四取つて居るものもある、餘り税金は高い方ではありませぬけれども大抵物品で取るのが多い、物品で取れない物は相當の銀貨に換算して取つて居ります、其城下を通つて行くと其横に小さな三丁圍位の池がある、其池の城の山手になつて居る間の道に見張つて居る人間がある、其人は誰か通り掛ると何處の宿に着くかと云うて尋ねるです、私共は何處其處の宿と云ふことは分らぬから何處か好い宿を世話して呉れんかと云つたら宜しう御座

いますと云うて此方が相當の風俗をして居るものですから其番人は貴族の僧侶と眼を着けたと見え
て好い宿を世話して呉れた、宿屋と云うても木賃宿で本當の宿屋は西藏には一軒もない、牦牛の糞
を貰った其賃を拂ふ丈けてすから糞賃宿と云うても宜いです、其糞賃宿へ泊りましたが先づ其宿へ
逗留せなくちやアならぬと云ふ始末、宿屋の主人が云ひますには「何方へお超しですか」「一寸カル
カツタの方へ行つて佛陀伽耶へも参詣する心算だが併し急な用事があるから事に依ると佛陀伽耶へ
参詣出来ぬかも知れぬ、早く歸つて来なければならぬかも知れぬ」何の御用事で御座いますか「イ
ヤ其用事は何と云ふ事はない、又言へ程の必要もない」貴僧はどちらですか「己は拉薩だ」拉薩は
どちらです「セラ」だと云ひますと「ホ、ウそれぢやア貴僧は化身のラーマで御座いますか」と尋
ね掛けた「イヤ」と云ふと下僕が側から「イヤさうぢやない、モット豪いお方だ」誰方ですか」と云
ふと「此お方は法王の」と一寸言ひ掛けたから「黙れ、貴様馬鹿な事を言つてはいけません」と
叱り付けた宿屋の主は變に思つたやうです「ソレでは貴僧は何ですか、法王の僧官で居らっしゃる
ですか」イヤさうではない、只セラのお寺に居る丈けである」と云ひますと非常に聞きながら
す、聞きながら程此方では言ふ必要がないから「そんな事を言ふ必要がないぢやないか」と刎ね付
けました

宿主の執拗下僕の白狀

所が「イヤそれはいけません、此處は非常に面倒な處でその凡て

何處にお住みになるか、ドウ云ふ御身分の者かすっぱり取糺して怪しい點があれば證明をしなければならぬ、ソレから又貴僧が印度へ行かれて此方へ確に歸つて来ると云ふ證據人を立てなければならぬ、其證據人は容易な事では立てられぬ、其證據人を立てるに就てはすつかり貴僧の事を聞いて置かなければならぬ」と云ふ「ソレでは言ふ、私はセラの普通の僧侶で大學部に入つて問答を修行して居る者である」と云ひますと「ドウもサウ云ふお方とは見えない、貴僧の様子から居る物から察するとドウも貴僧は高等僧官であるか或は化身のラーマであるかのやうに見える」「サウ云ふ風に見るのはお前の勝手、私の方ではそんな事はない、ソレは私の僧舎に問合せても分る」と云ひますと「サウで御座いますかと云つて出て行く其後から下僕の奴も亦出て行つたです、狭い家ですから向ふの室で話をして居ることが此方に能く聞える」「お前の主人はあんな事を言つてるがドウ云ふ身分の方か一つ聞きたい、本當の事を言はないと十日経つても廿日経つても此處を出る譯に行かないから」と云ふやうな事を言ひますと下僕は「ソレでも云ふたら大變に怒られるから仕様がな」「ソレなら此儘打棄つて置いても宜いか、一月掛つても宜いのか」「イヤ大變急いで居る、非常に急な用事を持つて居る様子で夜通し来た位である」「ソリヤ怪しいぢやないか、夜通し来ると云ふのはどんな用事で行くか知らんけれども一通りの坊さんぢやない、誰か」と非常にヒソ／＼話をして居るです、スルと下僕は「ソレならマア言ふけれども俺から聞いたと云はぬで呉れ、實はセライ

「アムチーだ」フ、ン、そんなら彼の死んだ人を救ふと云ふお医者さんが「ウムさうだ、法王の處にも行かれて侍從醫か博士かどツちか我々は能く知らなければども世間の評判では侍從醫になつたと云ふ

一體私は彼の人にズツと従いて居つた下僕ぢやない、實はその少し出立前に私の知つて居る藥舖の紹介で従いて來たのだから悉しい事は能く知らぬけれども何しても拉薩府では空飛ぶ鳥も落ちるやうなお医者さんで非常な評判だ」サウか、ソレでは成べく早く手續をして四五日中に旅行券を得るやうにしなければ行くまい」サウして貰はなくちやア困る」時に其お医者さんと云ふので思ひ出したが大變コ、に難義の病人がある、私の親類の者だが一つ其病人を診て貰ふ譯には行かぬだらうか」下僕の言ふには「医者扱はしない、誠に頑固しい訝しな人で何と勸めても人の言ふことを肯かない、道々お医者さんをして來れば儲かるのにソレを打棄つて來ると云ふ始末で俺ア惜くて堪らなかつた」お前一ツ頼んで見て呉れないか」と云ふて頻に頼んで居る、

病人の診察と證人の依頼 ソレで下僕がお医者さんと云ふ事丈け口が這つた事にして此方へ出て來まして「ヤアどうも何です、主人が貴僧の事をいろ／＼尋ねるものですからツイ口が這つてお医者さんと云ふ事丈け言ひましたが大變な病人があるさうですからドウせ四五日逗留の序に診て遣つて下さい」そんな事を云つて病人を診て居つた日には限りがない、殊に急用を持つて居る

から病人扱を見て暇取つて居る譯には行かない」と云ふと「衆生濟度の爲めですから是非診て遣つて下さい」と云ふ、仕方がないから「實は大變な川事を持つて居るから」と大いに拒むやうにして承諾して遣りました、宿の主人は悦んで飛出して了つた、デ暫く經つと外の人を一人連れて主人が歸つて來まして私を或家へ連れて行つたてす其邊の家は皆黒く見えて居る何で拵へたかと云ふと土の附いた儘の芝草を煉瓦石のやうな工合に長さ一尺二寸幅七寸厚さ三寸位に切つて干し固めソレを積み立てて家を拵へる、ソレはなか／＼強いものですすが併しソレ許り積み立て、置くと風の時分に倒れるから其間々に柱を立て、全く芝草で拵へた家ですがなか／＼大きな家がある但し城丈けは石で積み立て、ある、此邊は山が遠くて石を運ぶには餘程入費が掛るから芝草拵へ家を立て、居るものと見える、併し拉薩府とは違つて二階家と云ふものは殆どない、一二軒見受けたが下の一階丈けは石で積立て、上を芝草で積むやうにしてある、ソレは芝草許りて拵へると二階の落ちる危険があるからせう、私はサウ云ふ二階家へ案内されました、所て私が脈を見た丈けて大變心地好くなつたやうです、詰り自分の信仰力で快くするので御座います、病人は其家の娘さんですが神経病丁度肺病拵が起り掛けたやうな工合に極く氣が鬱して居る丈けの事ですがサウ云ふ病氣に罹つて居るものですから少しも外に出ないと云ふ、ソレから少し許りの藥を與へて「此藥を飲むと非常に氣分が晴晴するから飲みなさい、ソレから朝晩觀音様へ參詣なさい」と云つて歸つて來た

です、暫く経つて大分気分が快くなつたと云うて宿の主が大いに悦んで禮旁々私の室へ来て「此處では證人を頼むことが非常に困難ですが貴僧どうなさる心算か」ソレには困つて居るが是非とも一證人を見附けなければならぬ、相當のお禮はする心算だ」と云ひますと「ソレでは私が證人の處へ一緒に持つてお話しして上げませう、此國では誰もが證人になると云ふ譯に行かない、私共で出来るなら容易いが政府が許さない、て普通の人が行つて頼んでもなかく背いて呉れないから私が頼んで上げませう、左すれば澤山な金を取られる氣遣ひもないから」と云ふ、宜しく頼むと云ふ證人の宅へ行きました、其證人も案外悪い人でもない、けれども善い着物でも着て居ると金を食ひたがるのが西蔵人の常であります、所が私が身分杯を言うてはならぬと戒めて置いたに拘らず主人が「此の方はセラのアムチーでなかく尊いた方、法王の侍從様です」と口走つて了つた、鶴の一聲と云ふやうなものか早速其人が證人に立つことを承諾して呉れました

第三百三十三回 第一關門を通過す

關門の通過と賄賂の多少 其證人の云ひますに「お禮も何も要らぬ、手續を経る丈けの金を一ルーピー半出せば宜いです、しかし今日は是れから行つた所て通行券を貰ふ譯には行きませ

い、會議は明日あるか明後日あるか分りませんが成べく早くして貰ふやうに申して置ませう、左すれば四五日の中には出立することが出来ませう、併し今日早く願ひを出して置かないと又遅くなりますから今日御案内致しませう」と云つてインイン關所へ連れて行て呉れることに成りました、關所は城下の民家の間に建てられてありますので内に會議室らしいやうな處も何もない、役人は大分寄つて居るらしい、其外に上の役人が澤山居るのかドウか知らぬが十四五人も居りました、西蔵の官吏の事ですから役人が揃つて居りながら賄賂を食ふ爲めに今日も會議を開かぬ、今日もマダ開かぬと云うて三日も四日も甚しきは十日も打棄て、置くのではないか、其間に絞れる丈け賄賂を續り上げ請り賄賂の多少に依て早く旅行券を出すとか出さぬとか極めるのであらうと思はれる、證人の案内で願書を出しますと其役人中の一番豪さうな人が「今日は無論會議はない、いづれ明後日あたり會議を開く手續になつて居るから會議を開いた上て何分の返辭をいたす、自分で來るに及ばぬ、明後日宿の主人を聞きに遣せば分る」と云ふ挨拶、ソレはドウ云ふ意味かと云ふと明後日宿の主人を聞きに遣れば今日は通行券は遣れない、併し是れ位金を納めれば大抵明後日集會の折に通行券が戴けるだらうと云ふやうな譯でドウしても五日位掛るさうです、餘程澤山賄賂を出してサウ云ふ都合に運びますので、私は急がねばならぬ關係があるから特別に今日戴く譯に參るまいかと云ひますと貴方どう云ふ用事があるか知らんけれども此處では其日に着いて其日に通行券を貰ふと云ふ

例はない、又此方でも與へることは出来ない、今日はお歸りになるが宜からうと云ひますと私が病氣を診て遣った娘の親と宿の主人も一緒に参ったのですが其人達が其官吏を彼方の方へ呼んで行って彼の人は法王の侍従であると言ふやうな事を告げたらしい、スルと其役人が出て来て私に言ひますには「貴方はドウ云ふ用事で行かれるか」と云ふ話「極く急用があつて行くのですが明日にも會議を開いて貰ふことが出来ぬだらうか」と云ふと「ソレは逆も出来ぬ」と長官が答へた、明後日まで待った所で得られさうな様子もない、ソコで私は一策を案じました

役人を脅かす それは明後日まで私は待ちますから貴方の方で私が今日此處に到着したけども會議を開く餘裕がなかつたから三日間待たして置いたと云ふことの書付を貰ひたい」と云ふと「ソレな例はない」と云ふ、例はあるまいだらうが私は普通の私用で行くものではない、秘密の用事を帯びて居るものである、其用事は今は明すことは出来ぬ貴方聞かうと云ふならば相當の手續を経て拉薩府の方へ行かれて法王の外務係に就いて貰ひたい、今は私の身分も明されなければいけません、暇が掛るなら掛るで宜しい、斯う云ふ譯で暇が掛つたと云ふ丈の證明をして貰はなくちやならぬ」その用向の大體」はと云ふから「實は拉薩府に容易ならぬ病人があつて其病人に服させる薬を急いで買ひに行かなければならぬ、佛陀伽耶に行くと云ふのは一の方便で其實カルカッタまで早く行てデキに歸つて來なければならぬ、非常な急用で一日もカルカッタに泊つて居ることが出来ん

のである、只その薬一品買へばデキに引返して拉薩府に歸らなければならぬ、然るに此處で二日或は三日逗留することになればソレ丈遅れる譯になつて私の責任を完する事が出来ぬから是非その證明をして貰はなくちやならぬのである、勿論私の身に取つては二三日逗留したい、此間から晝夜の別なく一生懸命に此處まで急いで出て来て非常に身體が疲れて居るからドウか二三日逗留が出来れば結構であるけれどもソレでは秘密の用事を果すことが出来ぬ、今日得らるれば今日にも立ちたい位のものが併し是非呉れるとは云はない、ドウぞ證明して貰ひたい」と斯う云ひますと「一體貴僧は何を爲さるお方か」「ソレは申しますまい、私が薬が入用だと云へば何をして居ると云ふとは分つて居ませう、だが私はソレ丈の用事で行くのではなく外に非常に大切な用向を帯びて居るので實は一日も此處に止まつて居ることが出来ぬのであるからドウか私が今日此處に來て願書を出したと云ふ書付だけ下さい、三日逗留して居たと云ふ證明は三日経つて後でも宜いから」と儼然と言放ちました

旅行券の手入 すると長官は吃驚して少し蒼味がした顔をして「イヤさう云ふ事とは全く知らなかつた、ドウか少し別席に控へて戴きたい、サウ云ふお醫者であると云ふとを承る上は實は此方にも非常な病人がありますからソレも見ても戴きたい、併し長く止て居る事が出来ぬと云ふお話を御座れば長く引留は致さぬけれども兎に角私の一了簡で極める譯にいかないから一應協議の上

直に通行券を與るか與ぬかと決定して早速と返辭を致します、別席にお控へなすつて居る其間に病人を診て貰ひたい」と云ふ依頼でありましたソレから外の家へ参り其病人を診たり何かして居りますと丁度其日の三時頃に出て来いと云ひますから又出掛けて行きますと「今日は特別に協議會を開きました、斯う云ふ事は一體例のない事ですけれどもドウも貴方の内情を承つて見ると如何にも御尤もの點もあるやうに考へます、會議の結果早速旅行券を上げることに決定致しましたから四時頃までお待ち下さい」と云ふ暫く待つて居りますと誠に好都合に其日の四時頃私の手に通行券が入つたです、豫て通行券を持つて居る西藏政府の官商でも種々の打合やら荷物の取調やらでドウしても二三日は逗留せなくちやアならんさうです、然るに私は其日に得て了つた其夜出立した所て途中に泊るべき處がないものから一夜だけ其處に泊りました

バーリー城を去る 其翌日早く出立して段々南、西の山中に進んで参りました、此邊はモウ大きな雪山許りて其間が少し平原になつて居ります、三里許り上つて平原の頂上に着きますともうバーリー城は見えない、是れから降坂、昨夜般か降つて土地が非常に濕つて居る、四邊の雪山は新に降つた霰の爲に新衣を着けて居る其寒さは又格別で殊に日光の反射が酷いものですから痛く眼を打ちます、水の流れて居る邊には幾分の短かな草杯が生えて居る計で別段樹のやうなものはない、極く淋しい景色です、水は此平原の頂上を境として、一方は西藏曠原に落ち一方は印度の方へ

落ちます、其坂を踏え雪山の少し降り形になつて居る處を通つて行きますと大分に太い溪流がありまして其水の美しい事と云つたら透き通つて水底に在る白い石と黒い石が玉の如くに見えて居ります、喉が乾いて居りますから一掬ひ飲んで見ると手は縮み上る程冷たいので二度と掬つて飲む勇氣がなかつた、馬は既にバーリー城で還して了つたものですから馬に乗つて其水の中を渡ると云ふ譯にはいかない、履を脱いで此冷たい河を渉るのは難儀だと考へて居りますと下僕は先づ荷物を先に渡し又此方に跡戻りをして私を渡して呉れましたので、其冷たい中へ入らずに濟みました其水は私が西北原に於て首つきり入つて涉つた水の冷さと別段變つて居らぬのですけれども最早西藏の拉薩府で大分に安樂な活計に慣れて來た者ですから非常に冷たく感じましたので困難に堪へて居る時分には非常な困難でも随分辛抱し易いが安樂に慣れて居ると少しの辛抱すら辛いやうになるものと深く感じました

第百三十四回 途上の絶景と兵隊町

山麓の絶景 二里許り山を降つて來ますと雪山の麓の疎に生えて居る小木の間に黄、赤、紫、薄桃色等いろ／＼な名の知れぬ美しい花が毛氈を敷詰めたやうに生えて居る、私は植物學を研究し

ないから
サウ云ふ
植物に就
ては一向
知らない
けれども
非常に美
しい、四
邊の景色
に見惚れ
て居りま
すと彼方
の雪山の
頂に白
雲の飛び



四 藏 經 間 美 景

交ふ其變幻出沒の有様は恰も雪山の仙人が雲に乗りて遊戯三昧に入り彼方此方に徜徉して居るかの如くに見えるです、段々下へ降ッて来るに従て蕭々と雨が降出して今まで日光に照されて美しく光ッて居りました雪山の光景は何時の間にか消え去りましたが雨中の雪霏は又一段の眺めて御座います、道の彼方此方にはバル(句ひある黄色の阜月花)スル(同じ赤阜月)其他種々の草花に雪の溜ッて居る様は恰も壁を山間に連ねたかの如くに見えて居ります、段々山間の溪流に沿うて降ッて行きますすと奔流の巖に激して流るゝ其飛沫が足許に打付けると云ふ實に愉快なる光景であります、サウ云ふ面白い光景も不風流なる西藏人には、眩く種とほかならぬ「ドゥもこんな處で雨に降出されては困る」と云ッて私の下僕は非常に怒ッて居りまして「天道様があるならば日和にして呉れば宜いのに困ッたものだ、荷物が濕ッて重くなッて仕様が有りやアしない、何處にも今夜泊る處があるのではなし困ッたな」と非常に眩くのは無理はないです、苦しいには相違ないが若し景色を愛する心があつたなれば其苦みは忘れたらうと思ふ、けれども彼等には景色を愛する觀念は少しもない、又奇態に西藏人は景色の趣味を持つて居らぬ、石積や秃山の中で生れた人間が多いのですから景色の趣味を解することが出来ぬと見える、繪でも西藏國有の景色を描いたものは一枚もない、若し有れば其繪は必ず支那の繪を真似て書いた位のもので、すから私の下僕はサウ云ふ景色の美しい處へ來ても犛牛の糞の粒々行列して居る野原へ來ても一向平氣なものです、雨の降ッてるのも

自分の着物の濡れるのも打忘れて面白くて堪らぬ、私が若し給を書くことが出来て此景色を描いて持ッて歸ッたら嘸人が喜ぶだらう、寫真機械があつて斯う云ふ景色を寫して行ッたらどんなに人が喜ぶだらうかと思ふ程惜くて堪らぬやうな景色、時々刻々眼先が變り段々進んで來ますとロマヤ山中の名物であるドーロー、デンツローンと云ふ其色の鮮やかさと云ッたら何と形容して宜いか分らぬ程美しい花(小木)が千載の古木と突兀たる岩の間に今を盛りと咲き競うて居る彼方此方に種々の珍花異草が綾なして森々たる溪流に臨んで居る様は人をして奇と呼び怪と叫ばしめて尙ほ飽くことを知らず、我れこの處に止まつて此の風景と共に仙化せんか、ア、我父我母乃至我國人に此の景色を見せたならば如何許り喜ぶ事かと暫らく岩の上に腰を掛け我を忘れてツク〜と眺めて居ッた其時の愉快は今思ひ出して心の中の俗塵を洗ひ去るの感が御座います、けれども非常な降雨で御飯を喫べる處もないと云ふ譯で誠に困りましたがモウ少し行くと大きな窟穴があると云ふので其穴まで急いで参りまして其河端の窟で濡れた枯木を漸く燃しつゝ溪流の清水で茶を拵へて飲みソレから又段々降ッてダ、カルボ(白岩村)と云ふ處に出ました、此日の行程八里、此處は村と云ふ程でもありませんけれども兵舎があつて其舎に兵士が十六名居るです其外に一寸した一軒家のやうなものがあつて其家に兵士の女房杯が大分住んで居ります、兵舎の横に高さ三十間以上の大きな白い岩がツブリと立ッて居ります、石の質は何であるか能く見ませぬ非常に白い間に草杯が生えて居りま

した、私は其夜兵舎に泊りましたが此處の兵士は旅行券を檢めたり何かするのぢやない、驛繼ぎの兵士 是れはバーリー城とチヨエテン、カルボ(白塔)城の間の手紙を取次ぐ場所だ、此處まで一方から手紙を持ッて來ると其手紙を持ッて一方の城へ行くのです、西藏では此處程完全に手紙の遺取りの出來る處はない、外の處では例へば二十里或は三十里位行ッて驛繼ぎに手紙を渡して向ふに運んで貰ふと云ふ順序になつて居ります、ソレも政府が地方の役所に命令を傳へる時に限ッて行ひますので平生普通の手紙の往復は取次がない、ですから若し民間の人が手紙を往復すると云ふ場合には自分の家の者を遣はすか或は人を雇はなくてはならぬ、其夜兵舎では私を立派な寢臺の上に寝かして呉れました、印度を立ッて以來立派な西洋風の寢臺で寝たのは此時が始めてあります、丁度此頃は雨期、殊にヒマラヤ山中のダーチリンから北の方に掛けては非常に雨の多い處で其翌日も大降りですけれども、此處に泊ッて居る必要がないから下僕の泣言を云ふに拘はらず午前五時頃大雨を冒して出掛け今度は凄いやうな森の中へ掛りました、所が三四人で抱へる位の大さな樹が澤山生えて居ります、此等は皆西藏政府の屬領ですが此邊から樹を代出した所で西藏内地に持ッて行くことは出來ない、水は悪し、運搬の道具は揃はず水は南方に流れて自分の方へ流れて行かぬですから如何にしても運送の便利がない、其儘打棄てゝあるらしく見える、殆ど四里許りの森林で其間には平地もあり西藏のバーリーの峯から流れて來て居る川もあります、其流れは始

めは非常に細いすけれども段々溪流や小河を集めて下に行く程太くなつて行くと云ふ有様であります、ダ、カルボから六里餘り來ましてチヨエテンカルボの城に着きました、此

チヨエテン、カルボ城 は歐洲人の著書に記されてあるのか無いのか私の見た書物の中には

一向見當らなかつた、是れは極く新しく出來た城ですから事に依るとマダ歐米人の間に分らぬのかも知れない、或は分つて居つても秘密にしてあるのかも知れぬ、けれども兎に角新城で支那兵が二

三百名程居ります事も全く分らぬものと見えてダーチリンに着きました時分に其地方の長官が斯う云ふ處に城があると云ふ話だが其城の狀態から兵士はドレ丈け居るか是非知らして呉れと云つて非

常に問はれた「そんな事を尋ねないでも貴方の方で分つて居るだらうと云ふと」ドウも彼處には秘密探偵が行くことが出來ぬから分らぬと云つて居りましたが果してさうかドウかダーチリンに居る

西蔵人でも古くから居る者は其城のある事を知らぬやうです、又西蔵人は錢儲には抜目はないがサウ云ふ事には極く不注意で彼處に城の門見たやうなものがあると云ふ位の話を兵士が何人居つてド

ウ云ふ仕事をするのか、ドウ云ふ目的の爲めに居るのか、そんな事は平氣なものです、デ其城の下が通路になつて居りますけれども私は特別に城の中に入つて行きました、別段喧しく言ふ者もなかつたです、其城内に支那兵の市街がありまして其市街に三百人程兵士が居ります山の中ではあるが

ナカ／＼盛な市街で理髪をする兵隊もあれば饅頭を拵へて賣る兵隊もあり、又豆腐を拵へて居るも

あれば小間物を賣つて居る者もあり兵士は皆相當の商賣をして妻君もあれば小供のある者もあります、兵舎とは云ふもの、全く一の市街のやうになつて居ります、此等の兵士は半箇年交代で或時にはシカチエの方から出て來るもあり他の半箇年はギヤンチエから出て參ります、何れも支那政府の俸祿を貰ふ許りでなく又西蔵政府からも手當があります、随分収入は多いと見えて立派に生活して居ります

第三百二十五回 無事四關門を通過す

日本の茶漬を喫喰す

兵隊町の或る兵舎に着き晝飯を注文致しますと米があるからと云つ

てワザ／＼米の御飯を炊いて呉れ其他いろ／＼支那流の御馳走を出して呉れたけれども豚や犂牛の肉類が多いから下僕は悦んで喰ひましたが私は是れは喰はぬからと云つて断りますと菜漬の大變旨いのを呉れた、此時始めて日本の菜漬を喫べるやうな味が致しました、其處では別に咎めも何もせぬ、此處の城はナカ／＼堅固に出來て居りまして其南方に當り兩脇の山に沿うて大いなる石塙が建てられてあり其真中に門が二つあります、其門には毎日六時に開けて午後六時に締めると云ふ書付が貼つてあります、其通り遣つて居るかと思つて聞くとソレは非常に確實なもので偶々兵士杯

が何か特別な急用でも出来ると其届けをして明けて貰ふことがあるけれども其外は夜分往來する
と猛獸に出遇ふ恐れがあるから餘り往來せないと云ふ事です、鳥渡した橋を渡り半里許り登形の原
を進みソレから元の河に沿うて森林を降り半里許りある原に出ますと美しい草もあり馬も澤山居り
ます

第二の關門を通過す 其原を離れ橋を渡り四五丁行きましたチエンビーの橋に着きました

大分大きな橋で長さ廿四五間、幅二間位あるが欄干も何もない、橋の東側の方には門が立って居り
其門の前に小さな家があつて兵士が其門を守って居ります、旅行券は其兵士に渡すのですが若し其
處で胡慮な者と認められるれば送り還されると云ふ話です、そんな事はないでせうけれども兵士に遣
る物を遣らないと送り還されると云ふ風説は前から聞いて居りました、其處へ着くと私の様子を見
て「何處へ行かれるのか」と云つて執拗く尋ねましたが大官が長官に旅行券を渡しますと長官
が一聞くに及ばぬ、早速通せと云ふのは旅行券の中に此人に對しては決して一言も訝な事を云ふた
りいろくの舉動をすることはならぬ、若しサウ云ふ事があれば後に酷い目に遇ふから彼此言はず
に早速通せと云ふ命令があるから何の故障もなく其門を通して呉れた、マア是れて二つの關所を
通り脱けた譯です、更に又三つの關所を踏なければならぬ、コリヤ又新しい試験です、併し第一の
試験に及第しましたから詰り三味の示した所が當って居るのであると云ふ信仰も出まして實に愉快

てした、河に沿ひ段々南に降つて行くこと二里半許りにして即ち

ピンビタンの兵營 に着きました、此日は雨が澤山降つて居つたものですから下僕も私も

非常に疲れたのでいよく其ピンビタンの兵營に着き或兵舎を借りて宿りました、明日は此兵舎の
取調は受けなくても宜いと云ふ話、直に此處からトモンチエンガンに行き其關所の長官より書付
を貰ひ其書付を證據としてモ一つ向ふの支那人の守つて居るニヤートンの城門を通して貰ふてソレ
から所謂第五の關所なるニヤートンの本城の守關長の取調を受け書面を貰ふて又ピンビタンに引返
して來なければならぬ、所がピンビタンでは午前十一時から十一時半までの間に書面を渡
さぬと云ふことを聞きました、ソレで先づ明日早くからトモの方に出掛ける必要があるけれどもナ
カ／＼明日中には片付ささうもない、是れも矢張四五日は掛るであらうと云ふ豫定であつた、此間
でも矢張グツ／＼して居るとドウも追手の着く憂があるのみならずもうバ／＼して斯う云ふ者を
捉へて呉れと云ふ通知があればニヤートンまでは夜通してもデキに手紙が通じますから私は到底自
分の目的を達することが出来ぬ、何とか方法を運らさばやアならんと思ひました、所が其夜幸に誰
が連れて來たのか、ドウ云ふ關係から出て來たのか分りませんがピンビタンの城を守つて居る長官
(支那の將校)の女房が診斷を受けに來ました、此女は西藏の婦人で其婦人が長く煩つて居ると云
ふ、一寸ヒステリーのやうな病氣でありますが非常な美人でナカ／＼支那の將校に對しては無限の

勢力を持つて居る、其將校は兵士に對しては勿論命令を下す權力を持つて居ますけれども家族の中に在つては妻君が隊長で自分は兵卒となつて其命令の下に従つて居ると云ふ話をして居つた兵士が
ありました

關長の妻君を診察す ソレは兵士の悪口でありませうけれども折角出て来たものですから

望みに應じて診て遣りまして、病症の説明をして注意を加へ少し許りの藥を遣りました所が私の説
明が長く煩つて居る容體に適中したと見えて成程セラのآمチーは豪いものだと感じたか大に悦び

「何か禮をしたいが欲しいと思ふ物がないか」と云ふ、何も欲しい物がないと云ひますと自分が家
に歸つて直に包物を持つて來ました、ドレ丈け入つて居つたか知りませんが私は其包を押返して「私

は明日急ぐ用事があつてニヤートンの方へ行かなければならぬのでニヤートンの關所で書付を貰つ
て此方の關所に旅行券を貰ひに來なければならぬ、自分も引還して來たいとは思ふけれども或は使

丈け遣すかも知れぬ、其時分に長官が手間取るに違ひなからうけれども直に渡して呉れるやうに
取計つて下さる譯には行くまいか」と頼みますと「そんな事は譯はない、家の人は堅い人で部下

の兵士が行く場合でも十一時から十一時半までの間でなければ旅行券を渡さぬけれどもソレは私が
確に引受けます」と云ふ「ソレ丈けがお頼みて今度又歸つて來る時にお目に掛りませう、此包は全

く要らぬから」と云つて無理に押戻して了つた、其婦人は悦んで歸られた、明日彼方の方さへ旨く

行けば此方の手續は出來た心算であるけれども尙ほ氣遣はれるから私の泊つて居る家の兵士の女房
に聞きますと「ソリヤもう屹度旨く行くに違ひない、彼の人は家の人に對しては無限の權力を持つ
て居ますからと云ふ、日本で謂ふ暎大明神の家庭であつたらしく見える、其翌六月十四日午前三時
雨を冒して二里餘り行きますとトモリンチエンガンに着きました、マダ夜が明けません何處も彼
處も戸が締つて居るから一寸休む家もないです、幸に雨も少し歇んで來たものですから或家の軒下
に佇んで居りますと聽て戸を明けました、ソレで關所は何處かと聞きますと此村外れてあると云ふ
關所と云つても別に門はない、只見張をして居る家がある丈けです、其關に着くと今起きたと云ふ
ところ

第四の關門も無事 ソレから事情を話して通行券を戴きたいと云つた所が例の通りソレな

例がないとかグツ／＼云つて居りますと下僕が「こりやセラのآمチーです」と口走つたです、ス
ルと「ソレぢやア何ですか此頃大變名高い法王の侍從醫になられたと云ふお方ぢや御座いません

か」と私に尋ねたから「法王の侍從醫になつた譯ぢやないけれども兎に角急用を帯び居るから早く
行かなくちやアならぬ」と西藏の紳士流にボンヤリ答へますと忽ち信用して思つたよりは易く書付

を書いて呉れたです、村を離れて一里許り登り是れより本流の河川と離れ西少し南の山間の太い河
に沿うて段々上に登つて行きました、最早此邊には大木はない、小さい木が少しある許りて田地も

あつて小麥ぐらい出来るさうです、ソレから一里許り行くと城がある、一番大きな城で又一番仕舞の城であります、城は三つ程あつて此城に居る兵士の数は二百名、ピンピタンには百名其前のチヨエテン、カルボ城に二百名、凡て五百名であります、或時は此城の兵士が五十名位ピンピタンの方へ行くこともあると云ふ話でした、此處の兵士町は二丁餘の長さで裏長屋になつて居る、其間には矢張チヨエテン、カルボの兵隊町のやうにいろ／＼の商賣をして居る兵士があります、是れはピンピタンにもあつたです、其兵隊町を抜けると大きな門があり其門の脇に見張の兵隊が二人居りますから其兵隊に書面を示すと早速判を捺して通行を許されたソレから一丁半許りあるニヤートン驛に行くのですが此ニヤートン驛は私に取つては非常に危ない處です

第三百二十六回 愈々第五の關門

第五の關門に着く 何故ニヤートンの關門か危ないかと云ふに私の知つて居る人が澤山居るからです、勿論敵のやうな人は少しも居らぬけれども元來西藏人は非常に錢儲けを好む質ですから私の顔を見て西藏の役人に斯う／＼云ふ者であると告げれば錢儲けになると云ふ考で許く者があるかも知れぬ、英國人も二人居る、一人はミステラーと云ふ、女宣教師である、此人の事は前に

もお話をしました、が西藏の内地へ入らうとして支那の方から道を取つてナクチユカと云ふ處まで進んで來ました、此處から西藏の拉薩府までは馬で行けば十五日、歩いて二十日か二十四日か、れば着きます、其處まで來てトゥ／＼謝絶された、尤も其處までは譯なく來られることになつて居るです支那領の西藏であるから、ソレから、此方は法王領の西藏であるから進んで來るとを許されなかつた、ソレが爲めに後戻りをして今西藏人を感化するの目的を以て此ニヤートン驛に住居して居ります、此處は英領印度と西藏と境界を接して居る處で西藏政府の官吏も居れば英政府の官吏も居るです、又貨物の輸出入を取調べる爲めに支那政府から雇はれて其驛に住居する英人もあり其英人に附て居る西藏人の書記もあります、尙その外にダーチリンから來て居る西藏人が四五名居りました、夫等は夫等の顔を知らず、其人等に見附けられたらモウお仕舞です、餘程注意を加へて行かにやアならぬけれども見附かつたら百年目、ソレまでの運命と覺悟してズン／＼遣つて行つた、其處には十軒許りの家がある、其中でも最も大きな家は其官吏の住んで居る家と宣教師の住んで居る家である、ソレから尙ほ一つ支那官吏の住むやうな家もある、

第五の關門は人足上り 宣教師の家の向ふにチーキャブ(總管)と云ふ官名で其人の

實際の名はサタ、ダルケと云ふのであるサタと云ふのは人足廻しと云ふ意味でダルケは其人の本當の名です、ダーチリンにダンリフ即ち山鶴籠昇が居りますが素と此人は其人足廻して人を欺いた

り或は脅かしたりして金を食ふことを殆ど常職にして居つた悪漢でダーチリンの誰に聞いてもサ
 タ、ダルク程残酷な奴はないと現在酷い目に遇つた人杯は涙を流して罵つて居るのをしばしば聞いて
 た位です。非常に悪い人と見える、其人に遇はなければならぬ、サウ云ふ人足廻しの成上り者で
 すがチーキャブと云へば所謂西藏の勅任官で大變な権力があつて帽子には珊瑚珠の飾りを着ける
 ことが出来るのです、成上り者の常として其言葉の使方杯は拉薩府に於ける總理大臣よりも威張り
 くさつて居ります、ナカナカ私共が其門に行つて遇はして呉れると云つた所が門前拂ひを喰ふに違
 ひない、其真向ひの家は流石に歐洲人の家丈けあつて寢室、書室、接客室杯もあつてナカ／＼立派
 な家で多くの下僕が彼方此方と忙しさに働いて居りました、其中には私の顔を知つて居る者があ
 ったらうけれども私は成るべくその方を見ぬやうにして居つたから誰か居たか能う分らない、で、
 チーキャブの處へ尋ねて行きましたけれどもナカ／＼上へ上げて呉れない、其中に一人の人が出て
 来て私の顔を見まして「アリヤ誰か」と云つて内々下僕に尋ねたてすスルと下僕が「こりやセラの
 アムチー」と云ひ終らぬ中に「オ、彼の名高のアムチーか誰か、セラのアムチーが此方へ來ると云
 ひ居つた」と云ふと僕下は「急ぎの用事で出て來たので一日も暇取つて居ることは出来ない、バ
 リーでも其日直に旅行券を呉れた位だから早く書付を呉れるやうにして呉れ」と云ふ、大分旨く遣
 るわいと思つて居ますと「兎も角此方へお上りなさい」と云ふ、此チーキャブには二人の女房があ

る、一人は人足廻はし時代からの女房、又一人の美人はチーキャブになつてからの女房です
 又關長を脅す 事情を打明けて通過の許可書を與へて呉れと云ひますと「ドウ云ふ用事かと
 云ふ、外てはないが私は法王内殿の秘密の用事を帯びて早くカルカッタの方に行かなくちやアなら
 ぬ、出來得るならばドウか二十日程の間に此方に歸つて來たいと思つて居る程の急用、併し掛る丈
 けの用向があつて暇の掛るのは仕方がない、ソレ丈の證明さへ藏けば拉薩へ歸つてからの申譯が
 立つから宜しい」と例の如く云放ちますとチーキャブは一其秘密の用事と云ふのは私は職掌とし
 て聞いて置かなくちやアならぬ」と云ふ「サウですか、貴方は總理大臣の秘密をお聞きになる権利
 を持つて居るのですか、况や法王丈けしか知らぬ秘密をお聞きになる権利がありますか、ソレを是非
 言へと言ふならば云はんぢやない、併し言つた以上の責任は貴方が帯びると云ふ證明書に職務上の
 印を捺したものを貰ひたい、サウすれば私は人を遣さけて貴方に法王の秘密を打明けますから」と、
 儼然威儀を正して言ひますと「イヤさう云ふ事なら無論聞きません、サウ云ふ大切の御用を帯びて
 居るから一日でも止めて置くことは出來ぬから早速旅行券を得らるゝ方法を運びませう就ては私
 が書面を認めるから其書を下僕に持たしてトモリンチエンガンまでお遣りなさるが宜しい、左すれ
 ばトモリンチエンで二通の書面を呉れますから其書面を持つてピンビタンへ行けば支那將校から
 一通の書面を呉れます其書面さへ持つて來れば皆此關を通過することが出来るやうに成るのです

からと云うて直にトモリンチエンガン宛の書面を認めて呉れたです、前にも一寸説明して置きました、たが、彼の第四の關門即ちトモリンチエンガンで貰ふ二通の書面に就て説明して置きます、二通の内支那文字で書いた一通は第三の關門即ちピンビタンに持つて参ります、證明書で是れはピンビタンの將校に渡して了ふのです、他の一通の西藏文字で書いたのは

歸國證書　　て私が印度で用事を済まして西藏へ歸つて行く時分に第五の關門——歸る時には第五ではない第一の關門ですが——のチーキャブに此歸國證を見せて新に旅行券を貰ふ手續をする證據物で御座います、所が私は出て来た切で歸りませぬから此歸國證書が私の手に紀念として残つて居るので御座います、話は戻りますがチーキャブから書面を得ると云ふことは容易ならぬ事です、此人が一番賄賂を食ると云ふ評判が高いのです、其容子と云つたら見るからが嫌な風采で私が法王の秘密用を帯びて居ると云出すと忽ちヒシグて見悪い程お辭儀許りして居りました、がソレ俺の手際を見ると云はぬ許りの語氣を示して居つた、其豹變の甚だしいには私も呆れたです、此時私は何處の國でも下の者に對して無闇に威張る奴は必ず上に對して諂ふ奴、上に對して非常に諂つて居る奴は屹度下に對して威張る奴で實に憎むべき佞人であるとは豫て信じて居りましたが此時に於て一層深い感じを持ちました

第三百二十七回　　愈々五重の關門を通過す

從者の跡戻り　　其第五の關門の總管から貰つた書面を下僕に渡し「トモ、リン、チエン、ガ
ンでは此書を持つて行けば書面を呉れるだらうがピンビタンでは彼此言ふだらう、サウしたら將校
の奥さんの處に行つて頼め、屹度渡すやうに計らつて呉れるに違ひないから」と内々吩咐けまし
た、所が下僕は吃驚して「ドウしてこんなに早く呉れたのでせう、夢のやうな譯ですな、併し貴方も
一緒にち越にならんでトモの方でも承知致しますます」と云ふ「イヤそれは私も氣遣つたからチー
キャブに尋ねた所が委細此書面に書いてあるからトモの關長が必ずピンビタンへ送る書面を書い
て呉れるに違ひない、遠い處へワザワザも越に及ばぬ、下僕だけ遣つて貴方は此方に待て居るが宜
いと云ふ話だから」と云ひ聞けますと下僕は其書面と實際に私共が持つて来た所の一通の書面——
ソレには總管の印が捺してあります——とを持つて荷物はなし身輕ですから一散に走つて跡戻りを
して行きました、先に通り返して来たニヤートンの大城門の傍に見張をして居る兵士に其チーキャ
ブから判を捺して貰つた書面を渡し而してチーキャブから貰つた一通だけを携へてトモ、リン、チ
エン、ガンに行くのです、其關長に書面を渡しますと普通の者なれば賄賂を使つて二日も三

日も掛る所です
 がチーキヤブか
 らの特別の命令
 もあり先生も亦
 私を信じて了ッ
 たものですから
 直に書面を二通
 拵へて呉れた其
 二通の書面を持
 ツて又二里餘の
 道を跡戻りして
 ビンピタンまで
 参りました、ソ
 コでビンピタン
 の役所に着て二



二 十 一 十 城

通の中の一書を渡して一通の支那文字で書いた書面を請取る譯なんです、所が午後の一時半頃
 になつて参つたものですから案の如く呉れないと云ふ、ソレから其下僕は私の吩咐けた通り將校の
 宅の方に参つて其奥さんに「ドウか書面を貰つて呉れる」と云つて頼みますと其奥さんが直に關所
 へ駆付けて來たです、デ將校即ち夫に對して、此方に書面を遣つて呉れると云ふた所が「今日は遣
 ることは出來ぬ、明日遣る」と云ひますと其奥さんは非常に怒り出し「私が引受けてあるものを貴
 方が肯かぬと云ふのですか」と殆ど西藏婦人の本性を現はして喧嘩腰になりますと

鶴の一聲

仕方がないと思つたのか、急に我を折つて、一通の書面を書いて呉れたと云ふ下僕

の話、下僕は其書面を持ち急いで歸つて來ましたのは丁度四時過ぎて御座いました其二通の書面の
 一通は支那文字で一通は西藏文字即ち前に掲げてある證書であります、雨は降つて居りますし最早
 や四時過ぎですから今夜一晩此處に泊つても宜い位の考はありましたけれども成るべくならば出立
 する方が宜い、モウ此處を離れて半日行けば英領印度に入るのだからドウか今日出立したいもので
 あると思つて居りますとチーキヤブの云ふには今日は生憎雨が降つて非常に困つたものですけれど
 も是れからナクタンと云ふ驛へ着くまではナカ／＼道が遠い、デ其間には何處にも泊る處がない、
 尤も是れから四里許り上ると一軒家がある、今夜その一軒家まで着くことが出來れば非常に結構で
 ある、其處まで行かれると明日極く楽にナクタン迄着くことが出來るがサウでない明日は午前

三時頃から立ッてもナクタンに着くことは六ヶしう御座いませう、殊に大切の用事を帯びて居られるから困難ではあらうけれども今日も立になつてはドウです」と云ふ「私はドウも疲れて居るから今晚此處へ泊りたいと思ふが併しドウしても明日中にナクタンまで着くことか出来んでせうか」と云ひますと「イヤそれはドウしたツて出来ない」ソコで私は下僕に向ひ「ドウだ行けるか」と尋ねますと「ドウも困りました」と云ふ、ところがチーキャブの言ふに「主人が大切の用事を帯びて居るのに不届な奴だ、行かぬと云ふことがあるか」と非常な聲で叱り付けた、下僕は「はい」と實に涎に鹽を掛けたやうに縮まつて閉口して了つた、私も一日此處に泊つて居つても船でも買ふやうな種になりはすまいかと云ふやうな萌しもありますから「ぢやアそろ／＼出掛けることに致しませう」と云つてチーキャブに暇を告げて

第五の關門を出づ

出立しました、ニヤートン城は圖面にもある通りナカ／＼立派な城であります、ニヤートン驛を出て一寸降ると河がある、二間餘の小橋を渡り四五間行くと一寸一軒家があつて其處に支那兵士が居る、其支那兵にピンピタンから貰つて來た支那文字の通行券を渡して行くので、其書には此二人の通行を許せと云ふ文句が書いてあるのです、ソレから段々山に登つて行くと雨はドシ／＼降り坂は峻しいが併し此邊の道は大分に能く出來て居る、西藏國の境界になつるところで全く英館ではない、今ニヤートンに居る英人は西藏の土地を借りて住んで居るやうな譯

です、雨を冒して非常に樹の生へ茂つて居る急な坂を二里許り登ると闊くなつた例の如く下僕は吐き出した「何もチーキャブの家へ泊らないでも外に泊る處は澤山ある、此雨の降るのにワザ／＼出て來たツて何處にも泊る處はあるもんか、荷が重くて動けやしない」とブツ／＼云つて居る「ソレぢやア己が半分助けて遣るから」と云つても道の中へ坐り込んで動かんです、漸く行め／＼丁度八時頃まで歩いたが其一軒家の處まではマダ二里もあると云つてナカ／＼歩かない、所が其邊に小さなテントを張つて其中で火を燃して居る者があつて其テントの近邊に驛馬が澤山草を喰つて居ります、是れはトモの人でカレンボンまで驛馬で羊毛の荷を運ぶのであります、其テントに就て是非此處に泊めて呉れと頼んだ所が、此通り幕内には五人も居つて入る處がないと云ふ始末、けれども何と云つても下僕は進まぬから仕方がない、坐つて居つても宜いから泊めて呉れと推して頼んだので漸く其中に入れて貰ふことになつた

無量の感慨

泊りは泊つたが寝ることも出来ないから其儘坐つて居るといゝ／＼の感に打たれたです「彼のやうな殿しい五重の關門を僅か三日間に通ひ抜けたと云ふことは實に不思議である、極く旅慣れて此邊を度々通過して居る所の西藏商人てさへ此五重の關門を通過するには七日以上十四日掛ると云ふ豫定、然るに私は殊に大雨中三日間に通ひ抜けて此處まで無事に出て來たと云ふのは如何にも不思議である、始め此五重の關門を通らうと云ふ決心をしたのはドウせ前世の羯摩

(業力)の結果、免かれぬ因縁があればブータンの間道を取らうか桃溪の間道を取らうか運命は一であるかと考へたから幸に事を誤らずに此處まで着くことが出来た、併し此間に於て不思議な事は私が豫期しなかつた謀事がズン／＼其場合に臨んで施されるやうに向ふから仕向けて呉れた一事である、何れの關門も裕に謂ふ狐に魅された如く殊に彼の眼の鋭いチーキャブ二十年以來印度地方に在つて艱難辛苦を嘗めつゝ種々の世渡りをして來た彼の足廻しのダルクさへ私の心事に就て素振に對して一點の疑ひを挟むこともなく却て閉口頓首して其日の中に送り出すやうにして呉れたと云ふのは是れ全く我が信仰する本師釋迦牟尼世尊の守護下された徳に依る事であると實に佛の冥加の恐ろしい程有難いのに感涙を催し其夜は特に經を讀み夜中一睡もせずテントの中で夜を明しました、けれども私が全く西藏を去つて後拉薩府に大疑獄が起り夫れが爲めに五重の關門通過の苦痛よりも痛く心を傷めるとは何等の因縁で御座いませうか、其疑獄に就てのお話はあひ／＼申します

第三百三十八回 西藏に別る

旅行の道程

此處で一吋私のを歩いた道程を申すと、ダーチリンから拉薩府迄大約二千四百

九十哩、ばかり歩いて居ります、先づ明治三十二年一月五日にダーチリンを出發し汽車に乗つてカルカッタを経てセゴールと云ふ所迄來て此處から又歩いて二月五日にカタマンドに着きました、セゴールからカタマンド迄約百十五哩です三月七日に此處を立つてポカラに着いたのが同月十一日、十四日にポカラを出發して四月の十六日に西藏國境から僅か十八哩を距つて居るロー、ツアランに着しましたがカタマンドから此處迄歩いたのが二百六十哩許りです此ロー、ツアランに一年程滞在して翌三十三年四月の六日に此處を立つて西藏侵入の便宜上再び前の方へ戻つて來てドリラギリ山の東麓にあるマルバ山村に出で六月十二日に此村を立つてドリラギリ山の北の中腹の殆ど二萬尺の所を躑えて西北原の方に進み七月四日に西藏西北原のホルト、シヨ州の山峽に達しました、ツアーダンからマルバ迄約七十哩、マルバからホルト、シヨ州まで大約百五十五哩程あります、此間は藪の中や豁を廻つて行きましたから思はず道を餘計に歩きました夫れから十二月五日にシカチエ府のタシルフンブー寺に着き三日間滞在して同地を出發して明治三十四年三月二十一日にダーチリンを出てから丁度二箇年と三箇月ばかりで拉薩府のセラ大寺へ着きましたのですがホルト、シヨ州から拉薩府迄は種々廻り道などしたので千二百七十九哩も歩いて居ります此間の事は前に委しくお話しした通りであります

西藏と英領印度との國境

其翌朝起出づると其處には昨夜集めて來てあつた所の薪があつ

て其薪で湯を沸かし茶を拵へたから其序に麥焦しを喫べましてソレから出立しました其日は何うせ
 麥焦がしも何にも喰ふことが出来んと云ふのでシツカリ喫べ込んで山に登り掛けた、雨は歇んで居
 るし大變好い都合、段々登って丁度二里足らず登りますとモハヤ樹の非常に茂って居る山を離れて
 今度は小さい樹の間に出て来た、ソレから半里許り行くと一軒家がある其の一軒家は何の爲に其處に
 建てられてあるかと云ふとダーチリンの方から怪しい者が来た時分に夫は歐洲人でなくても假令印度
 人でも何う云ふ人でも顔の知らん人が其處へ出て来た時分には差止てニヤートン城に報知する事に
 なって居る、又忍んで折々歩いて来る人間があれば捕まへて直さにニヤートンに報知する事になつ
 て居る、其爲めに此處に一軒家があるので、其家には婆アさんと外に一人居りました、其息子と
 云ふのはカレレボンの方へ商ひに行つて留守だと云ふことでソコで又幸ひに茶を飲む事が出来、尙
 ほ是れからは何うしても行けないと云ふものですから又モウ一度酷い坂を登つて来て腹も減り加減
 になつたから又一度やりソレから山へ登つて行つた、ソウして一里ばかり極く小さな木の生えて居
 る間を登つて行くと今度は全く雪の山になつて了ひましたが其雪の山に這入る前に池がありました
 其池には氷が張りソレから一里ばかり上は非常な雪でした人が澤山通るものですから其雪が踏ま
 れて堅くなつて居る上に昨夜又降つたので其踏んで堅くなつて居る上に新しい雪が積つて居つて矢
 張り堅い所ではあるけれども幾分か踏み占めて行くやうな鹽梅になつて進んで行つたてす此坂の名

をゼーラと云ふ、其雪の中を登つて行く中にもズツと下の方を見るとナカ／＼大變な廣い野原の谷間から雲が立って居りまして夫れが大いなる林の間に飛んで居ると云ふやうな有様、實に綺麗です、デ上の方にはバル、スルの花が盛に咲いてあるのが能く見えて居りました、其一里許の雪の中を抜けて頂上へ着ました、此頂上が英領印度と西藏との本當の境目である、此處



七 一 九 坂 の 頂 上

を一足向ふに下ればモウ西蔵の法律を以て支配さるゝ事のない人間になつて了ふ、是より北は西蔵である是より西南は英領印度である先づ其處迄着きましてソコで私は東北の方を眺めて又其漢々たる廣い谷を踰えて遙かの東北に當る雪の山が其雲の中に見えつ隠れつして居る様を觀た、彼の雪山の彼方には尙ほ雪山があつて其雪山の彼方には拉薩府があるのだ、デ其拉薩府から今日此處迄出て来て此處で愈々西蔵と全く別れる事になつた、デ丁度私が西蔵の國境即ちヒマラヤ山中のツアランに着いてから此方殆ど三年の星霜を経たが無事に今日自由に音信の出来る國迄到達する事が出来たのは是れ全く釋迦牟尼如來の加護力に依る事であると云ふ感が一層深くなつたものですから其時に又世尊釋迦牟尼佛に對し禮拜をし夫れから其中に感じた二三の歌があります夫れを爰に述べます

みほとけの護りの力我れなくは

ゆき高原に我れ失せけんを

あまつ原深雪の山をふみこえて

妙の御法の會にも逢ひけり

萬代に變らぬ雪の深山路を

ふみ別けにしは法の徳にそ

ソコで西蔵の總てに對し一旦別れを告げて目出度く英領印度の方へ下る事になりました
名物の雹 其時はモウ長く山上に留まつて居つたものですから餘程寒くなりましたが夫れをも打忘れたです先づ關鎖幾重の難關を無事に踰えた喜びの餘りに佛陀の徳を感謝する其思ひの強い爲めに非常に寒かつた事も忘れた、モウ元に返つて来る事になると非常の寒さで幸ひに日が照つて居るものですからマア其中にも幾分か温まりを感ずるやうな事であり升た、デ雪の中を又一里ばかり下りますと石で幅三尺位の道が出来て居る其道は西蔵では夢にも見る事の出来ない立派な道である私が出て来た歳には殊に大きな雹が降つた其雹は雪山の名物とも云ふべき物で私は一度ネパールの中に出逢つた事がある實に驚くべき大きな雹です、雪の中を掘つて見ました丁度鳩の卵位のものが澤山ありました、降つた時の大きさはドノ位かと云ふと鶏の大きな卵程であつたと云ふ、左う云ふ奴がドン／＼降り掛けて来ると云ふ話丈け聞いた分には逆も信じられんけれ共今幾分か變つて居るのを見ても其大きさが鳩の卵程であるのですから眞事であると信じられたです、デ此邊は最早ダーヂリンの方へ商ひに来る者が澤山にありましてアツチコツチ通行するですダーヂリンの方から人が澤山来るのでなくて所謂トモの方から出掛けて行つて買物をし或は賣ると云ふやうな事を行います、デ左う云ふ人等に就て聞いて見ると全く今云つたやうな大きな雹であるです、ソウ云ふ雹が降つてからして一月半ばかりは通行が止まつて居つて漸う此頃道が開らけたと云ふやうな事ですソ

コで大分に其冠が解けて嵩が低くなつたものですから漸く半箇月前から此通行が出来るやうになつたと云ふ、其雪の中を放れて今度は段々下つて行く事一里にして又坂を登つて行く事が二里です又下る事二里にしてナクタンと云ふ驛に着きました、此處には二十軒許りの家がある、ソウして又昔は兵舎に充てられて居つたものです、今は羊の毛の荷物などを入れるやうにして居る場所がある非常な雨降りてあつて其町の中の道は非常に悪くなつて居る其處の或る家に泊りまして其夜は能く寝ました

雨中田植を見る

六月十六日午前五時に非常に雨の降る中を冒かして出立して鬱鬱たる林の坂道を下ること十三哩にしてリンダムに着きまして其處に宿つたです、日和なら随分進める所なすのですけれども雨は降るし最早西藏領を離れてソナに急ぐ必要もないのでブラ／＼遣つて来たソレで此驛に泊まらねばならん事になつた翌日は又下つて行く事四哩、其邊へ來ますとモウ熱氣が酷い暑さで堪らない、先づ着物を脱ぎまして夫れを男に持たせ薄着になつて行きましたか坂を登るにてもないのに汗が澤山出て全身を濕ぼすです、ソウ云ふ所から又西南の方へ登つて行きソムタクバと云ふ所迄進んで宿りましたが矢張り雨が蕭々と降つて居る、翌十八日又雨の中を下つて行く事三哩、又夫れから橋を踰えて登る事三哩其邊は田野が能く開けてチパール人が此邊には澤山移住して來て新しく田野の開けたのが澤山ある、是れは英領で其租税は皆英領印度政府に納まるんです、ダ

が其人は大低チパール人が多い又其間にはシツキム人もある此シツキム人の事に就ては少し面白い話がありますから後に致す事として此道筋で面白く感じた事は其雨の降つて居る中で田植をして居る、米が澤山出來て日本の米と同じやうに非常に旨い、印度米と云へば大抵不味いのが多いけれども此ヒマラヤ山中の此邊に出來るのは光澤があつてソウして粒も日本の米と同じやうである、香ばしい匂ひがあつてナカ／＼好い味を有つて居るソウ云ふ米を作る爲めに田植をやつて居る雨がビシヨビシヨ降つて居る丁度日本の事を思ひ出されて詰らん腰折が出來ました

五月雨のヒマラヤ山の稻植系に
大和のさまのをしと思はる

人間らしい臥床 夫れからポエトンと云ふ驛に着きました此邊には歐洲人の住んで居ります者もありますし其中にも農業を營つて居る人が多いやうです、其ポエトン驛には郵便局もあれば天主教の會堂もあり其會堂に附屬した貧民學校もある、ナカ／＼盛んな驛である、其郵便局の下の方迄私共が來ますと郵便局はナカ／＼立派な家で其椽側に立つて下を通る人を眺めて居る西藏の紳士が一人居たです、ソレが私の顔を見て一寸驚いたやうな顔をして「上へあがりなさい」と突然聲を掛けたから「イヤ私は上に上る必要はない、宿を求めて居るが宿を貸して呉れるか」と斯う云ふた所が「何んでも宜いから上におがりなさい」併し雨の降るのに上にあがつた所て宿を貸して呉

れないと困る「宜しい鬼も角や上りなさい」と笑って居る、コリヤ可怪しい全て友達扱ひ、變だ
 と思ひながら上の方へズツとあがつて行くと英語で「アナタ私を忘れたか」と云ふを見と成程ダー
 チリンに居った時分に學校に居った西藏語の教師私の教師ではない、第二番目の教師ソナに學問
 は深い人ぢやないけれども普通能く物の解る教師である、ソレが郵便局長をやつて居るです、デ
 顔を見ると忘れた男、英語でソウ云ふから自分も察して「イヤ失敬した」と云ふ譯でソレから一別
 以來の挨拶をして一體アナタが西藏に居られると云ふ噂も聞いたが殺されはしないかと案じて
 居ったと云ふフィと氣が附いたのは私の下僕です、英語で話して居るのを見てホケたやうな顔をし
 て居る是れは可けない西藏語で話掛けると何うも其局長は西藏人ではあるけれどもダーチリンで
 生れたのであるから拉薩府の言葉を知らぬ西藏語で話してもデキに英語に移つて了ふ、ソレから
 マア英語で話しました、私は元來英語は上手ぢやない、何うかすると西藏語が出て仕舞ふソコで
 英語と西藏語と双方で話すやうになつたですスルと下僕は非常な疑が起つたものと見えて向ふの方
 へ行つて驛長の奥さんに尋ねる「アリヤ一體ドコのお方か」「アレはジャバンラーマだ」「ジャバンと
 云ふのは何う云ふ所ですか英吉利の國の言葉を使つて居るが英吉利人ぢやないか」「サウは英吉利見
 たやうな強い國だ、英吉利でも驚く程強くなつた國で旭日の昇る如くに此頃は萬國に名が輝いて良
 人は新聞を讀んでサウ云ふ事を知つて居る」と云つた所が下僕は「ソリヤ大變だ私は殺される」と云

つて一遍に青い顔になつて怖くて仕様がないと云ふ、ソレは細君が後に出て來ての話なんです、私
 の下僕はモウビク／＼震えて居る、デマア何うなる事かと非常に心配して居る様子であつたですけ
 れども下僕に對してソナ話をして居る暇もない、其夜は大變立派な西洋風の寢床の上に寝て拉薩
 府を離れてから久々て人間らしい寢方をして寝ました

第三百二十九回 荷物の延着、途中の滞留

カレンボンに着す 其翌日雨を冒かしてカレンボンに着きました其間十五哩、此都會はダ
 ーチリンの東、一の大なる谿を距てありますダーチリンより餘程土地が低い、ソウしてナカ／＼商
 賣は繁昌して居る、却つてダーチリンよりも商ひ高は多い從て上等の物は賣れないけれども安物は
 澤山賣れる、ソレに西藏及びシッキム、ブータンの人は大抵此處で交易をして了ふです、此土地で
 も矢張ダーチリンと同じやうに歐洲人西藏人印度人シッキム人ブータン人チパール人等が住んで居
 ります、此處には耶穌の新教の大きな會堂もあり學校もあり又病院もあり佛教の寺院もあり其他宗
 教の小さな祭り處は餘程あります、此内に住んで居る西藏人でプチエンと云ふ人がある、是れはシ
 カチエから僧侶を廢めて出て來て此方で商賣をして居つて相當の暮しをして居る、私が天和堂の紹

介て支那官吏に託した荷物は其官吏が兵隊の俸給と共にトモリンチエンガン迄運んで呉れてソウしてトモから又支那人が此處迄運んで呉れる譯に約束してあるのです、最早着いて居ると思つてプチユンの所へ來ました所が其荷物は何う云ふ都合か着いて居ない、私は其家に泊つて其荷物を待たねばならん事になつた、プチユンは私が往つた時分には全くの西藏人と思つて取扱うた、暫くすると私の下僕がプチユンに尋ねた所が知らないと言ふ「ありやジャバン、ラーマだと云ふがジャバン、ラーマと云ふのは一體何んな人間か」ソコでプチユンは「ジャバンラーマと云へば前にダーチリンに居つたと云ふことを聞いて居るが其人は西藏の拉薩で醫者さんをして居ると云ふ事を聞いたが其人ではないか」「ウン其人だソリヤ大變だ」と云つてソレで私の所にプチユンが出て来て「今下僕から聞くと是れくですがアナタは前にダーチリンに居られたお方ですか、此處に來ては隠す必要もないから何うか本當の事を云つて戴きたい」「イヤ隠す必要もない昨夜から知れて居る實はボエトンの郵便局から分つて仕舞つたので夫れて隠す必要も何にもない、所て何うも困つたのはアノ下僕だ」と云ふとサア大變心配して何うも青い顔になつて食物を朝から喰べなかつたと云ふ始末

下僕を拉薩府に歸す 何うとか方法を付けて上げなけりやならんせうと云ふプチユンの話、イヤ夫れは何うかして遣らにやアならんが唯だ本人の望に任かせる、此方から何うしやうと云ふ事は云はない、此方は唯本人の望に應じて金を出すと云ふ丈だから本人の望を聞かなくちやア

ならん、一體彼れは國に女房もあつて其女房が孕んで居る其外に子供もあるのだから國の方へ歸りたければ歸る方法を附けねばならん、又モウ恐ろしいから歸るのが厭だと云ふなら此邊かダーチリンに居つて商賣をするも宜からう、夫れ丈の事は此方でも方法を立てるソウすれば手紙を遣つて女房を呼寄せるが宜い其事は何方でも宜いから前から聞いて見て呉れソウ心配するに及ばんと云つて遣りますと下僕の方では再び其主人と私の所に來て、何うかアナタ易を觀て戴きたい拉薩へ歸つて罪になつて苦しむやうな事があるか又歸らずに此處に居る方が宜いかと云ふ事を一ツ觀て戴きたいと云ふものですから、ソリア可けない私の下僕でもなく又私に少しも關係のない者ならソリヤ觀ても遣らうけれども、何分にも私に關係して居る事で若し其易が此處に留つて宜いと云ふ事が出ると私の方の便宜の爲めにお前を瞞して留めて居つたと云ふやうな事に取りられても可けない、又歸る方が宜いと云つた所て其事が出た時分にお前の方で疑うて見れば何うも此處に置いては邪魔になるから僅な金を呉れて追ひ返へしたと云ふ事に取りられると誠に困る、私の方では別段に何うせねばならんと云ふ必要はないからお前の方で此邊に善いラーマがあるだらうからソコへ行つて觀て貰つて決定するが宜い、此事に就ては私は觀て遣らんからと云ふと、イヤ是非觀て戴きたいアナタの御覽になつた事は度々知つて居りますし是迄見ても居りますから何うか願ひたいと云ふ、夫は可けない私は西藏に居る間は仕方なしに遣つたが是からはコンナ馬鹿な真似をする必要はないから可けない